



# 歴史哲学への 招待



小林 道憲

## 歴史哲学への招待

—生命パラダイムから読み解く—

## 第一章 変動する歴史

—歴史は突如として激変する—

### 1 歴史の中のカオス

初期条件への鋭敏な依存 思いがけない結果 安定と激変の繰り返し

### 2 混沌の中に秩序あり

ゆらぎからの秩序 混沌と秩序のはざま 革命の中の混沌と秩序 保守と革新

そして世代 環境への適応

### 3 相互作用からの自己形成

歴史と出来事 出来事のつながり 歴史と相互作用

## 第二章 歴史と偶然

—歴史は偶然の出会いから形成される—

### 1 偶然とは出会いである

偶然からカオスへ 予測できない歴史 因果と目的から外れた偶然 創発とし

ての偶然 出会いとしての偶然 運と不運

### 2 非決定性と不可逆

歴史の分岐点 歴史は決められていない 偶然の中にこそ自由がある 歴史は

逆戻りできない 偶然によって成り立つ歴史

## 第三章 進化する歴史

—歴史は創造と破壊を繰り返して進化する—

### 1 飛躍する歴史

- 2 創造と破壊の反復 歴史の悲慘さ 歴史の飛躍 歴史の相転移  
進化する歴史

生成発展する国家 歴史の中の変わらないもの 歴史の連続と非連続

## 第四章 歴史の認識

—歴史は過去・現在・未来の映し合いである—

- 1 歴史家によってつくられる歴史

歴史的事実は知られるか 歴史に制約される史料 歴史的事実の選択と解釈

- 2 主観と客観の出会い

歴史の中の普遍的なもの 歴史と因果 仮説と図式 歴史の不確定性原理  
主観と客観は分離できない 歴史学の方法を自然科学へ

- 3 過去・現在・未来の映し合い

過去は現在と未来を映す 歴史は鏡である

## 第五章 歴史の理解と記述

—歴史は解釈され物語られることによって動く—

- 1 解釈される歴史

理解とは何か 体験・表現・理解 追体験は可能か 解釈学的循環 歴史の中  
での解釈

- 2 物語られる歴史

歴史記述と文脈 善悪の逆転 物語としての歴史 筋立てとしての歴史観

- 3 相対主義を超えて

歴史の相対主義 相対主義の克服 歴史の中での観測 記述不安定性

## 第六章 歴史の創造

—行為は歴史を開く—

- 1 歴史を切り開く行為



2 自由と創造

行為の投入 未来への行為と過去 行為による認識 歴史の中での行為  
英雄と天才 発明と発見 歴史の中の自由 行為と創造

註

人名・用語解説

あとがき

二〇一一年は、わが国の歴史にとって長く記憶される年になるでしょう。未曾有の大震災と大津波に襲われた上に、原発事故まで重なり、戦慄すべき年になりました。大自然の猛威を前にして、これからわが国はどのような道を行っていけばよいのか、わたしたちはいろいろな形で考え込みました。大自然の抗することのできない威力は、わたしたちに、依って立つ深淵を覗かせ、人はどこから生まれどこに帰るのか、生きるということはどういうことなのか、深く考えさせます。

大自然は突然猛威を奮い、人間に襲いかかつて、無慈悲に人を呑み込み、荒廃のみを残して去ります。それは当然、わたしたちの歴史に大きな爪痕を残します。大自然の猛威は、わたしたちの虚を衝き、揺さぶり、わが国ばかりでなく、世界中に大きな影響を与えました。今後のエネルギー源をどこに求めていくかということだけでも、これは、世界史を大きく方向転換させるほどの衝撃力をもっています。

わたしたちは、いつも、過去から現在への延長上に未来を予測して動いていきますが、歴史は、常に想定外の事件によって、突然その方向を変えていきます。そして、歴史は突如として激変し、思いがけない結果をもたらします。だから、未来はどうなるか分かりません。歴史は予測することのできない偶然によって動くとも言えます。偶然に翻弄され、破壊と創造を繰り返しながら、人類史は変動してきたのです。歴史の瞬間、瞬間のところで、偶然に翻弄されながらも、わたしたちがどの道を選ぶかによって、その後の歴史は大きく変動していきます。それぞれの瞬間が歴史の分岐点であり、どのような方向にでも、歴史は変わっていくものだと言わねばなりません。

とすると、わたしたちが今後どのように対処していくか、その行為のしかたによって、人生同様、歴史は様々に分かれていくこととなります。行為こそ、歴史を開きます。その時、歴史は動くのです。歴史は過去の出来事の単なる羅列ではありません。過去の歴史を出来事の連続とみて、それがある必然の流れに支配された動きと見る方は、歴史を外から見る見方であり、一寸先も分からずに生きていくわたしたちの現実を見てはいません。歴史は、その渦中を生きる人間によってつくられてきました。わたしたちは、歴史法則の単なる操り人形ではありません。歴史を内から見る必要があるのです。

わたしたちの前に道はありません。わたしたちは見えない未来にぶつかり、未来を切り開きながら生きていきます。しかし、そのためにこそ、わたしたちは過去に学

ばねばなりません。わたしたちが歩んできた来し方を反省してみる必要があるのも、そのためです。五里霧中の未来に面した立場から過去を眺めるとき、決してそれは必然の歩みではなかったことがわかるでしょう。

今ではすでに古典になったE・H・カーの『歴史とは何か』は、歴史を現在と過去の対話とみ、歴史の中に現代物理学の不確定性原理を読み込んだもので、今でも価値をもった深い考察です。決して新鮮さを失ってはいません。本書は、E・H・カーの歴史の見方を咀嚼しながら、現在の自然科学の新しいパラダイムから、歴史を過去と現在ばかりでなく、未来との映し合いとみています。そして、不確定性原理を越えて、自己組織化原理を歴史の中に見出すことによつて、E・H・カーの考え方を、もう一度包み越えていこうとしています。

二十一世紀初頭の今日、世界史は再び激動期を迎えています。このような激動期を生きていくためには、わたしたちにとつて歴史とは何なのか、改めて考え直してみる必要があります。本書は、そのような意味で、歴史を切り開いていくために書かれた〈歴史とは何か〉の考察であり、新しい歴史の見方・考え方を提案するものだと言えます。

## 第一章 変動する歴史

—歴史は突如として激変する—

初期条件への鋭敏な依存

二十世紀ももう遠くなりつつありますが、二十世紀は戦争と革命の相次ぐ激動の時代でした。その激動の時代を二十世紀の最初の段階で象徴する事件は、第一次世界大戦の勃発でした。しかし、この凄惨を極めた人類史上最初の世界大戦も、ほんのちよつとした偶然の出来事から出発しています。

一九一四年六月十八日、ボスニアのサラエボ。その日は、バルカン戦争でセルビアがトルコ、ブルガリアを破った記念日でした。オーストリアの皇太子フランツ・フェルディナントと妃のゾフィーが式典の行なわれる市庁舎へ行く途中で、すでに車に爆弾が投げつけられ、十数名の随員が負傷していました。そのため、式典後、皇太子の車は予定の帰路を変更し、フルスビードで駅に向かっていました。ところが、たまたま運転手が道を間違え、曲がり角で車が立ち往生していた瞬間に、皇太子夫妻は、居合わせたセルビア人の大学生プリンツィプに狙撃され、殺害されたのです。

このサラエボ事件を切っ掛けに、ヨーロッパの火薬庫は一挙に爆発。オーストリアはセルビアに宣戦布告し、オーストリアと同盟を結んでいたドイツ、イタリアも次々と参戦。それに対して、バルカン半島を巡ってオーストリアやドイツと対立していたロシアも参戦。さらに、三B政策を推進していたドイツに対抗していたイギリスも参戦。モロッコを巡ってドイツと対立していたフランスも参戦。日英同盟や日仏協商を結んでいた日本まで参戦。第一次世界大戦は、同盟国のドイツ、オーストリア、トルコ、ブルガリアの四カ国と協商側二十七カ国が戦った空前の大戦となつてしまいました。しかも、この大戦は、予想に反して長期化、市民を巻き込んだ総力戦となり、予想だになかった規模に拡大しました。機関銃、毒ガス、戦車、飛行機など、新兵器も次々と登場、戦死者は一千万人にも及んだといわれます。偶然の事件から、ヨーロッパ諸国の後退の切っ掛けとなる第一次大戦は始まったのです。

出来事と出来事は相互に関連し合っていますから、状況が臨界点に達しているようなどときには、偶然の切っ掛けからでも、事件は急拡大します。わたしたちの歴史にしばしば激動期が訪れるのは、そのようにしてです。それは誰も計画したわけではなく、誰も予想していたわけでもありません。ただ、あれよあれよという間に事

実が先行し、巨大な動きが起こされていくことになります。歴史を構成する出来事と出来事は独立したのではなく、縦横に影響し合い、連動しながら激変していきます。ここでは、些細な切っ掛けでも、そのわずかな変動が増幅されて、秩序の崩壊や形成が起きます。

歴史の諸要素は独立したのではなく、相互に浸透し、共振し、ある分岐点に達すると、急激にその局面を変えていきます。そこでは、諸要素が相互作用し、指数関数的な飛躍を起こします。わたしたちの歴史が急激に変動し、秩序の崩壊や形成を起こすのは、歴史がそのようなダイナミズムに基づいているからでしょう。

現に、わたしたちの歴史では、最初は小規模な動きであつても、その動きが多くの人々に影響を与え、それがやがて大きな運動になり、時には政府を崩壊に導いたり、新しい政府の樹立に至つたりすることがあります。例えば、二十世紀末のソ連の崩壊も、小規模な運動から始まりました。体制の硬直化と疲弊、経済の極度な停滞に面したソ連に、一九八五年、改革者として登場してきたのはゴルバチョフでした。そして、彼がその改革の第一歩として行なつたことは、アルコール中毒撲滅運動というある意味で些細なキャンペーンでした。しかし、これが出発点になって、その後、ペレストロイカ（再編）、グラスノスチ（情報公開）など、できうるかぎりの改革をやつていこうと試みているうちに、傷口の方が大きくなり、バルト三国の独立、ロシア共和国の独立を経て、遂には、ソビエト連邦そのものの崩壊を招いてしまったのです。

このような動きも、相乗的な相互作用から起こしてくることなのです。そこでは、事が一旦起こされると、その影響は急速に広まり、集団心理も働いて、大勢の人々が参入してきます。少しでも立ち止まる者がいれば、それをより過激な者が乗り越えていきます。こうして、全体として巨大な規模の変革がなされていくのです。当事者が予測もしなかつた結果が生み出されることがあるのは、そのためです。歴史が常に創造的であるということは、それが幾度となく激変することなのです。

むしろ、自然科学の分野ですが、多くの要素が共振し相乗的に変化するカオス系では、すべての要素がそれ以外のすべての要素に依存し、相互に作用し合つていまずから、その影響は螺旋的に伝播し、ある閾値を超えると、急速に全体を変えていきます。カオス理論が注目した「初期条件に対する鋭敏な依存性」という現象は、このことよつて起きます。気象の激変などがそのよい例ですが、ここでは、香港で蝶々が羽ばたけばアメリカでハリケーンが起きるというような現象（バタフライ効果）が起きます。ここでは、初期状態に見られる要素のわずかな誤差が増幅され

て、やがて系全体を予測不可能な挙動に変えてしまいます。多くの要素が互いに動的に連動している系では、一つの要素の小さな変動でも、その差は拡大して他の要素に伝えられ、その結果、大きな差異をもたらすのです。

人間の営む歴史でも、歴史の大きな変化は、その中のちよつとした変化から起きるものです。片隅で偶然に生じた事件、片隅で偶然になされた発明や発見など、わずかなゆらぎが、結果として、戦争や革命など歴史の大変動をもたらします。わたしたちの歴史においては、すべての出来事が連動し反応し合っていますから、片隅の些細な動きでも、相互連関性の網の目を通じて増幅され、大きな変動となって現われるのです。

例えば、わが国の歴史でも、明治維新が薩長藩閥政府によって推進されたもともとの原因を辿っていきますと、関が原の戦い後の徳川方の西国政策にまで至り着きます。関が原の勝利後、家康は、関が原の戦いを有利に進めるためにまえておいた約束に従って、東軍に協力した豊臣系武将を西国に集中配置し、島津や毛利も旧地にとどめ、一種の間接統治をしました。そのため、江戸幕藩体制では、幕府の命令で大名の所領をかえる国替え政策を取れたのは東国までで、西国には及びませんでした。このことが幸いして、島津の薩摩や毛利の長州は、国替えなしで、二百六十年実力を蓄えることができたのです。それが、幕末になって、倒幕維新の原動力になっていったことはよく知られています。明治の大改革が薩長によって推進されたのも、関が原の戦い後の徳川の西国政策という初期値に敏感に反応したためだったのです。もしも、このような政策が取られなかったなら、その後の近世封建制のあり方も大きく変わっていたでしょう。薩長による明治維新もなかったかもしれません。

#### 思いがけない結果

歴史を、無数の出来事が相互作用し変動していくカオスとしてとらえるなら、歴史を動かすものは個人か社会かという問題も乗り越えることができます。歴史を動かす傑出した個人の事蹟には、過去から現在に至るその社会のあらゆる出来事が集約しています。そして、そこから、新しい創造的出来事が生み出されてきます。傑出した個人は時代を反映するとともに、時代を形成します。新しい社会をつくる革命家にしても、新しい技術を開発する技術者にしても、傑出した個人の行動は、他の多くの人々の行動様式を変え、大勢の人々を巻き込みながら、歴史の方向に決定的な影響を与えます。臨界点にある砂山がほんの一粒の砂の落下によって大規模

な雪崩を起こすように、社会の片隅から起こされた個人の行動が集団を糾合し、社会を一変させます。歴史を動かすものは、集団であると同時に個人なのです。

だから、一人の人間の行為は、その行為者が意図しなかった結果を生むことがあります。個人の意図と、それを活かす社会の文脈は、必ずしも一致するとは限りません。歴史の相互連関は思いがけない結果を生みます。意図されたことと実際に起こったこととの間にしばしば大きな差異があるのは、そのためです。逆に言えば、革命でも、戦争でも、それが始まったときには、それがこれからどれほど大きくなっていくか、誰にも分かっているはずではないのです。

例えば、ルターが始めた宗教改革も、ルターの意図に反して思わぬところへ発展しました。宗教改革は、一五二七年、ルターがヴィッテンベルク城の扉に九十五条の論題を張り出し、カトリック教会に抗議したことから始まりました。しかし、それは、やがて、ルターの意に反して純粹の宗教論争を離れ、カトリック体制に不満を抱いていた各階層の一大国民運動に発展していきました。さらに、それは騎士戦争や農民戦争にまで拡大、それを鎮圧することによって力を得た諸侯同志が、また新教派と旧教派に分かれて争う混迷状態になりました。十七世紀前半の三十年戦争の改革を目指していただけであって、これらの多くの戦争や混乱はもろろんのこと、プロテスタントの成立さえ意図していたわけではありません。しかし、歴史は、度々、当事者さえ意図しなかった思わぬ方向に動いていくものなのです。

#### 安定と激変の繰り返し

もつとも、歴史は常に激動しているわけではなく、長い間ほぼ同じような状態が持続する安定期もあります。そのような安定状態では同じようなことが繰り返され、人々の行動も既成の規範に則って行なわれます。しかし、このような安定状態は、予期できない攪乱に対しては弱く、そのため、外からの攪乱や内からの攪乱に出会って安定状態が保てなくなると、そこでのゆらぎが増幅されて、急激な変動が訪れます。一旦激動しただすと、予測不可能な変動に見舞われます。その動きは、もはや誰にも止められません。歴史は、このような安定と激変を繰り返します。

自然科学のカオス理論でも、同じような現象が認識されています。無数の要素が連動して相互作用している系同士を結合させたカオス結合系においては、秩序状態と混乱状態を繰り返し遍歴していく現象が見られます。秩序状態では、初め同じような性質をもっていた各要素は次第に多様化し、分化していきます。しかし、そ



のような状態もいつまでも続くわけではなく、突如として秩序の不安定化と混乱が生じます。ただ、この混乱した状態は単なる混乱ではなく、何らかの方向性をもった運動を含みます。そして、その混乱した中からでも、ある規則性と構造が生成してきます。多数の要素の相互作用から秩序が生まれたり、秩序が崩壊したり、それを繰り返すこのような現象を、カオス理論では「カオスの遍歴」と言います。カオスの遍歴は、多くの要素が縦横に絡んで変化する系においては普遍的に見られます。しかも、それは、マクロ的な決定的原因がなくても起こります。

考えてみれば、このような現象は歴史そのものだとも言えます。人と人、人と物、情報と環境など、複雑な相互作用によって成り立つわたしたちの歴史は、発展や成長、安定や挫折、崩壊や衰退を繰り返しています。しかも、安定期でも崩壊の萌芽はあり、崩壊期にも秩序形成の努力はなされています。

カオス系では、片隅で起きた動きが巡り巡って増幅され、大きく発達するとともに、その動きがまたもとの要素へ戻ってきて、もとの動きを変えていくという現象が見られます。自己の作用が自己自身へと回帰してくるこのような再帰的循環によっても、その系はダイナミックに変動していきます。ここでは、小さな原因が多くの結果をもたらすとともに、その結果が原因に回帰して、また多くの結果を生み出します。因果は循環していますから、一つの原因からでも多数の結果が生まれます。だから、ここでは、もはや一因一果の因果律は成り立ちません。

歴史も、また、無数の出来事が相互に依存しながら生成消滅する過程によって成り立っています。ここでは、原因と結果は再帰的に循環していますから、これまでのような歴史の単純な原因追究は不可能です。というより、一つの歴史的结果が起きてくる原因を、特定の原因あるいは少数の原因に求めていこうとする探究方法は、歴史認識を誤るべきでしょう。むしろ、原因より過程を重視すべきであり、しかも、その過程は機械的な因果律では解けないのです。さらに、その歴史過程そのものが新しい規則と秩序を生み出していくのですから、もはや、大きな変化を理解するのに、包括的な因果法則をもちだす必要はありません。

幕末から維新に至る日本の激動を例にとりますと、これも一つの原因で説明することはできないでしょう。維新の発端をペリー来航と日米和親条約の締結に見ることは定説になっています。これが発端になり、やがて安政の大獄を機に、わが国の政治情勢は臨界点を超え、変化が変化を呼ぶ激動期に入ります。幕府の弾圧に対する反対派の抵抗運動はますます激しくなり、尊皇攘夷と王政復古が叫ばれるようになったのです。もっとも、この尊皇攘夷運動と王政復古運動も、この時期ではまだ

倒幕運動にまでは至っていません。倒幕運動を先駆した長州藩でさえ、七卿落ちや禁門の変後は、もっぱら守勢に回っています。薩摩や長州が反転攻勢に出るのは、薩長同盟の成立と第二次長州征伐での勝利を機にしました。しかし、それでも、幕府方は、大政奉還と公議政体（天皇の下での大大名の衆議）の樹立の方向を打ち出し、薩長を牽制していました。それに対して、薩長は結局武力に訴え、鳥羽伏見の戦いで勝利を収めて幕府を倒し、薩長政権を樹立。西国諸大名も雪崩を打って薩長主導の新政権を支持、以来、薩長藩閥政府（明治政府）による急激な変革が堰を切ったように連発されていきました。版籍奉還、廃藩置県、秩禄処分、身分制の廃止などです。結果として、幕府はもちろん、大名も藩も武士の身分も瞬く間に消滅してしまいました。このような結果に至ることは、おそらく、幕末から維新までを駆け抜けた人々のうち、誰も予想しなかったことでしょう。

明治維新に至る経緯は、外圧という攪乱によって生じた変化が、雪崩のように、巡り巡って大規模な体制変革にまで発展した動きであって、それは必然的な過程だったとはとうてい言えません。幕末から維新に至る大変革の過程をつぶさに眺めれば、それは、その時々どちらに転ぶか分からない変化に少しづつ押し流されていくうちに、ついに大変革に至ってしまった動きだったと言わねばなりません。

歴史の動きを、外からではなく内から、歴史を動かしている当事者から眺めるなら、当事者自身は、いつも五里霧中の状態で試行錯誤を重ねながら動いています。だから、当事者には、もともと、結果に対するそれほど明確な見通しがあるわけではないのです。むしろ、事実が先行し、それに対して右往左往しながら対処しているうちに、当事者のうち誰一人として計画も意図も予測もしなかった巨大な結果が生み出されていくのです。これは、小さな変化の積み重ねが巨大な変化を生み、大きな変化が決定的な原因なしに生じる例です。ここでは、歴史の過程そのものが新しいルールと秩序を生み出していきます。

自然科学のカオス系にも、収束、振動、回帰、分岐、分散、飛躍などを繰り返し、秩序化と無秩序化、安定化と不安定化を遍歴する現象が見られますが、これも、結果を予測することのできない複雑な相互作用によっています。ここでは、それ自身のダイナミクスからおのずと新しいルールや構造が生み出されますから、もはや単一の決定論的法則を立てる必要もありませんし、単純な要素に還元する必要もありません。

## ゆらぎからの秩序

これも、むしろ自然科学に属することですが、プリゴジンらが提唱した自己組織化理論の明らかにしたところによりまずと、平衡から遠く離れた開放系では、無数の要素の緊密な相互作用からおのずと新しい秩序が生成してきます。自己組織系は、外部からの変動に対しても内部からの変動に対しても敏感に反応し、柔軟に自己自身を作り変え、環境に適応していきます。このような動きを、プリゴジンは「混沌からの秩序」という標語で表現しました。

確かに、人間の歴史も、混沌から秩序をつくり出す自己組織系ともみることができそうです。無数の人間が相互に作用し合っている人間社会も、間断なく外部から人や物、金銭や情報が入り込み、平衡から遠く離れた状態にあります。したがって、それは、環境に適応するために、みずからが住む社会の構造や機能を作り変えていています。

自己組織系では、最初小さなゆらぎがあり、そのゆらぎが増幅されて、ある臨界点を超えると、急激に新しい秩序をつくっていきます。ちょうどそれと同じように、人間社会にも常に内部にゆらぎがあり、それが環境の変動に応じて増幅され、ある分岐点を超えると、新しい形態と構造を生み出していきます。

もっとも、自己組織系をカオスの一種としてみますと、ゆらぎは必ずしも新しい秩序をつくるとは限りません。逆に、秩序の崩壊をもたらすことがあることにも注目しておかねばなりません。ここでは、一つの要素のわずかなゆらぎでも全体に波及して、全体の秩序の崩壊を呼び起こします。特に、不安定な状態ではわずかのパラメータをとっているようなところでは、ちょっとしたゆらぎでも、系全体は崩れていきます。人間の歴史でも、第一次大戦のように、小さな衝突が大戦争に発展するようないふことがあつたのは、そのことによりまず。こうして、歴史は、へゆらぎからの秩序へとゆらぎからの無秩序を同時に描きながら変換してっていきます。

そのような観点から歴史をながめてきますと、反逆者や異端者の役割もよく見えてきます。反逆者や異端者によって一つの社会の内部に起こされた逸脱傾向は増幅され、それがもはやその社会の既成の秩序維持機構によって律しきれなくなつたとき、その社会は崩壊し、新しい形態と秩序が生み出されます。これら反逆者は、旧体制との抗争も辞さず、大衆の共感をも呼び込み、社会を変革していきます。反逆者は、社会の崩壊と形成の動きを同時に促進し、社会の進化や発展に必要な原動力

となります。

例えば、中国革命にも長いゆらぎの歴史があり、そこでは、改革や革命に乗り出す革新者が多数登場してきています。アヘン戦争の敗北やアロー号事件で衝撃を受けた清朝は、一八六〇年、洋務運動を開始、ヨーロッパ式軍制の採用、造船所の建設、産業構造の整備、留学生の派遣、外国語学校の開設など、近代化策に乗り出しましたが、十分な成功を見ませんでした。さらに、日清戦争の敗北を機に、一八九八年、変法自強運動を起こした康有為などは、日本の明治維新に倣って、立憲制の導入、科挙の改革、近代的な学校の創設、新式陸軍の創設、商工業と農業の振興など、政治改革に乗り出しました。しかし、西太后など保守派の策謀により挫折、康有為らは日本に亡命しました。これら洋務運動や変法自強運動は、中国革命のゆらぎの段階にあたります。ゆらぎは、多くの場合、旧体制によって摘み取られたり弾圧されたりしますが、しかし、これらのゆらぎは決して無駄な動きではありません。

実際、中国革命の歴史でも、これらの試みは、結局、孫文による辛亥革命となって結実します。一九〇五年、孫文は、東京で中国同盟会を結成、民族の独立、民権の伸長、民生の安定を掲げて、清朝打倒を目指し、何度か武装蜂起を繰り返しました。そうこうするうちに、一九一一年、清朝による民間鉄道の国有化に反対して四川省で暴動が勃発したのを機に、武昌で新軍兵士が蜂起、革命政権が樹立され、清朝は崩壊、中華民国建国に至りました。激動の歴史は、ある臨界点を超えると一挙に進展しますが、そこに至るまでには長いゆらぎの段階があり、多くの試行錯誤が繰り返されるものなのです。

#### 混沌と秩序のはざま

歴史は、混沌から秩序へ、秩序から混沌へ、崩壊と形成を繰り返しながら変動していきます。秩序の中に無秩序があり、無秩序の中に秩序があることによつて、歴史は変動します。混沌と秩序の動きが螺旋的に絡み合つて、歴史は動くのです。ここでは、無秩序から自発的に秩序が形成されますが、その秩序も、あまりにも固定されると硬直化し、外部の攪乱に対して対応力を失います。そうすると、その固定化された秩序の中にゆらぎが起きて、やがてそのゆらぎが拡大して、秩序は解体に向かいます。異分子によつて起こされるゆらぎが有効に働いて、一つの秩序状態を転換することができるのも、このような時期においてです。その結果、無秩序状態がもたらされ、武力衝突や内戦、群雄の割拠、民衆の暴動、闘争や混乱、倫理規範の衰弱や不信が横行します。しかし、この無秩序状態は、従来の社会規範よりも

個々人の試行錯誤が重視される時代でもあり、そのゆらぎを通して、そこからまた新しい秩序が形成されていきます。こうして、歴史は、混沌と秩序のはざまで、生成と崩壊を繰り返しながら変動していきます。

わが国の長い歴史を一瞥しても、それが、混沌から秩序へ、秩序から混沌へ、形成と崩壊を繰り返しながら変動してきたことが分かります。

弥生時代から古墳時代、飛鳥白鳳時代を経て奈良時代に至るわが国の古代国家の発展期も、水稲稲作の伝播、鉄器の普及、騎馬技術の流入、渡来人の来着、仏教の伝来、律令制の導入など、新文物や新制度の流入によって休むことなくゆらいでいた時期でした。そして、そのゆらぎから、大和政権の樹立、大化の改新、律令制の確立へと、何段階かの飛躍をしながら、秩序化に向かった勃興期でもありました。

それに対して、奈良平安時代は、その中に多くの混乱と変動はあったにしても、律令体制のもと、比較的安定した時代だったと言えるでしょう。

しかし、この比較的安定した時代も、平安末期に至ると、新興武士団の抬頭、源平の騒乱、天変地異や飢饉の頻発などで崩壊、時代は再び無秩序化の時代に向かいます。と同時に、この混沌化を通して、この時代に抬頭してきた武家勢力によって、鎌倉時代の新秩序が確立されました。確かに、この中世といわれる時期にも、南北朝の争乱や室町政権の弱体化など、波瀾とゆらぎはありました。そして、このゆらぎが室町末期になると一挙に増幅、応仁の乱から戦国時代へと突入し、時代は下剋上の無秩序時代を迎えます。この時代は、秩序から混沌へ、秩序崩壊の時代だったと言えるでしょう。

とは言え、この戦国時代という混乱期にも秩序化の萌芽はあり、信長・秀吉の統一事業を経て、家康による江戸幕府樹立に至って、再び秩序が回復、幕藩体制という日本近世の新秩序が確立し、長い平和と秩序の時代が訪れました。確かに、この江戸時代の安定期も、享保の改革、寛政の改革、天保の改革など引き締めの時期と、元禄時代、田沼時代、家斉の大御所時代など弛緩の時期と、緊張と弛緩を繰り返し、決して固定化された時代ではありませんでした。さらに、江戸後期に至れば、町人階層の抬頭や蘭学者による鎖国政策への批判など、次の時代を先駆する新しい動きが見られます。この幕藩体制という秩序がゆらぎ、幕末の混乱を呼び起こしたのは、大塩平八郎の乱、天保の改革の失敗、ペリー来航に至る一連の動きでした。そして、このペリー来航を一つの分岐点にして、日本社会は急激に無秩序化、倒幕運動の激化から幕府の滅亡へと、旧来の秩序は瞬く間に解体しました。

しかし、この秩序崩壊の時期にも、大政奉還、王政復古、明治新政府の構築へと

向かう秩序形成の動きも、同時に進行しています。薩長藩閥によって樹立された明治の新しい中央集権体制は、幕末から維新にかけて日本が巻き込まれた西洋近代文明の拡大という大きな世界史の変動に対する見事な適応でした。この時期に、日本の歴史の振動波は、それまで以上に、近代の地球的大な文明発展の大波と接合したのです。かくて、明治以後の日本近代史も、世界史の大きな変動に否応なしに引き込まれ、緊張と崩壊、再秩序化の大変動を描きました。

日本の歴史も、混沌から秩序へ、秩序から混沌へ、形成と崩壊の運動を繰り返しながら、

同時に世界史の大きな飛躍と共鳴して、その構造や様式を大きく変容させてきたのです。

### 革命の中の混沌と秩序

歴史が秩序から混沌へ、混沌から秩序へ、休まず変動していくものだとすると、その転換期には、旧来の秩序の崩壊と新しい秩序の構築が同時進行するような時期があることが分かります。革命は、そのような激動の最も典型的な現われです。革命は、政治制度や社会制度の急速で根本的な変革であり、しばしば暴力を伴います。支配者層と被支配者層、または支配者層間での不信や不満、齟齬や憎悪が限界を超える、それまで試みられてきた少数の例外者の抵抗運動などが共感を呼び、急激な構造変動が始まります。

もともと、革命は、必ずしも大衆の暴動や蜂起によってのみ起きるわけではなく、むしろ、多くの場合、大衆運動を操作する機会に恵まれたエリートや革命集団によって起こされます。不満を抱いたエリートや革命集団が大衆の不満を糾合し、これを政治的に利用し、体制打倒を目指します。時の政府や権力者への非難を含むイデオロギーは、その道具です。事が一旦起きると、事あれかしと願う人々が多種多様な思想をもって集まり、大衆の付和雷同も手伝って、事が急激に進展していきます。都市の暴動や農民の反乱などもあり、激烈な闘争や内乱も起きます。そして、それは、単に国内だけの動きだけではなく、まわりの国際情勢や世界史の動向とも連動します。

こうして、旧体制が崩壊し新体制が樹立されたとき、革命は成就し、新しい政治秩序や社会制度が創出されます。しかし、それは必ずしも革命当初からあったプログラムではなく、相互作用を繰り返しながら、その過程を通して生み出されるものなのです。その結果も、革命を推し進めていった当の人々が予見もしなかった結果である場合が多いのです。革命は、崩壊と形成を同時に描きながら、内外の環境変

動に対応しようとする歴史の大きな変動です。常に生成変化する歴史は、このような変動を免れることはできません。

フランス革命なども、このような歴史の変動の典型でした。一七八九年、国家財政の窮乏と凶作によって経済状態が極度に悪化していたパリで、課税に反対していた貴族たちは三部会の開催を求め、第三身分の市民たちは国民議会を組織しました。しかし、この動きはさらに過激化し、市民によるバスティーユ牢獄の襲撃、パン暴動、農民反乱の拡大へと加速化していきました。この動きを糾合していったのは、私有財産を守ろうとする自由主義貴族や上層市民で、彼らは、封建的特権を廃止、人権宣言を出すことによって革命の主導権を奪い、イギリス流の立憲王政を実現しました。ところが、オーストリアやプロイセンからの革命への干渉を避けるために、フランスは対外戦争に突入、パリに集まった義勇兵が過激化し、普通選挙による国民公会を成立させ、共和制を樹立しました。この動きが行き過ぎて招いたジャコブ派の恐怖政治は、テルミドールの反動によって終焉し、一七九五年、共和国憲法制定に向かいますが、最終的にはナポレオンが登場し、総統政府が成立。ここによりやく、絶対王政から国民国家への根本的変革がなされたのです。

しかし、このフランス革命の成果は、無数の出来事の相互作用の中から生み出されたものであって、それを推し進めた当事者がまえて予期していたことではありません。さらに、このフランス革命には、アメリカ独立戦争による疲弊やヨーロッパ各国の革命への干渉など、まわりの国際情勢や世界史の動向も大きく影響していました。と同時に、その成果は、逆に、ヨーロッパ各国の国民国家化を促すという結果も招いたのです。フランス革命は、崩壊と形成、破壊と創造が同時に進行した歴史変革の典型例で、そのことによって、変動する国際環境に積極的に適応しようとした動きであったと言えるでしょう。

もともと、このような歴史の変革は、政治や社会においてだけ起きるわけではなく、およそ歴史というものをもつもの、科学や技術、芸術や宗教などでも起きます。なかでも、トーマス・クーンが明らかにした「科学革命」の構造は、一面、政治革命の構造と同じようなパターンを描いています。

科学者は、通常、科学者間で共通に認められているパラダイムに基づいて、同じ規則、同じ基準で研究を進め、拡大していきます。ところが、その拡大がある一定の限界にくると、変則性が発見され、既存のパラダイムでは説明できない現象が見出されてきます。かくて、通常科学は危機に瀕し混乱に陥りますが、この混乱から、変則性をも説明できる新しいパラダイムが発見されてきます。このように、既存の

パラダイムが、これまで進めてきた自然の探究に対して適切に機能しなくなったとき、科学革命は始まります。

もちろん、新しい科学革命はいきなり始まるわけではなく、通常、伝統に縛られた状態と伝統を打ち壊す動きの間で緊張を保つ混乱期があります。ここでは、多くの理論が登場するとともに、科学者間の闘争が始まります。一般に、通常科学は既存のパラダイムに固執して、根本的な革新を抑圧する方向に働きますから、新しいパラダイムの発案者は、最初、既存のパラダイムに基づいて研究する科学者集団から抵抗を受けます。

集積されたすべての変則的データに秩序を与える新しい方法を発見した革新的な理論は、このような抵抗を打ち破って登場してきます。そして、この革新的な考えは、研究者たちの取り組みの変化をも引き起こし、科学研究分野で、それまでとは違う流れが起きてきます。そうすると、既存のパラダイムの大規模な瓦解が起き、古いパラダイムは新しいパラダイムによって置き換えられ、自然像や科学像の大転換がもたらされます。現に、プトレマイオスの天動説からコペルニクスの地動説への転換、ニュートン力学から相対性理論や量子力学への転換など、科学における革命的転換はこのようにして起きたのです。一旦パラダイム転換が起きると、今まで見慣れていたものも、まったく違った新しいもののように見えてきます。パラダイム変革が起きるときは、それとともに、世界自体も変革を受けるのです。

その意味では、パラダイム転換は建設的であると同時に破壊的です。科学革命の機に、科学は飛躍し、伝統から断絶します。科学の発展は、知識の累積から起きるのではなく、画期的な飛躍によって起きるのです。その面から言っても、科学革命は政治革命に似ています。科学革命も政治革命も、危機に瀕し、そこから、その危機を乗り越えるような新構想が登場することによって成功するのです。科学も、政治や社会同様、歴史的に変転していくものであり、崩壊と形成を繰り返しながら変動していくのです。

#### 保守と革新、そして世代

政治革命にしても、科学革命にしても、そこにはいつも保守と革新、守旧派と改革派の対立・抗争があります。保守勢力は、自分たちが築いた旧秩序に固執し続けます。しかし、その中で新たに力をつけてきた新興勢力が革新勢力となつて、これに対抗します。わが国の歴史でも、平安時代の貴族政治の下で成長した武士勢力が貴族政治に反抗してやがて武家政権をつくつたことや、江戸時代の武家政治の下で



育った町人階級がその財力によって新興勢力として抬頭してきたことなどは、その代表的な例です。科学革命でも、例えば、電磁場の媒質としてのエーテル<sup>4</sup>の存在を否定した相対性理論は、その存在を仮定する十九世紀末の電磁気学を突き崩すようにして登場してきたのです。このような保守と革新の抗争は、革命的な激動期ばかりでなく、絶えず破壊と創造を繰り返してきた歴史を駆動してきた大きな力と言えるでしょう。

世代間闘争も、歴史を動かす大きな力です。革命や転換期など、歴史的危機には、特にこの世代間闘争が現われ、古い世代と新しい世代の緊張や葛藤を通しての交代が見られます。世代とは、同一社会、同一時期に生まれた人々の集まりです。同じ一つの世代は同じ歴史的経験をもち、体験を共有しています。しかも、この共通体験は、同じ一つの世代に属している人々の人生の全体を支配します。ことに、青年期に経験した歴史的経験は貴重な体験となり、その共通体験に対してどう考えるかには差異があるにしても、それは世代に共通した考え方や視点を形成します。

わたしたちの歴史は、過去を代表する世代と、現在を代表する世代と、未来を代表する世代の緊張によって成り立っています。老人は過去を代表し、壮年は現在を代表し、青年は未来を代表します。この過去・現在・未来三つの世代が現代という同一の時代に共存し、拮抗しています。三つの世代は現在という局面に共存しますが、しかし、彼らはそれぞれ三つの異なった時間を生きています。そして、その葛藤の中から新しいものが創造され、かくて歴史は動き変転していきます。

なるほど、新しい世代も古い世代がつくった社会に産み落とされますから、新しい世代にも古い秩序が埋め込まれています。しかし、新しい世代は、自分自身に埋め込まれている過去の運命を乗り越えていきます。世代は継承によってだけでは成り立たず、新しい世代は新しい試みをしていきます。新しい世代は新しい生活様式を携えて、攪乱や紛糾も辞さず、古い世代がつくった秩序の中に参入してきます。ちように、音楽の進走曲のように、若い世代は年老いた世代を追いながら、これを追い抜いていきます。そして、新しい歴史を創造します。科学革命でも、斬新なパラダイムを案出し目覚ましい変革を成し遂げるのは、ほとんど例外なく、若い世代です。しかも、この新しいパラダイムに雪崩のように参入してくるのも、若い世代です。世代は、知識や技術、芸術や文化を、新しいものへと変化させていく原動力です。

人は死に、人は生まれます。人生は交代し、時代は転換します。新しい世代が登場し、古い世代が退場していきます。こうして、歴史は、崩壊と形成を繰り返す

がら、常に更新されていくのです。

#### 環境への適応

わたしたちの社会は、外部の環境と物資や情報をやりとりしている開放系であり、常に外部環境の変化を読み込みながら、自分自身を作り変えていきます。外部の環境は不確定そのものであり、絶え間なく変動しています。この絶え間なく変動する環境に適応するために、わたしたちの社会は、みずからの制度や組織、構造や機能を組み替え直すことによつて、環境との矛盾を克服していきます。

現に、一国の歴史を一瞥しても、自国を取り巻く国際環境は休まず変動しています。そのために、国家は、海外からの新しい文物の流入にさらされたり、外国の威圧に面したり、国際環境との矛盾に面することがあります。このような厳しい国際環境の中を生きのびていくためには、自己自身の体制や制度を変革することによつて適応していく以外にないでしょう。

例えば、わが国の幕末から維新にかけての大きな変貌も、外部の国際環境の激変を契機とするものでした。産業革命をいち早く達成した欧米列強の圧力は、植民地と自由貿易を求めて、わが国にも開国の要求となつて津波のように押し寄せてきました。幕府は、それに対して鎖国政策を転換、開国に踏み切ります。その後の幕府の解体から明治新政府の樹立に向かうわが国の動きは、欧米諸国の抗することのできない進出に直面したわが国が、自国の存続をかけて、みずから積極的に欧米の新制度や新しい社会機構、産業構造、文化や思想を受け入れて、自分自身を大きく作り変えていく動きでした。その動きは、激動する対外環境に対して、自国の存続をかけた構造変革だつたと言えるでしょう。わたしたちの社会の歴史は、絶えることなく変動する社会環境への適応の歴史でもあり、それはみずからの構造変革によつて可能なのです。

一 社会の歴史ばかりでなく、長い人類史を鳥瞰しますと、歴史はまた自然環境への適応の歴史でもありました。人類史を取り囲む自然環境も幾度となく変動してきましたが、この環境変動に適応するためにも、人類は、常に新しい組織や制度、社会構造を創出し、外部環境との矛盾を克服してきました。と同時に、人類は新しい技術を開発し、積極的に自然環境を改変し、環境を形成してきました。人類は、環境に対して単に受動的ではなく、能動的に振る舞い、環境を改造してきたのです。環境の変動に対応するのにも、環境の改変なしには不可能でした。石器の製作と使用、牧畜や農業の開始、都市文明の形成、科学技術の発達、産業の振興など、どれ

をとつても、人類史は環境改変能力の向上の歴史でもありません。しかも、そのようにして創造された環境に応じて、歴史はまた変化していきます。人類は、自己の中に環境を受容するとともに、環境の中に自己自身を創造してきたのです。

歴史は、生命同様、環境との相互作用から自己自身を形成する自己創出系です。わたしたちの歴史は、環境との相互作用を通して、絶えず新しい秩序や構造を創発していきます。歴史は新しい環境をつくっていくとともに、そのつくられた環境がまた新しい歴史をつくっていきます。歴史と環境は、相互に限定し合いながら、互いに変動していくのです。

人間の歴史は、多くの攪乱要因によって悩まされ迷いながら自己形成してきた努力の軌跡です。歴史は常なる生成の世界であり、終わりのない変転なのです。

### 3 相互作用からの自己形成

#### 歴史と出来事

歴史は、間断なく生成する出来事から形成されています。ただ、出来事だけが生じてきません。歴史は起こったことと起きることによって成り立ち、しかも、起きることは、それまでの起こったことすべてを含んで立ち現われてきます。ある一つの出来事が生じてくるには、それ以前のすべての出来事が縦横に関係し、孤立した出来事は存在しません。一つの出来事は、あらゆる出来事の集結として出現してくるのです。そして、出現してきた一つの出来事は、それ以前の出来事を集約するとともに、新しい要因を一つだけ付け加え、次の出来事に連なっていきます。わたしたちが歴史的事件というとき、その言葉で、それまでの歴史の動向や意味が開かれるような事件、さらに、その後の歴史の方向を左右するような事件を意味しているのは、このことを背景にしています。二十世紀の第一次大戦、第二次大戦、冷戦の終結など、すべてそのような意味をもっています。

しかし、過去の歴史的出来事は、直接見たり聞いたりすることはできません。それは、かつてあったには違いありませんが、今はどこにもないものです。出来事は直ちに消え去り、過ぎ去ってしまいます。だから、それを過去と言いますが、過去はすでに存在しません。それは、わずかに記録や痕跡を通して推測されるだけで、記憶や記録の中にだけ生きているにすぎません。とともに、今起きていること、現在の出来事もすぐに存在しなくなります。出来事は、現われたかと思うと、すぐに消滅します。人の行為も、現われたかと思うと、すぐに消え去ります。出来事は

不断に消滅しています。ただ、出来事のみが推移します。出来事は瞬間瞬間の一回きりの出来事であり、一瞬しか存在しません。次の瞬間には、出来事の組み合わせは変わります。出来事の瞬間ごとの離合集散、それが歴史の推移であり、生成変化なのです。

歴史を形成する出来事は継続的に更新されていきます。そして、一つの新しい出来事が生成してくることで、他の出来事やそれまでの出来事のあり方が変化します。新しく出現してきた出来事は、新しい事態をつくり出します。歴史はあるのではなく、成るのです。歴史は、休むことなく新しさに向かって前進する運動であり、展開なのです。

出来事は関係においてあります。他の出来事との関係から切り離された出来事は存在しません。出来事は、他との関係の中で生成します。そのため、一つの歴史的事件の価値も、次の新しい事件が登場することによって、大きく評価が変わります。出来事と出来事の間は絶えず変動しており、その関係の変動に応じて出来事の意味や価値も変動し、その変動とともに、また出来事も変動します。こうして、歴史は常に変動します。

#### 出来事つながり

歴史は、無数の出来事の相互連関から成り立っています。出来事は絡み合い、互いに関係し合っています。出来事は、出来事の相互連関の網目に出現し、それまでの諸関係を取りまとめ、何かを引き起こします。相互連関の世界では、出来事は互いに区別されると同時に連結されていますから、出来事と出来事は切り離して取り出していくことはできません。また、相互連関の世界では、出来事は他の出来事との連関において規定されていますから、一つの出来事をそれだけ切り離して取り出してきても、それだけでは理解することができません。出来事の意味は、出来事と出来事をつながりからしか把握できないのです。かくて、相互連関の世界では、一つの出来事は他の出来事に影響を与え、その影響がまた他の出来事に及ぼされ、こうして生成変化はやむことがありません。出来事と出来事は相互に浸透し、相互に連関し合って、歴史の生成変化を担っているのです。

歴史は、相互連関からおのずと自己自身を形成していく自己組織系です。それは、無数の要素が相互に運動し新しい形態や構造を創発していく自己創出系なのです。初期状態に見られる極く小さな動きが相乗的に増幅されて、歴史全体に予測不可能な大きな変化をもたらす現象が見られるのは、このことによります。人類の歴史で

も、片隅で起きた些細な事件や何気ない発明発見が歴史を一変させてしまったり、地球上の遙かに隔たったところで生じた事件でも、思わぬところに大きな影響を与えていることがあります。歴史は、事件と事件が重々無尽に關係し動的に変化し続ける過程であり、運動であり、活動なのです。

歴史においては、一つの事象は他の事象に含まれ、他の事象は一つの事象に含まれます。諸出来事は、互いに他を含み、生成してきます。したがって、一つの出来事の中には、他の多くの出来事が流入し、他の多くの出来事が参加しています。そして、その一つの出来事から、また、多くの出来事が生み出されていきます。一つの出来事は、多くの出来事をそのうちに統合するとともに、そこから多くの出来事を出現させる歴史の結節点なのです。

ここでは、部分と部分の相互連関から全体が形成されるとともに、その全体がまた部分部分に反映し、全体を変化させていきます。そのため、部分のわずかな変化だけで、全体が大きく変わっていきます。その意味では、歴史の変動を考える場合、全体を映す部分に注目しなければなりません。全体は、何もせずに変わっていくのではありません。部分は、全体を読み込みながら、全体を乗り越え、全体を変革していくことができます。歴史における不断の創造は、個人が社会を限定し、行為することによってです。個々人の行為の中に全体が表現されることによって、歴史は変動していきます。こうして、歴史は刻々と新たな世界を形成し、片時も同じ所にとどまることがありません。歴史は、絶え間なく自己自身を再配置し続ける動的系なのです。

### 歴史と相互作用

歴史は、出来事と出来事の相互作用から、休むことなく自己自身を形成していきます。人の交流、物や金、情報や技術の交換、交易・外交・戦争、民族移動や征服者の侵入などは、歴史的相互作用の一例です。人は、これらの相互作用を通して、闘争・衝突・征服、移住・移転、交換・取引・交渉・接触、拮抗・競争、協調や妥協などを繰り返し、そこから新しい構造や組織を創造していきます。

ここでは、無数の人々、無数の出来事が、相互に作用し合い、相互に反応し、相互に変化していきます。しかも、その変化がまた他の相互作用にも波及し、その影響は全体に及びます。一人の行為者の行為は、他の人々の行為を呼び起こし、それがまた同じような行為を増幅し、歴史は激変します。新しい発明品の爆発的普及によって技術が革新され、その技術革新が次の技術革新を呼び込み、社会が激変する

現象が見られるのも、そのような相互作用によりです。

相互作用の場では、能動的であることは、同時に受動的でもあります。自己自身の行為は、他に影響を及ぼすばかりでなく、絶えず自己自身に戻ってきます。この自己回帰的な運動の繰り返しによって、自己自身も変革していきます。出来事と出来事との関係は常に変動しており、その関係の変動に応じて、出来事自身も常に変動します。このような円環的再帰的相互作用から、歴史の新しい構造や形態はつくり出されていきます。

歴史を構成する個人は、他の個人との相互作用、さらに、それによって形成される全体との相互作用から、新しいものを創造していくのです。政治・経済・社会の新しい構造や形態が次々と生み出され、部分には還元できない特質が次々と出現するのは、このような相互作用からです。人類史を一瞥しても、栽培植物の発見による農業社会の形成、交易の発達による都市社会の形成、青銅器や鉄器、火薬や羅針盤の発明などによる人類史の飛躍などが見られます。これらも、そのような相互作用からの自己形成だったのです。

このような歴史の変革に着目するならば、最初に新しいものをつくり出し、新しい考えを提出し、新しい行動に出る少数の創作的力に注目しなければなりません。それは、最初は極く小さなゆらぎにすぎませんが、それがやがて人々の相乗的な相互作用の中で拡大し、既存の秩序を崩壊に導くとともに、新しい秩序をつくり出していきます。社会から逸脱した行為にすぎないものでも、相互作用を通して拡大し、予測不可能な巨大な結果をもたらすことがあります。ロシア革命のレーニン、中国革命の孫文や毛沢東、インド独立革命のガンジーなど、最初はたった一人の革命家の心の中に灯った灯にすぎなかったものでも、新しい政治運動にまで拡大し、革命的な社会変動をもたらします。

歴史は「出会い」によって変動します。歴史は、人生同様、出会いによってどのような方向にも進んでいきます。歴史は、出会いによって成長もし、解体もします。例えば、日本の歴史をみても、水稲稲作の伝播、鉄器や騎馬技術の流入、大乘仏教の伝来、律令制の導入など、外来文化との出会いによって大きく形成されてきました。そこには、必ずしも、そうならざるをえなかった必然的な法則があったわけではありません。その意味では、歴史は偶然の出会いによって形成されると言えます。

もともと、この出会いは、肯定的な共鳴ばかりではなく、対立や反発、競争や紛争も含みます。人々はそれぞれに世界解釈をもっており、世界に意味を付与し、そのあるべき姿を求めて争います。各集団・各党派で世界解釈が違い、構想や方針が

衝突することは常にあります。どの党派も自己の世界解釈を正当化し、その社会的正当性を主張し、社会的な浸透をはかり、自己正当性と社会的権力を主張し、相戦います。しかし、このような闘争こそ、また、歴史を動かす原動力ともなります。党派と党派、世代と世代などに見られる闘争は社会の不安定化をもたらし、時には激烈な権力闘争にまで発展することもありますが、このような対立から歴史は動くのです。

歴史は、不断に自己自身を形成し変転しやまない過程であり、新たなものを絶え間なく創造していく生命の働きです。歴史は果てしない途上にあり、常に新たな創造に向かって自分自身を駆り立てる生命の活動です。そこでの戦いや闘争は無視することができません。ヘラクレイトスの言うように、戦いは万物の父であり、万物の王なのです。

## 第二章 歴史と偶然

—歴史は偶然の出会いから形成される—



偶然からカオスへ

室町幕府の八代将軍・足利義政は、二十歳の時、日野家からその娘・富子を娶ったが、富子には跡継ぎが生まれなかったため、義政は弟の義視よしを後継者に指名した。ところが、翌年、たまたま結婚後十年にして富子は男児を出産、そのため、富子は我が息子を将軍に就けようと、幕府の実力者・山名持豊に接近し、それに対して、後継者に指名されていた義視は細川勝元に接近、山名・細川の両雄は次第に対立を深めました。諸国の守護大名も両頭目のいずれかにつき、ついに二十五万以上の軍勢が京都に結集、東西に分かれて激突し、一四六七年、都の大半を焦土と化す十一年におよぶ戦乱が始まりました。応仁の乱として知られるこの戦乱は、足利義政の無能ぶりも手伝って、地方にも波及し、未曾有の大戦争に発展、世は下剋上の風潮に支配され、やがて戦国時代へと突入します。

しかし、考えてみれば、この未曾有の大戦争も、ちよつとした偶然と行き違いから勃発したとも言えます。もしも、日野富子がたまたま結婚後十年にして男児を出産しなかったなら、また、もしも、義政が弟の義視を後継者に指名しておかなかったなら、山名・細川の対立も深まることもなく、都を灰塵に帰すほどの戦乱も起きなかつたかもしれません。

ヘクレオパトラの鼻はなで知られていますように、もしも事件が少しでも違った形をとっていたなら、その後の歴史は大きく違っていたらうというようなことは、わたしたちの歴史には山ほどあります。平清盛が常盤御前の命乞いについていぼだされて幼い頼朝・義経を助けたことが災いして、結局平氏そのものを滅ぼしてしまつたように、大きな事件も小さな起源をもち、どんなに小さな事件からでも大きな変化が引き起こされます。わたしたちの人生でも、あの時のほんのちよつとした誤算や偶然事じがその後の帰趨を決めてしまったというように思うに当たるとはよくあります。大きな地震も、一つの小さな岩が滑り落ちることから始まるように、偶然に起こつた些細な事件でも、歴史の流れを根底から変える力をもっているのです。

一千万人以上の戦死者を出し、全ヨーロッパを震撼させた第一次大戦のような大戦争も、サラエボの小さな偶然から勃発しました。歴史から偶然性を除くことはいきません。ある意味で、歴史は恣意的な原因から起きる諸事件の連続だとも言えます。

す。偶然は、誰にも予測できない結果を生み出します。とすると、一つの歴史的事件を説明するのに、主立った原因を選び出していただけでは、その事件を理解することはできないということになります。確かに、決定的な原因を見出すことによって、一つの歴史的事件の過程と結果は合理的に説明されます。しかし、偶発的な原因によっても歴史の大激変が起きることがあることを考えるなら、歴史は、実際のところ、それほど合理的にできているものではないと言わねばなりません。

自然界でも、結果が初期値のわずかな誤差に極めて敏感に反応する不安定性が見られます。ここでは、ちょっとした偶然の攪乱でも指数関数的に増大し、意外な結果を生み出します。極めて小さな原因が大きな結果を生んだとき、わたしたちは、通常、その事件を偶然に起こったと言います。カオスの最初の発見者であったポアンカレも、『科学と方法』の中で、

「吾々の眼にとまらないほどのごく小さい原因が、吾々の認めざるを得ないような重大な結果をひきおこすことがあると、かかるとき吾々はその結果は偶然に起こったという」

と述べています。歴史も、また、瑣末な偶然の出来事から大きな結果が生み出されるカオスなのです。

#### 予測できない歴史

確かに、結果を知りうる立場にある観察者から見ても、結果を引き起こす極めて小さな原因を確定することができないとき、それを偶然と呼びます。しかし、そればかりでなく、事件の当事者から見ても、到底予測できない原因によって大きな結果が生み出されたときも、その事件は偶然によって起こったと言います。前者は、結果から原因へ遡ったときの偶然であり、後者は、原因から結果へ向かったときの偶然です。

例えば、足利義政にとつて、結婚した日野富子に長い間跡継ぎが生まれなかったということは予期に反することでしたし、たまたま結婚後十年にして男児が生まれたということも予期に反することでした。さらに、それが切っ掛けでとんでもない戦乱が起きたということも、予期に反することでした。

わたしたちは、予期に反することが起きたとき、それを偶然と言います。予期するとは、このような条件のもとではこのようなことが起きるであろうということが必ずまたはかなりの確率をもって予測可能な場合、それを期待することです。ところが、わたしたちの人生や歴史は、常に期待に反した想定外のこと起きる可能性

をもっています。生きているということは、偶発的で予期できない事態に遭遇する可能性にさらされているということです。しかも、このような偶発的で予期できない事態によって、その後の経過は大きく変わり、その結果も、多くの場合予測できません。

さらに、予期しなかったことは、自己自身の行動についても起きます。人の行動は、必ずしもよく考慮された上で行なわれるとは限らず、へふとそう思ったためにへついつい行動してしまったというようなことがあります。また、たとえどんなに思慮深く行なわれた行動であっても、その時たまたま起こった何事かが切っ掛けとなっている場合もあります。偶然は、決断の大きな力にもなるものです。

一般に、わたしたちの歴史では、どんなに詳しく先行条件を検討しても、ある事件がいついかなる形でどのようなしかたで起きるか、その起き方を予測することはできません。個別には偶然の要素が入ってきますから、予測することができないのです。個々別々の事件によって成り立っている歴史は、予測することのできない偶然によって形成されているとも言えます。偶然は、一つの事件を別の方向に発展させていく大きな働きをします。

確かに、歴史は偶然の連鎖だとも言えます。現に、二十世紀のドイツの偉大な歴史家マイネッケは、第二次大戦後、過去四十年間にわたるドイツの悲劇を偶然の連鎖に帰しました。ドイツの第一次大戦から第二次大戦に至る不幸は、カイザーが虚栄心に満ちていたこと、無能なヒンデンブルクがワイマル共和国の大統領に選出されたこと、偏執狂的なヒトラーが登場したことなど、偶然の積み重ねによって起こったと、マイネッケはみます。しかし、これは、必ずしも、マイネッケが祖国ドイツの悲劇に遭遇して意気阻喪したための発言ではなく、一面、歴史の真実を突いた発言だつたと言わねばなりません。

自然界でさえ、その系がより複雑な場合には、予測することのできない偶然によって結果は形成されます。例えば、環境の変動の偶然に対して、植物や動物がどのような生き方を選択し、どのような道筋を通じて進化していくかは予測することができません。それは、かなりの場合、偶然によっているのです。

#### 因果と目的から外れた偶然

確かに、一つの出来事が起こるには、それが起きるべくして起きる十分な理由があり、あらゆる出来事には原因があります。一つの出来事は、無数の原因が交わる交差点に生じるのです。しかし、交差点を構成する因果系列は無限にあるととも

に、交差点そのものも無限に生じますから、交差点での原因の出会いには完全に解明することはできません。また、他の交差点に生じた出来事とどう出会うかも予測することができません。

このように、二つ以上の事象が因果性という必然的關係なしに出会うことを、わたしたちは偶然と呼んでいます。一つの出来事が生じる因果の系列は必ずあるのですが、一つの因果系列と他の因果系列は、必ずしも因果の必然によって結ばれてはいません。二つ以上の因果系列がどこでぶつかるかは、どちらの系列からも予測できないのです。偶然は、この二つ以上の因果系列の出会いによって生じます。そして、歴史的事件は、多くの場合、このような因果系列相互の偶然の出会いから起きるのです。その出会いからどのような新しい出来事が生じるかは、誰にも予測することができません。

例えば、織田信長の桶狭間の戦いでの見事な勝利も、偶然によつています。今川義元が、ほんの三百騎を連れただけで桶狭間の窪地に休息をとっていたところへ、たまたま猛烈な夕立が降りました。それが幸いし、信長は二千の兵で義元の陣に突入、義元の首を挙げ、奇襲に成功したのです。今川義元が油断をして少数の手勢だけで休息をとっていたのにも、それなりの理由があります。また、その時猛烈な夕立が降ったということにも、それが起きるだけの氣象学的な十分な理由があります。さらに、信長が少数の兵を連れて奇襲を決心したのにも理由があり、どれにも必然的な因果系列が存在したでしょう。しかし、以上の三つの因果系列が、桶狭間の窪地でその時その場で出会うということには、何の必然的因果も存在しなかつたとみなければなりません。しかし、このような偶然が幸いして、信長は桶狭間の大勝利を獲得し、天下統一への第一歩を踏み出したのです。そして、それが切っ掛けになつて、秀吉、家康と、主に尾張や三河出身の武将によつて統一事業は引き継がれ、近世日本の新秩序がつけられていきました。としますと、この大きな歴史変動は一つの偶然によつて生じたことであり、そこには、必ずしも、そうならねばならない必然性があつたわけではないこととなります。

歴史は出来事の相互連関からしか自己自身を決定することができませんから、それが取りうる形は偶然性に満ちています。偶然の出来事は、ものごとが進んでいく方向にズレを起こしていきます。そのわずかなズレによつて、出来事の出会いはいかたは変わり、事態は大きく変化していきます。原子論を唱えたエビクロスは、原子にはその本来の軌道からわずかにずれる性質、クリナメン (clinnamen: 偏り) があるとし、その偏りによつて原子の衝突は可能になり、万物が生成するとしまし

た。歴史も、また、エビクrossの言うクリナメンによって、思いがけない方向に動いていくのです。逆に言えば、偶然性はどのような結果でも生み出す力をもっており、創造性を引き出す力ももっています。歴史がどのような方向に動いていくかは、ほとんど偶然によっているのです。偶然の出来事が人間の運命において演じる役割は大きいと言わねばなりません。

歴史家は、偶然に満ちた過去の歴史的事象から意味のある事実を選び出し、それをつなぎ合わせ、合理的な説明を加えて、歴史記述の中に一つの筋書きをつくります。その場合、多く用いられるのが因果関係です。特に、歴史家は結果から原因を探求し、それを因果系列にそって整理します。そのことよって、なるほど歴史過程は合理化され、理解可能なものとなります。しかし、それは、多くの場合味気ない(後講釈)にすぎず、その過程を実際に動かしていた偶然の要素は無視されていきます。因果法則は抽象的なもので、具体的な現実には厳密には適用できないものです。歴史には、その大きな筋道とは無関係に起きる偶然事があり、その偶然事が、歴史を予測不可能な方向に大きく変えていきます。とするなら、偶然に満ちた不確実な歴史的過程から因果律に合ったものだけを選び、それ以外の偶然的事実を無視してしまうことはできないこととなります。偶然は、歴史家が求めようとしている原因結果の連鎖を遮断します。因果外偶然というものがある以上、すべてを因果律で説明することはできないのです。

わたしたちは、また、こうすればあなると因果連鎖を前提して、結果を予測し、それを目的として、そのための手段を講じて行動に出ます。このとき、たとえ目的手段の連鎖の中で行動していても、連鎖以外の偶然事によつて、目的としたこととはまったく違った方向に事態が進んでいってしまうようなことがしばしばあります。

例をあげますと、青森の三内丸山遺跡の発見のように、県営野球場の建設を目標に整地作業をしていたら、偶然遺跡を発見し、発掘を進めたところ、巨大な縄文遺跡だったという場合があります。この縄文遺跡の発見は、野球場の建設という目的手段の連鎖からは離れた偶然だと言えます。しかし、この偶然によつて、野球場建設は中止、事態は遺跡の発掘と保存の方向に大きく変わり、そのおかげで、日本のそれまでの縄文時代のイメージは大きく変えられました。三内丸山の縄文人の千五百年の営みと現代人の野球場建設とは、別々の因果関係にあります。その両系列間に目的性以外の出会いが生じたとき、わたしたちは、これを偶然の発見と言います。このような出会いには、目的性も計画性もありません。このような目的外偶然によ

つても、わたしたちの人生や歴史は大きく塗り変えられていくのです。

### 創発としての偶然

歴史においては、多くの出来事が出会うことによって、まったく新しい事件が創発してきます。多くの原因の相互作用から、予測不可能な結果が生み出されるのです。たとえ過去と現在のすべての原因をあげても、その出会いと相互作用から何が生まれるかは分かりません。何が創発してくるかは出会いにより、そこにこそ偶然性が働いています。これを「創発的偶然」と言おうとしますと、因果外偶然も目的外偶然も、結局、創発的偶然に帰着します。

歴史は、このような創発的偶然によって動いていきます。例えば、アレクサンドロスやシーザー、ムハンマドやチンギス・カンなど、統率力と行動力を伴った英雄が突然登場し、人類史を大きく変えていくことがあります。これも、歴史が創発的偶然によって成り立っているということの顕著な事例です。このような英雄の登場の原因はいくらもあげることができるでしょうが、それらは、ほとんど後の歴史家の後付け説明にすぎません。どんなに原因を列挙してみても、それらの相互作用からどのような英雄が生まれるかは、実のところ誰にも分かっていることなどです。歴史を動かす当事者の視点に立つなら、そのような英雄の登場は、予測できない創発的偶然です。このような英雄の登場によって、人類史は一挙に飛躍します。

社会の片隅で行なわれた偶然の発明や発見が巨大な歴史の変革をもたらし、社会を一変させることがあるのも、創発的偶然の一例です。現に、栽培植物の発見や鉄精錬技術の開発なども、もとは、世界の片隅で行なわれた偶然の発明・発見でした。しかし、それらがなかったら、農業革命も古代国家の形成もありえなかったでしょう。コロンブスがアメリカ大陸を発見したのも、目的外偶然によりです。しかし、この発見によって、ヨーロッパと新大陸がつながり、西洋近代史の中に新大陸が組み込まれることになりました。これら偶然の発明や発見は、多くの場合、原因結果や目的手段の枠の外にあるものとの出会いによってなされます。そのような因果外偶然や目的外偶然によって、新しい歴史は創発してくるのです。

科学や技術の発明・発見なども、しばしば偶然からなされます。その偶然を見逃さずに科学の発展や技術の開発に供しているとするのが、セレンディピティといわれる発想です。ここでは、固定観念や常識の規制をできるだけ緩めて、通常のパラダイムからはみ出た発見や発想、ひらめきを大切にしようとしています。偶然こそ、新しいものの創発を可能にするからです。

偶然とは、ないことも可能なことであり、その存在が自分自身のうちに十分な根拠をもっていないことです。それに対して、必然とは、必ずこうなる、反対のことになる可能性がないことです。だから、それは、自分自身のうちに存在の十分な理由をもっています。歴史上の出来事は、どんなに瑣末な出来事でも、過去の無数の出来事が働き合って生起してくるのですから、その点では、その出来事は自分自身の内に存在の十分な根拠をもっています。しかし、その出来事と別の出来事の出会いは、必ずしも、自己の内の十分な根拠から引き出すことができません。出会いそのものは偶然です。偶然は必然の反対であり、必然は偶然の反対ですが、反対のものが出会ったところに、歴史的生起というものがありません。

このように偶然と必然が重ね合わされた状態から、偶然を手なずけながら、それができるだけ必然の枠組みに近づけてとらえようとするのが、確率論です。しかし、確率論では、出会いとしての偶然は十分にはつかめません。なるほど、自然科学でも、特に熱力学では、無秩序さを把握するために、分子運動の偶然性を確率論的にとらえようとしています。しかし、確率論では、一つ一つの分子や粒子の偶然的出会いまでとはとらえることができません。サイコロの目が一から六までのどの目が出るかという確率は、それぞれ六分の一ですが、今ここでサイコロを振ったとき、一から六までのどの目が出るかまでは、確率論では規定することができないのです。しかし、事態は、まさにその目が出るか出ないかによって、その将来は大きく変わっていきます。

歴史においても、右に転ぶか左に転ぶか、確率論では二分の一の確率であっても、どちらに転ぶかによって、その後の歴史の展開は大きく変わっていきます。歴史は、人生同様、一種の賭けなのです。結局、確率論は、偶然的現象を巨視的に規定するだけで、この賭けにも似た一つ一つの要素の偶然性をつかむことができないのです。自然科学のカオス系でも、偶然に生じる誤差や偶然に起きる変異など、偶然が大きな役割を果たし、その偶然の誤差や変異によって、結果は大きく異なってきます。歴史においても、ちょっとした偶然の差異によって、結果はまるで違ってきます。このような誤差や変異を、確率論によって把握することができないのです。

また、偶然を、単に情報の不足とか、認識の不足とすることもできません。なるほど、人はよく次のように考えます。すべては因果関係によって決定論的に規定されているのだが、わたしたち人間は有限であるために、因果関係のすべてを知ることができないから、それを偶然というにすぎない、と。しかし、この考えは偶然について十分熟慮しているとは言えません。出会いの偶然性そのものは自由な選択を

含み、当事者がどういう決断をし、どういう行動にでるかはいつも謎めいていて、もともと完全には認識できないものだからです。

#### 出会いとしての偶然

第一次大戦が、オーストリア皇太子夫妻の乗った車とセルビア民族主義学生との〈出会い頭〉から出発したように、結局、偶然とは、一つの因果系列と他の因果系列との必然的でない出会いだということになります。その出会いそのものには、理由・帰結の関係も、原因・結果の関係も、目的・手段の関係も存在しません。だから、それは、どの系列からも、予期することもできなければ、あらかじめ計画することもできません。

二つ以上の因果系列が出会って、結節点をつくります。その結節点のところに、偶然性は潜みます。出来事は、この偶然の出会いから生じます。歴史は出来事から成り立ち、その出来事は後に起こるすべての出来事に影響を及ぼします。偶然の出会いから生じる出来事こそ、創造の源です。二つ以上の因果の鎖の偶然の遭遇から、新しい形がその時その場でつくられます。その意味で、それは即興性に満ちています。人生も、歴史も、一種の即興劇なのです。人生はドラマであると言われるのも、人生が出会いと偶然に満ちているからです。歴史も、また、出会いと偶然に満ちたドラマです。したがって、歴史は、機械論や因果論ではつかむことができません。歴史的偶然は、科学者や歴史家が追究する原因結果の連鎖を断ち切る力をもっています。

自己と他者が〈奇しくも遇う〉ことによって、ものごとは新しく展開していきます。それは〈巡り合わせ〉であり、それが幸福な〈巡り合わせ〉であったときには〈仕合わせ〉となり、不幸な〈巡り合わせ〉であったときには〈不仕合わせ〉となります。だから、出会いとしての偶然は相関的であり、〈相手があつてのこと〉だということになります。機械論は、このような相関的な偶然の出会いをつかむことができません。機械論は、すべてを因果必然的なものとして見ますから、その因果の鎖から外れた偶然の出会いを見落としてしまいます。そればかりでなく、その偶然の出会いから新しいものが創発してくる創発的偶然も把握することができません。歴史的なものは偶然性を含み、その偶然性は、個々の歴史事象のそれぞれの個性を創造します。その個性を、因果論は記述できないのです。

出会いの空間は、〈縁起〉の空間です。偶然性は縁によって起きます。英雄の登場にしても、時代を画する発明発見にしても、多分に偶然性を含んでいます。その



偶然性には、それを活かす条件や場所がなければなりません。その置かれる条件や場所との出会いは偶然です。また、条件や場所から見ても、それを活かす主体や個性が登場するかどうかは偶然によります。新しい創造は、このような外的偶然と内的偶然の出会いという二重の偶然から起きてきます。へまぐれ当たりとかへ怪我の功名とか言われますように、人生や歴史では、意図せずして好結果がでることがあります。これも、条件や場所との偶然の出会いによるのです。ものが成就するには、天の時、地の利、人の和がなければならないと言われます。これも、条件や場所との出会いを問題にしています。

生物進化にしても、社会進化にしても、環境の変動は、予想することのできない偶然性を含んでいます。とともに、その環境の変動に対してどのように対処していくかは、主体それぞれで様々な対処のしかたがあり、対処する主体の方にも偶然性が宿っています。ここでも、主体と環境の二重の偶然の出会いによって、新しい生き方が決まってきます。歴史も、このような二重の偶然から新しい方向を見出ししていきます。歴史は、偶然の出会いから多様なものを生み出すとともに、世界を刻々と異なるものに続けます。しかも、それはまえて計画されたものではなく、別の経過を辿ることも可能であったような偶発的過程です。歴史の経過は、ある意味で、へ行き当たりぱったりで決まっていくのです。へ奇しき縁へと言われますように、人生や歴史は縁によって起きるものであり、出会いによって生起するものなのです。それは、単なる因果関係ではとらえられません。

他方、出会いの時間は同時性であり、偶然性はこの同時性から生まれます。偶然とは、同時的な現在における出会い、つまりへ出たとこ勝負なのです。無数の要因が現在において同時に出会い、共働することによって新しい形が生み出されます。どのような形が生み出されるかは、その時その時の出会いによります。したがって、取りうる形態は様々で、どのような形態をとるかはおそらく決定されてはいません。偶然の出会いから、新しい創造も生まれてきます。創作でのへひらめきのように、現在の瞬間において新しい形が創造されます。人生も、歴史も、そのような現在の瞬間瞬間における偶然の出会いから新しい形を生み出します。人生や歴史が取るに足りない出来事にも左右されるのは、そのことによります。事件と事件が次々に起こり、出来事が推移していくへ継起としての時間へは、この現在の瞬間瞬間の出会いから生み出されていきます。

九鬼周造が『偶然性の問題』で言っていますように、偶然性は、この場所、この瞬間における独立なる二元の邂逅として、先端の危うきに立っています。偶然性が

生起する時間と空間は、 $\langle$ 今・ここ $\rangle$ の時間と空間なのです。

### 運と不運

歴史における偶然の役割は大きいと言わねばなりません。仮に、ビデオテープのように歴史を巻き戻すことができるとすると、ある時点でほんの少しの違いを加えただけで、歴史はまったく違った結果になります。歴史は、気まぐれに継起するその時その時の条件によって、どんな結果でも引き起こすことができるのです。その意味では、歴史は運・不運によって形成されるとも言えます。人は偶然に助けられ、偶然に災いされます。条件に恵まれ、結果がよければ、幸運であり、条件に恵まれず、結果が悪ければ、不運です。

日本の戦国時代の歴史を考えても、信長・秀吉・家康ラインに天下統一の権力が引き継がれていくことが、最初から決定されていたわけではもちろんありません。それは、ほとんど幸運の連続によって結果したことであり、いろいろな状況が幸いしたためです。その背後には、実に多くの不運な敗北者がいました。その敗北者たち、例えば武田信玄や上杉謙信らは、決してその戦国武将としての能力に劣っていたわけではありません。ただ、二人とも病死しているところをみれば、不運だったにすぎません。この信玄や謙信らの不運が、信長・秀吉・家康らの幸運につながっただけです。甲の幸運は乙の不運です。歴史的成功を可能にする天の時や地の利や人の和には、多分に偶然が含まれていると言わねばなりません。

生物進化の歴史も、ほとんど偶然の産物です。現に、進化論に新境地を開いたグループによれば、多細胞動物の歴史はカンブリア紀の進化の大爆発において一挙に開花しましたが、そこで生まれた種の多くがある段階で大量絶滅し、そこから運良く生き残ったものだけがその後分化して、現在のような動物種の秩序ができたのだといえます。カンブリア紀に大量発生した動物種の大半は死に絶え、一部だけが繁栄したことになりましたが、そのとき何が生き残るかは、その時その場でたまたま運のいい場所にいたかどうかによって決まります。だから、勝者は、必ずしも、適応上優れていたから勝ち残ったというわけではなく、また、絶滅した敗者も、必ずしも、適応上劣ったデザインを選択したというわけでもありません。絶滅した敗者は、ただ悲運だったにすぎません。この悲運多数死による絶滅とわずかの種の幸運な生き残りというカンブリア紀の気まぐれな進化劇は、生命進化と偶然について深く考えさせます。生命がどのような方向に進化していくかは最初から決定されているわけではなく、ほとんど偶然によるのです。

このグループの考えによれば、人類が地球上に登場したのもまったくの進化史の偶然だったということになります。カンブリア紀に登場した脊椎動物の原型をなすナメクジウオに似た「ヒカイア」が、大量絶滅をかくぐつてたまたま幸運にも生き残ったために、その後の脊椎動物の進化はあり、ひいては人類の登場もありえたのです。逆に言えば、わたしたち人類の登場には、進化の歴史が別の航路に反れてしまつて、生存が抹消されてしまう危機が何百万回もありました。カンブリア紀の大量絶滅のとき、生き残ったメンバーが少しでも違つていて、その組み合わせが少しでもソレただけで、全く異なった種が登場した可能性もあったのです。

進化の歴史にしても、人間の歴史にしても、不公平と不平等に満ちています。偶然性の配分は、宝くじに似ていて、公平でも平等でもなく、特定のところに偏る傾向をもちます。科学的な大発見でも、偶発的な出来事が大きな役割を果たしますから、その機会も、どの科学者にも平等に与えられているわけではありません。ただ、偶然の配分にたまたま与つた科学者、また、その偶然を見逃さなかつた科学者に、科学的大発見の榮譽が与えられません。歴史も、人生も、このような幸運な「巡り合わせ」と不運な「巡り合わせ」によつて成り立っていると「言わねばなりません」。

例えば、わが国の歴史でも、元寇で二度とも暴風雨が襲い、わが国が蒙古の支配から免れたことは、まったくの幸運でした。文永の役でも、弘安の役でも、襲来してきた蒙古軍に対して、鎌倉幕府は九州の御家人に命じて防衛に尽くしましたが、その防衛に尽くすことと、二度とも暴風雨が襲来することには、必然的な因果関係がありません。それは、二度続けて宝くじに当たるのに似て、まったく幸福な偶然だったのだと言わねばなりません。しかし、この幸運によつて、その後の日本の歴史は、朝鮮やロシア、それに中国自身のようなタタールの轡を免れたのです。もしも、二度とも大風が吹かなかつたなら、わが国の歴史には、蒙古による支配という無視できない爪痕が残つたでしょう。

一般に、予測することができない外敵との遭遇は、外敵に征服された側にとつては不運です。例えば、南北アメリカ文明にとつて、ヨーロッパ人の襲来とその征服は、まったく予想だにしなかつたことであり、不幸な偶然でした。メソ・アメリカのアステカも、アンデスのインカも、帝国を形成して順調な発展を見せていました。十六世紀前半、突如としてスペイン人がやってきました。しかし、アステカ人もインカ人も鉄器と銃火器をもつていなかった上に、天然痘や破傷風など病原菌に対する免疫をもつていなかったため、急激な人口減に見舞われ、滅亡、この予測しえない不幸な偶然によつて、二つの文明は滅んだのだと言われます。アステカやイ

ンカにとつては、そもそも、思いがけずも、ヨーロッパ人とへ出くわしたことが不運だったのです。

列車や船の衝突のように、不幸な偶発事故は、二つ以上の予測可能な過程が予測不可能な形で交差し、とんでもない結果を生じることから起きますが、それはいつも理不尽で、その起きなければならぬ理由が理解できないことが多いと言わねばなりません。もともと、そこには因果必然性がないからです。魚や鳥にとつて、網に掛かることは予測できない災いですが、それがいつわが身の上に臨むかは、魚や鳥には分かりません。人生や歴史にも、これと同じような不幸があまりにも多いと言わねばなりません。そして、人はこの不幸な偶然に耐えることができません。だからこそ、人はこれを逆に決定論によって納得しようとするのです。

独立だと思われる二つの事象が驚くべき一致を見ることがありますが、その一致は両方にとつて偶然の符合であり、別々の因果関係の出会いです。その出会いが幸いするとき幸運と言ひ、災いをもたらすとき不運と言ひます。歴史は、このような運・不運によって動いていくのです。

## 2 非決定性と不可逆

### 歴史の分岐点

歴史にはいくつもの分岐点があり、それぞれの分岐点で、どのような道が選択されるかは前々から確定されているわけではありません。分岐点ではあらゆる可能性があり、どの可能性を選ぶかによって、その後の歴史の方向は大きく変わります。現実には一つの可能性しか実現されませんが、歴史の進む方向は、その時その時の分岐点では一つだけではありません。

例えば、わが国の幕末維新の歴史でも、もしも一八六六年に薩長同盟が結ばれなかったなら、もともと犬猿の仲だった薩長は協力して倒幕の方向には向かえなかつたでしょう。とするなら、鳥羽伏見の戦いもなかつたでしょうから、おそらく、越前藩らが主張していた雄藩連合政権が成立、いわゆる公議政体によって、維新が進められた可能性が大きかつたと言えるでしょう。現に、薩長同盟は、実際には決裂寸前でした。もしも仮に下関の悪天候がもう少し続き、坂本龍馬が船で大阪・京都へ到着するのがもう少し遅れていたなら、桂小五郎と西郷隆盛の密約は成立しなかつたでしょう。そして、桂小五郎が虚しく長州に帰つたとするなら、高杉晋作らは、第二次長州征伐での幕軍との戦いで、薩摩から供給されるはずの新型鉄砲も使えず、

敗北に終わった可能性もあったのです。

歴史は分岐点の連続です。それぞれの分岐点では、多くの可能性からたった一つの可能性が選ばれて、それがその後の歴史の方向を決していきます。その可能性の選択には、偶然も大きく働いていると言わねばなりません。分岐点で偶然にわずかなズレが生じただけでも、そのズレは次々と拡大し、似ても似つかない結果がもたらされます。歴史のベクトルは、初期の段階でわずかな変更が加えられるだけでも、まったく別の流れをつくります。

歴史におけるへしもは考えてはいけなと言われます。それは、現実起きた事実を厳肅に受け止めよというような意味でも言われ、その現実を避けて通れなかつた必然だったのだという意味でも言われます。しかし、それらは歴史の結果論であり、結果の方から歴史を眺める立場からの発言です。逆に、歴史を動かす当事者の立場に帰り、その時その時の満中の人物の心中にまで立ち返って考えるなら、歴史はほとんど一寸先は闇で動いていきます。だから、心の動きも含めて、そのうちの何か一つが現実を起こつたのとは違つた動きを少しもしていたなら、違つた歴史が展開されていたというは大いにあります。

例えば、もしも、三代将軍家光のときに、江戸幕府が鎖国令を出さなかつたなら、その後も、ヨーロッパ諸国との通交や日本人の海外渡航も盛んに行なわれ、近代西洋の文物も早くから怒濤のように入ってきたでしょう。とすると、同じ江戸幕府下にあつたとしても、わが国の後期近世のあり方は随分違つたものになり、近代の国民国家への移行も五十年くらいは早まつたかもしれせん。さらに、日本人の東南アジア・インド洋・太平洋への進出がもつと早くに始まり、欧米との対立ももつと早くに起き、世界史そのものが大きく変わつていたことでしょう。

人生においても、もしあの時あしていたらきつと別の道を選んでいたので、後悔する経験は誰にでもあります。わたしたちの歴史も、そのような後悔の連続だとも言えます。

第二次大戦での日本の選択を例にとるなら、日本の大陸進出を快く思わなかつた欧米列強にわが国がすでに包囲されていたとしても、もしも、そこでの別の生き延び方を画策していたなら、あのような多大な犠牲を被ることなく、わが国は切り抜けていくことができたかもしれません。日米交渉でハル・ノートが突きつけられた段階が、わが国がもはや引き返すことのできない最後のターニングポイントに追い込まれた時点だつたと言われます。しかし、もしも、それを最後通牒とは受け取らずに、フランス領インドシナや中国本土からの撤退を決断するか、あるいは、真珠

湾攻撃ではなく、石油資源の豊富なスマトラ島の一部の保障占領などに打って出るかをしていたなら、日米戦は起きず、何百万という人命の損失もなかったかもしれない。もはや引き返すことのできないギリギリの窮地に陥っていたとしても、なおかつサバイバルするための何らかの糸口は見つかるものなのです。

歴史の分岐点でいくつもの可能性がある場合、どの可能性が選ばれるかは、かなりの程度偶然に左右されることが多いと言わねばなりません。分岐点での行為の選択のところに、しばしば偶然が働くからです。一つの分岐点での偶然は、歴史を別の方向にもっていく力をもたらす。しかも、別様でもありえたことこそ、偶然と言われるものなのです。

例えば、関が原の戦いでも、最初、石田三成の率いる西軍は意外と善戦、そのために、徳川方に寝返る約束をしていた小早川軍は動かず、様子を見ていました。その時、不利な陣形を組んでいた家康は、西軍に囲まれて、絶体絶命の窮地に陥っていました。その起死回生策として、東軍は小早川軍の背後から鉄砲を打つ策に出ました。この時、もしも、小早川軍が徳川の東軍を攻める方向に踏み込んでいたなら、西軍は雪崩を打って勝利、東軍は敗北していたかもしれません。小早川軍が我に返って、約束通り東軍に寝返り、西軍攻撃に移ったために、関が原での東軍の勝利はありえたのです。関が原の戦いは、その後の徳川幕藩体制をつくっていく上で大きな分岐点でしたが、そこには、多くの偶然的要素が働いていたのです。もしも、その偶然が徳川方に幸いしなかったなら、支配者はもちろん、幕府の所在地、戦国大名の処置のしかた、領国の配分なども、まったく違っていたでしょう。偶然を跳躍板として、歴史は飛躍するのです。

わたしたちの歴史の形成過程にはいくつもの分岐点があり、その分岐点にはいくつもの選択肢があつて、どの方向に進んでいけばよいか迷っている時があります。そのような迷いの中でどちらか一方を選択することによって、歴史の方向は決まっていきます。二者択一する行為が歴史を限定し、歴史の変動を起こします。行為するということは選択することであり、対称性を破ることです。芯を下にした鉛筆が必ずどちらかに倒れるように、対称性の破れは、新しい構造や形態を形成する上で決定的な役割を果たしています。対称性の破れによって一定方向への自己組織化が起き、もはや歴史的に逆戻りのできないところまで進んでいきます。

この対称性の破れのところに、偶然は働きます。偶然の出会いとか、偶然による情報の察知とか、偶然の事件が決断を促し、歴史を一定方向へと駆動していきます。特に、このような分岐点では、情報が、ある状態を選択する上で重大な働きをし

す。情報は可能性の選択肢を減らす契機となりますから、情報が入るか入らないかは、行為の選択にとって大きな意味をもちます。ささやかな情報が入ってくるだけでも、行為の選択は変わり、取られる方向は大きく変わります。しかも、情報が入るか入らないかは、かなりの場合、偶然によつています。

例えば、一九四一年に発覚したソルゲ事件<sup>ソルゲ事件</sup>のその後の処置のしかたをもう少し徹底しておいたなら、日米戦も起きなかつたかもしれませぬ。実際の処置は、近衛内閣の総辞職、ソルゲおよびその協力者であつた尾崎秀実<sup>ヒラカ</sup>（近衛の政治顧問）の逮捕と処刑のみで、近衛の責任も問わず、十分な調査もせず、他の省庁に潜り込んでいた可能性のあるソ連のエージェントの摘発もしませんでした。もしも、この調査を徹底、この情報を、日本国内ばかりでなくアメリカをはじめ全世界に知らせておいたなら、日米をはじめヨーロッパ諸国もスターリン・ソ連の情報工作下にあることがあからさまになり、米英がスターリン・ソ連と手を結ぶということはなかつたかもしれませぬ。ソルゲ事件の発覚そのものも、日本政府の中枢部に這わせていた他のエージェントを温存するために、スターリン・ソ連の方から意図的にばらされた情報であつた可能性もあります。もしこのことが読めていたなら、第二次大戦の帰趨は大きく変わつていたでしょう。

情報を出さ出さない、情報を手に入れる手に入れない、それを正確に読む読まないの別れ道は、行為の選択に大きな影響を及ぼし、歴史の分岐点での対称性の破れを決定づけます。しかし、この情報を出さ出さない、得る得ないは、その解釈や判断も含めて、相手があつてのことですから、偶然の要素が極めて高いのです。歴史はなお偶然によつて動いていくのだと言わねばなりません。

#### 歴史は決められていない

歴史のあらゆる時点で偶然が大きな働きをしているとすれば、歴史は非決定的に動いていくこととなります。一つの情報を受けるか受けないかでも、歴史は別の道歩むこともあるのですから、歴史は非決定的です。歴史は、無数の出来事の相互連関によつて形成されていますから、それがどのような形態をとるか、その時その都度の諸出来事の出会いによります。偶然は、この出会いにおいて働きます。

歴史においては、どの出来事も他のすべての出来事との連関によつてのみその方向を決定します。だから、その未来は非決定的であり、それがどのような構造をつくるかは、確定的ではありません。歴史は、無数の出来事の相互作用から自発的に新しいものを創造していく不断の過程です。決定論はこの自発性をつかむことがで

きないため、歴史の次の段階に創発してくる新しいものを予測することができません。歴史には、決定論では把握しきれない飛躍があります。

確かに、十七、八世紀の古典力学的世界観では、完全に決定論的な世界観が提出されました。そして、現在も未来もすでに宇宙が創造された瞬間において決まっていたというような徹底した決定論が展開されました。しかし、このような決定論は、歴史においてはもちろんのこと、自然においても成り立ちません。

十九世紀の歴史哲学でも、この古典力学の影響は大きく、わたしたちが営む歴史も決定論的法則に則っているかのように考えられました。現に、ヘーゲルやマルクスは、まるで歴史にも万有引力があるかのように、歴史を一貫して動かす原動力として自由の発展とか生産力の増大を設定し、それに基づく決定論的歴史哲学を展開し、歴史を必然によって構成しようとした。

しかし、実際の歴史は、決定論が主張するように、単純でも理屈に合ったものでもありません。複雑で非合理的なものを含む歴史を決定論の網によってつかもうとすると、その網の目からは、いつも歴史の大部分が逃げてしまいます。歴史は、単純化することも合理化することもできません。歴史は、人生がそうであるように、まもなく決定された法則や計画に従って動いていくようなものではありません。だから、未来はもちろん、過去も非決定的なのです。

歴史を貫く普遍的法則はありません。一つの法則で歴史を説明し通そうとすれば、独断になります。歴史は、マルクスの言うように、奴隸制、封建制、資本制、共産制と進むわけでもなく、トインビーの言うように、発生、成長、挫折、解体、消滅の過程を必ず経るといふわけのものでもありません。歴史は、自然の猛威とか、外敵の侵入とか、支配者の権力欲とか、英雄の野望とか、民衆の熱狂とか、法則化できないものによって動いていきます。歴史には、法則に還元できない非合理的な複雑性があります。複雑な歴史現象を、単純化し一様化してはなりません。無限に多様で複雑な事象から、性急に単純化された法則を抽出しようとすれば、歴史の複雑性を見落としてしまいます。わたしたちは、複雑で多様な歴史的事象を、複雑で多様なまま理解しなければなりません。

なるほど、科学の最も大きな特徴は法則定立にあるとされ、極端な場合、すべてのものは初期条件によって決定されると考えられてきました。しかし、今日ではすでに、自然科学的世界も含めて、無限に相互作用している系では、必ずしも一律の法則を定立することはできないと考えられています。科学者のつくる一般法則は仮説にすぎず、考察する範囲が変わったり、対象に対する見方が変わったりすれば、



変更を免れません。その点では、歴史学も同じです。

決定論的法則は、未来に対しては、必ずこうなると断言します。しかし、未来を正確に予測することはできません。未来には、常に予期に反する出来事が起きるからです。わたしたちの歴史では、小さな事件を切っ掛けとして、予想を遙かに越えた巨大な事件が生じます。わたしたちは、一個人においてもそうですが、集団においても、経験を積んで成長していく面をもちます。この未来の創発性や新奇性を、決定論的法則は把握できないのです。

歴史はドラマに似ていると言われますが、歴史はドラマ以上です。ドラマには作者がいますが、歴史には作者がいません。ドラマにはシナリオがありますが、歴史にはシナリオがありません。歴史は、作者のシナリオ通りに動き、結末が作者には分かっているようなドラマではありません。歴史の創作者とも言える歴史の登場人物たち自身にも、未来の結果はどうなるか分かってはいないのです。

もしも、未来が決定論のように予言できるのであれば、ニュートン力学のように、未来は、過去の初期条件の中にすべて含まれていなければなりません。しかし、このように、初期条件からすべての時刻における系の状態を予言できるのは、自然のうちでも、複雑性の無視できる範囲内に限られ、それも近似的に成り立つだけです。自然の大部分は予測不可能です。まして、高度な複雑性を抱えたわたしたちの歴史は、もちろん予測不可能です。決定論的法則を打ち立てて未来を予測することは、科学の本来の目的ではなかったのだと言わねばなりません。

歴史法則は、出来事の継起的つながりから普遍的で再現性のある規則性を見出し、これを因果関係によってとらえます。何ものも理由なしには生じませんから、一つの歴史事象が生起するには、それ以前のあらゆる事象の働きがなければなりません。しかし、だからと言って、これを唯一の因果法則に還元することは不可能です。一つの結果が生まれるには無数の原因があり、因果の連鎖は、事実上時間的にも空間的にも無限に広がります。さらに、一つの歴史事象が生じるには、結果を左右する無数の条件が必要です。しかも、その原因や条件の組み合わせは多様ですから、同じ原因が働いていても、その結果は違って現われます。だから、一つの原因を一つの結果に機械論的に結び付けることはできません。歴史は一因一果ではなく、多因多果であり、そのため、同じ原因から別の結果が生まれたり、別の原因から同じ結果が生まれたりします。同じ圧政から暴動が起きる場合もあれば、起きない場合もあり、無謀な策からでも、無策からでも、同じ暴動が起きます。したがって、歴史を単一の原因によって説明することはできません。

歴史を動かす力も単一ではありません。歴史を動かす力には、政治、宗教、文化、経済、技術、環境、その他いろいろ考えられますが、その中から何かある一つの原因、例えば経済とか環境だけを取り出して、これを歴史の唯一の原因とすることはできません。歴史に唯一の原因を固執することは途方もない単純化であり、独断です。単純な歴史法則を定立することは、一般大衆の魂の捕獲には都合がよいのですが、それは宣伝にすぎません。マルク・ブロックの言うように、原因一元論は歴史の説明にとつては障害でしかありません。一つの歴史事象は他のすべての歴史事象との連関によつてのみ決定されますから、歴史を単純な原因に還元することはできないのです。

歴史においては、すべての出来事がすべての出来事と相互に関連していますから、原因結果の関係も単純には決定できません。無数の出来事の相互依存関係からは、単純な因果律では律しきれないものが生じます。単純な因果律は、過去は現在を規定し、現在は未来を規定しているのとらえますが、過去や現在の経験を乗り越えて新しい未来を作り続けていく歴史を、このような因果律ではつかめません。

#### 偶然の中にこそ自由がある

決定論は、すべての出来事には原因があつて、原因に変化がないかぎり、出来事に変化はありえないと考えます。そして、因果の法則つまり事象の必然的継起の法則に基づいて、前にあつた出来事を後に起こつた出来事の原因に仕立てます。そこには偶然性が入る余地はなく、ものごとはすべて必然的に起きたこととなります。つまり、決定論は、歴史的に起こつた事件を起ころざるをえなかつたものとして描きます。決定論は偶然性を排除し、歴史を必然の論理で構成しようとするのです。

しかし、歴史には、因果外偶然があり、因果律によつては決定できない偶発性があります。もしあの事件に遭遇しなかつたなら、個人の歴史でも、国家の歴史でも、まったく違った方向を歩んでいたであろうというようなことはしばしばあります。歴史は、わずかの偶然によつて大きく変わっていくのです。不確実性によつて、歴史は絶えず変動します。歴史は、多くの人々の無数の行為の選択とその相互連関によつて構成されていますから、そこには常に偶然性が介在し、歴史の方向は非決定的になります。因果法則では、この偶発性がつかめません。

決定論は、また、未来に対しては予定論を唱えます。歴史は一個の目的へ向かつての進行過程であり、まもなく決められたコースを歩んでいくと考えます。しかし、歴史には、目的外偶然によつて思わぬ方向に進んでいくことがあることを考え

れば、歴史の進行方向を一定の目的に向かって進む過程と考えることはできません。行為が投げ出される場は相互関係性の場合から、そこには予測することのできない偶然が入り込み、歴史の進む方向を一つだけに限定することはできません。歴史はシナリオのない芝居です。歴史は、予定論のシナリオを狂わす偶然性によって成り立っているのです。

なるほど、ヘーゲルは、英雄や民族が起こす事件の偶然性は、その意図を超えて、結局歴史の計画実現に貢献することになると考え、これを「理性の狡知」と名付けました。しかし、偶然性は歴史を大きく別方向に動かす力を持ち、歴史法則を破る力を持ちます。このことを考えれば、偶然性を目的論的決定論の中へ手なづけるこのような考えはもはや成り立たないでしょう。歴史に最終目標はないのです。

わたしたちの歴史には、国際情勢の変化とか、他の強国の威圧とか、常に環境の変動がありますが、それに対処するための変革の方向は一つではなく、多様です。どのような方向を選ぶかは、自由に任されています。いくつもの選択肢と多くの可能性があるところに、〈選択の自由〉があります。しかも、どのような道を選ぶかはあらかじめ確定されてはいません。未決定という意味でも、わたしたちは自由を確保しています。そして、あらゆる可能性から一つの可能性を選ぶところに、自由があります。歴史を外部から眺めるのではなく、行為者の立場に立って見るなら、わたしたちは未来への自由をもつと言わねばなりません。行為的連関の中にどのような行為が投げ入れられるかによって、歴史の方向は変わっていきます。行為は、必然性と決定性を破る自由を持ちます。

わたしたちは常に予測したい偶然に面しています。しかし、この予測しがたい偶然に対して自分の生き方を選択するところに、〈選択の自由〉があります。偶然の中にあるからこそ、自由なのです。必然の中に押し込まれていたなら、自由はありません。自由ゆえに飛躍があり、創造があります。創造と自発性にこそ、因果論的決定論からの自由も、目的論的決定論からの自由もあります。

### 歴史は逆戻りできない

歴史の流れは不可逆です。歴史は、人生同様、逆戻りすることも、繰り返すことも、やり直すことも、取り返すこともできないものです。なるほど、「歴史は繰り返す」とよく言われます。日の下に新しきものはなく、かつてあったことは今あり、今あることはこれからもあるであろうとも言われます。確かに、人間の歴史は、何度と同じような愚かなことを繰り返してきたとも言えます。しかし、歴史をつぶさ

に観察するなら、まったく同じものが二度現われることはありません。ただ、川の流れて生じる渦のように、歴史にはよく似たパターンが生じるだけです。それを、わたしたちは、「歴史は繰り返す」と言っているにすぎません。

歴史がどこまでも創造的である以上、歴史現象は再現されることのない一回きりの現象です。無数の原因や条件から思いがけないものが創発してくることを考えれば、歴史は、二度と同じことを繰り返すことはありません。歴史は、ビデオテープを巻き戻して見るように、逆戻りすることも、再現することもできないのです。わたしたちの歴史では、たとえ過去に遡って条件を同じくしても、ビデオテープのように、完全に同じものが同じしかたで再現されるということはありません。どんな動きも、それ以前に起こったものの繰り返しではありません。すべての動きは、以前に起こったものとは異なっているのです。

同一の状況のもとでは同一の現象が生起するというのが、再現性を基礎に置く自然科学の考えでしたが、この考えは歴史には成り立ちません。それどころか、自然にも成り立ちません。宇宙の進化や生命の進化などは、再現できない一回きりの出来事です。なるほど、物理学や化学は自然の再現可能な部分を扱っていますが、これも、そのように見える部分のみを扱っているにすぎません。自然科学でさえ再現性にこだわるできないとすれば、歴史科学はなおのことです。自然の歴史性が再認識されつつある今日、むしろ、自然科学の方に、一回性と不可逆性を重んじる歴史学の方法を及ぼさねばならないでしょう。

同じゲームが繰り返されることがないように、まったく同じ歴史が繰り返されることはありません。だから、歴史では、実験は不可能です。実験をすれば、実験をしたこと自身が歴史の動きそのものを乱しますから、歴史においては、実験によって同じものを再現することはできません。それが不可逆ということですから。なるほど、自然科学は、自然の繰り返し起きる面に注目し、それを実験によって確かめてきました。しかし、地質学や古生物学、宇宙論や進化論などは、実験もできなければ再現もできない現象を扱っています。まして、これよりもっと高度な複雑性を備えたわたしたちの歴史では、再現を前提にした実験もできなければ、決定論的な法則定立もできません。不可逆性も、非決定性と同じように、歴史を単純な法則に還元する還元主義を阻止するのです。

歴史は不可逆であり、再現不可能です。たとえ仮に、過去の歴史を観察するために、タイムマシンに乗って、わが国の戦国時代に戻ることができるとしたとしても、わたしたちが戻ったこと自身が一つの歴史的行為になってしまいますから、す

であつたのと同じ戦国時代を繰り返すことはできなくなります。実際、わたしたちが本能寺の変に出くわすことができたとして、その時、信長に「謀叛者がいるから用心しろ」とでも言ったとしたら、信長は別行動をし、明智光秀に襲われることはなく、本能寺の変は起きなかつたでしょう。とすれば、戦国時代の地図は大きく狂ってきます。戦国時代の帰趨が事実あつたような過程を辿つたということは、一回きりの不可逆な歴史過程だつたのだと言わねばなりません。

自然史や生命史もそうなのですが、歴史というものには、過去にどのような選択をしたかによつて現在や未来が規定されるという現象が歴然としてあります。歴史には、履歴というものがありません。その履歴が慣習や制度をつくり、それが反復されれば伝統になります。だから、一つの社会を理解するには、その来歴を研究しなければなりません。現在のわたしたちの生活そのものの中に、過去が来歴として生きています。

わたしたちは、遠い過去から経験を積み重ね、それを累積して履歴を形成し、それを未来の新しい経験に引き継いでいきます。経験を積み重ねて成長する過程は不可逆であり、不断に新しいものを産出する過程です。過去の蓄積は、未来に向けて新しいものを創造するために必要なことです。過去から現在へ、現在から未来へと、歴史は不可逆に流れます。

カオス系にも、経路依存性といわれる履歴現象が見られます。カオス系も歴史をもっているのです。ここでは、初期段階ではどのような方向にでも行きうる可能性がありますが、ある一定の方向が決まるとその可能性は減つていき、後戻りができなくなります。いわば履歴が形成されるのです。カオス系には初期条件への強い依存性があり、ある過程の初期条件の小さな選択が、結果として大きな違いを生みます。この現象を結果の方から見れば、経路依存性となり、履歴現象となるのです。

例をあげますと、ブライアン・アース<sup>二</sup>の言うように、今日の自動車社会の元をたざせば、内燃機関と蒸気機関が競合していた十九世紀末の初期段階に戻らねばなりません。ここでは、自動車を内燃機関で作るか蒸気機関で作るか二つの方向がありました。しかし、たまたま馬抜き競争でガソリン車が勝つたこと、そのころ蒸気機関用の水が不足していたことのために、内燃機関の方により多くの技術改良が施され、ついに蒸気機関による自動車は絶滅、内燃機関による自動車つまりガソリン車が二十世紀を支配することになりました。このことによつて二十世紀の歴史が大きく変わったことは、周知の事実です。もしも、このことがなかったなら、第一次大戦も第二次大戦もあのような形では起きなかつたでしょう。第一次大戦も第二

次大戦も、列強はこぞって石油資源を求めて世界進出し、衝突を起したからです。二十世紀の歴史は、十九世紀末の初期条件に敏感に反応し、内燃機関の方向を偶然選んだという経路に深く依存しています。一旦一つの方向を選択した以上、その来歴は消しがたく、不可逆です。

初期段階での選択によって、後戻りのできない長期的帰結がもたらされ、しかも、その選択のところに偶然が働いているとすれば、偶然と不可逆は深く関係していると言わねばなりません。もしも、過去に別の選択をしていたなら、歴史の悲劇はなかったというようなことは大いにありうるのですから、ある一つの選択をしたということは、偶然にしろ取り返しのつかないことであり、それは不可逆な歴史を形成します。歴史は選択と選択の連続であり、偶然と偶然の累積です。その偶然が、歴史に消し去ることのできない影響を残します。偶然こそ、歴史的不可逆性と一回性を引き起こします。歴史的事実とは、過去において作用した無数の出来事の複雑な絡み合いと偶然の競合の結果であり、それ自身は後戻りもやり直しもできないものなのです。

生きられる歴史的時間は、前後が継起する時間であり、もしも前後の順序を入れ換えれば、それだけで別のものが出来てしまうような時間です。偶然は、この時間の前後を狂わします。わたしたちは、この前後継起する時間の中で、経験と体験を積み重ねていきます。だから、歴史的時間の方向は逆向きにすることも、過去・現在・未来を互いに交換することもできません。時間の矢は逆行しません。壊れた壺は元に戻らないし、わたしたちは若返ることもできません。現在の中に過去を保存し未来を孕みながら、不可逆な歴史は一方方向に変化していきます。世界そのものが、不可逆な時間の中で演じられる劇なのです。

#### 偶然によって成り立つ歴史

歴史は、法則から外れた例外的偶然事や違った系列の偶然の出会い、別様でもありえた偶然の選択などによって、極き乱されていきます。しかし、それこそ、歴史の生成変化と創造的進化を引き起こす原動力です。偶然は歴史の生命です。歴史は偶然によって一変します。もともと存在そのものが偶然です。出来事が生起し、今このように在ることそのことが偶然です。歴史は、そのような偶然によって貫かれています。

このことに思い当たるとき、わたしたちは、戦慄にも似た驚異の感情を抱きます。そして、自分自身がそのような歴史の偶然に投げ出されているということを自覚す

るとき、この過酷な偶然を（運命）として受け取ります。偶然に見知らぬところから襲ってきたこと、偶然に翻弄されながらみずから選択し招いたことなどを、運命として受け取ります。受け取らざるをえません。予測不可能も、非決定も、不可逆も、過酷な偶然です。過酷であるから悩むのです。歴史の神は、まるで、気まぐれなゲームをしている子供のようなのです。わたしたちは、この歴史の気まぐれに玩ばれながら、みずからの運命を背負います。歴史にとって、偶然は必然より根源的であり、運命は偶然により近いのです。しかし、だからこそ、わたしたちには、運命を背負いながら、新しい創造に向かう自由があります。

もともと、この宇宙そのものが無ではなく有の方へ傾いたということ、そのことが偶然です。この偶然そのものは、もはや他の何ものにも根拠をもっていませんから、無いことも可能な偶然です。それは、なぜそのようにあるのかと問うことを許されない偶然です。世界はこの偶然から始まります。そして、歴史の全体を貫いているのも、この偶然です。単に歴史の始まりが偶然であるだけでなく、歴史の瞬間瞬間が偶然です。歴史の非決定性と予測不可能性、不可逆性と一回性は、この歴史を貫く偶然性に起源をもっています。偶然が歴史を動かし、世界を動かし、偶然こそ、永遠の生成変化を生み出します。有が無になり無が有になる接点に働いているのが偶然だとすれば、それは生成を呼び起こします。世界そのものが歴史的なのです。

### 第三章 進化する歴史

—歴史は創造と破壊を繰り返して進化する—



### 創造と破壊の反復

おおむね進歩史観に立脚している現代人は、今日の高度に発展した近代社会を肯定する立場に立っていますから、十八世紀末のフランス革命の成果を近代市民社会の樹立として高く評価しています。確かに、フランス革命は、古いものの転覆と抑圧からの解放、そして新しいものを望む民衆の変革への期待に支えられていました。

しかし、フランス革命の経過を見ますと、そこには、手段を選ばない闘争や暴動、悪辣な策略や詭計、対立する党派間での憎悪の渦巻く混乱に混乱を重ねた過程が見られます。その過程は、政治システムの崩壊に伴う無政府状態ばかりでなく、価値観や倫理の崩壊までもたらす無秩序化の過程でもありました。それは、民衆の既存のものへの抗議と変革への激しい情熱に支えられたものではありませんが、次第に過激化、とどまることを知らない破壊的衝動の爆発を導くことにもなっていました。農民反乱の拡大がそれです。その結果、この革命の行き着く先は、報復に次ぐ報復、残虐行為と殺人、暴力と破壊行動の止むことのないアナキー（無政府状態）でした。そして、それは、やがて理不尽な投獄と処刑が繰り返される独裁者の恐怖政治を生み出すことになりました。ロベスピエールの独裁です。革命がもたらしたものは、恐るべき混乱と幻滅のみでした。

しかし、こうした過程を経なければ、ナポレオンの総統政府が作りあげたような単一の法体系と政治システムをもった近代の国民国家は樹立できなかったとも言えます。封建的特権を廃止し、身分制社会を転覆して、自由・平等・博愛の精神に基づく近代の体制を確立するには、そのような破壊と創造の過程が必要だったこととなります。それは、途方もない行き過ぎと敵味方の関係の目まぐるしい変化、頻繁な指導者の交代などを伴う加速度的な運動であり、激動です。

このような歴史の急激な変化の過程を、十九世紀後半の偉大な歴史家ブルクハルトは「歴史の危機」と呼びましたが、古い秩序が崩壊し新しい秩序が樹立されるためには、何よりそうした創造的破壊を伴う「嵐の時代」を通過しなければならいのです。歴史は、崩壊と形成、混沌化と秩序化を反復しながら進展していきます。

創造と破壊を反復しながら進化していくのは、歴史だけとは限りません。生命も、創造と破壊を反復しながら進化していきます。長い生命進化の歴史では、生命は、小規模な絶滅や大規模な絶滅を繰り返しながら、休むことなく新しい種を形成して

きました。新しい種が誕生するには古い種が減る必要があります、進化のためには絶滅が必要だったのです。

このことは、わたしたちの経済や技術に関しても言えます。新しい技術が開発されると、それに連関した技術や製品が次々と開発され、旧来の技術は急激に絶滅していきます。しかし、そのことによって、経済は新しく発展していくことができません。大小の雪崩のような破壊が、新しい技術や経済を興隆させるのです。シュンペーターが主張しましたように、創造的破壊によってこそ、資本主義経済の発展はあったのです。

世界史を振り返ってみても、国家や王朝は樹立されたかと思えば崩壊し、帝国も興亡盛衰を繰り返してきました。その興亡盛衰の過程で、ヘゲモニー（覇権）が一つの国家から他の国家へ移動していきます。世界史は、政治や経済の世界的な緊張の蓄積と解放によって動いてきたと言えます。世界史を形成してきた戦争もその途上にあり、それによって国境も始終変更されてきました。二十世紀百年の世界史を見ても、二度の世界規模の大戦争をはじめ、小規模な戦争を繰り返しながら、歴史は展開してきました。戦争と破壊によって、蓄積されてきた富は一挙に消滅し、次の再構築に向かいます。国家の盛衰を見ても、その歴史は、創造と破壊を通しての発展であったことが分かります。

歴史の単位を国家を超える文明にとっても、文明もまた、創造と破壊を繰り返しながら、人類史を形成してきました。例えば、近代以前のユーラシアの文明史を例にとりますと、ここでは、しばしば遊牧民の侵入によって古い文明が破壊されるとともに、そのことによって新しい文明が創造されました。ゲルマン民族の大移動による古代ローマ文明の崩壊からヨーロッパ文明とビザンツ文明が誕生したのも、その一例です。文明も、挫折や解体や消滅を経験しながら、新しい文明を創造してきたのです。

一般に、国家にしても、文明にしても、歴史は創造と破壊を通して進化していきます。その創造と破壊の過程の中に、激しい変動があります。それは、苦悩と苦闘の歴史ですが、それがなければ歴史的变化も移行もなく、社会は硬化して、新しい環境に適応できません。古い構造を壊し、新しい形態を創造することなしに、歴史の進展はないのです。歴史は、秩序から混沌へ、混沌から秩序へ、崩壊と形成を繰り返しながら新しいものを生み出し続けていく動的系なのです。

創造と破壊の歴史において、 $\wedge$ 抗争 $\wedge$ は、むしろ歴史の創造原理としてなくてはならないものです。古い力と新しい力の激しい抗争は社会の秩序を乱し崩壊させてい

きますが、しかし、その無秩序から新しい秩序は創造されます。対立と抗争は生成の原動力です。戦いを通して、古いものは滅び、新しいものが生まれます。とするなら、創造的変革には、既存の秩序を破壊する闘争行動が必要だということになります。激しい衝突の中からこそ、新しい秩序が現われてきます。そういう時代はいつでも荒々しい動乱の時代であり、権力闘争の渦巻く変動期です。しかし、闘争がなければ進化はありません。

歴史は戦いによって動いてきました。歴史が飛躍するとき、戦いがあります。戦いは、わたしたちの歴史ばかりでなく、全自然の中で働いていました。生物の世界も、単に、各種の生物が平和に棲み分け共生している世界ではありません。そこには戦いがあり、競争があり、食う食われるの関係があります。万物は、戦いの中で生成消滅します。生は死になり、死は生になります。構築されたものは没落し、形作られたものは滅びます。絶えることのない変動と戦いの中で、歴史は盛衰するのです。

#### 歴史の悲惨さ

歴史の激動期には、古いものと新しいものの戦い、崩壊と建設のせめぎ合いによって歴史は飛躍していきますから、そこでは、善と悪は表裏をなして動いていきます。なかでも、都市国家から古代国家へ、古代国家から中世国家へ、中世国家から近世国家へ、近世国家から近代の国民国家へと歴史が飛躍する転換期には、善ばかりでなく、悪が横行します。歴史が加速度的に変化していくときには、醜い争いと闘争、戦慄すべき殺戮や略奪など、この上なく恐ろしい非業がなされます。

例えば、十五・十六世紀のルネサンス期のイタリアは、わが国の戦国時代同様、中世から近世への脱皮を先駆けましたが、それはまた、多くの都市国家や王国や法皇庁が絡んだ骨肉相食む戦国時代でもありました。ここでは、専制君主たちは、常にその地位が脅かされていましたから、君主たちは、あらゆる手段を用いてその地位を守るとともに、自国の存続をはかりました。そのために、肉親さえ信頼できない裏切りが横行、身の毛もよだつような悪行の数々が公然と行なわれました。その様子は、ブルクハルトも『イタリア・ルネサンスの文化』の中で事細かに記述しています。一例をあげますと、教皇の息子と言われる悪名高いチェーザレ・ボルジヤは、おそらくイタリア全体の支配への野望があったのでしよう、小支配者や傭兵隊長、聖職者や父親の寵臣などを、次々と殺害したり、毒殺したり、陰謀や奸計をめぐらし、殲滅していきました。その結果は、最後に、チェーザレ父子自身も何者か

によって毒殺されることになるのですが、この時代は、暴力や裏切り、欺瞞や復讐など、残忍な事件の連続でした。ブルクハルトの描くイタリア・ルネサンスの燦然と輝く芸術と文化は、甚だしい背徳と裏腹になっていました。しかし、ヨーロッパが近世という新しい時代へ脱皮していくためには、そのような醜悪と残忍はいわば必要悪だったとも言えます。

それどころか、歴史の変動期には、現実を脱却し新しい時代を建設しようとする理想が叫ばれ、それはしばしば狂信の域に達しますから、地上に天国を実現しようとする試みが、逆に地上に地獄をもたらすことにもなります。「聖地エルサレムは乳と蜜の流れる所、この地で不幸な者は彼の地で幸せを得るであろう。神はお望みだ」というような熱狂に動かされた十字軍運動の背後でも、野蛮な虐殺や略奪、奴隷売買などが横行しました。二十世紀の共産主義の実験の結果も、その理想とは裏腹に、戦慄すべき独裁と権力の乱用、自国民の大量虐殺という悲惨な結果を招いてしまいました。熱狂と狂気が蔓延するとき、それは無慈悲と野蠻を招きます。

歴史は、どう見ても理性的ではありません。歴史は、人間の利己心や欲情の渦巻く舞台であり、人間の業によって成り立っています。歴史における悪は、動かすことのできない事実として支配しています。しかし、そういう悪を通して歴史は変動し飛躍していくとするなら、悪もまた、歴史の創造的契機として、不可欠の役割を演じていると言わねばなりません。

一般に、創造と破壊を繰り返しながら、古いものが滅び新しいものが生まれる歴史の激動期には、大量の脱落者が出てきます。なるほど、そのような時代は、新しい階層や若い国家や民族などにとっては、発展と幸福獲得の時代のように見えます。しかし、実際には、その過程にどれほど多くの悲惨が伴っているか計り知れません。現に、多くの革命には恐怖や迫害が必ず伴っていました。歴史上偉大な時代と想われている時代には、意外と危険と災いと不幸が満ちているものなのです。としますと、現在の立場から単純に、過去の歴史に対して、幸不幸を判断することはできないこととなります。

例えば、十八世紀末から十九世紀にかけてのヨーロッパの産業革命の時代は、今日から見て、偉大な発展をした時代と思われていますが、実際には、農民の没落、児童労働を含む労働者の搾取、貧困層の拡大、共同体の崩壊など、悲惨な時代でもありました。二十世紀も、確かに世界史の大きな飛躍の時代ではありましたが、この激動期は、二度の世界大戦をはじめ、多くの革命と動乱の時代でもあり、そこでこの歴大な犠牲者のことを考えますと、決して幸福な時代であったとは言えません。

人間は、地球上に登場して以来、殺し合いをし、略奪し合ってきましたが、二十世紀の悲惨さはその極だったとも言えます。

激動期に登場してくる英雄の輝かしい勝利の陰にも、英雄によって打ち負かされ踏みじられてきた多くの敗北者の悲慘があります。歴史は一般に勝者の歴史として描かれますが、その勝者の背後には幾百万となき敗者がいるのです。成功者の背後には、多くの失敗者がいました。幸運にも栄えた者の裏には、不運にも滅び去った者が多数いるのです。人類の歴史は、ある意味で犠牲の歴史でもあります。社会や国家や民族が生き延びていくには、個人はいつも犠牲にされています。

世界史を一瞥しても、そこには、人間の様々な欲望が渦巻く修羅場が目に入ってきます。人類の歴史は、暴虐と悲慘、災いと労苦の歴史だったとも言えます。ブルクハルトも、人間の歴史を忍苦の歴史とみて、生の惨めさから逃れることはできないと考え、人間の歴史の中でも、特に残忍で過酷な側面を凝視していました。確かに、人間の歴史は苦悩と没落の物語だったのかもしれない。

### 歴史の飛躍

しかし、歴史は、創造と破壊を繰り返しながら、この悲惨さをも乗り越えて飛躍します。歴史においてエポック（画期）をなす革命や戦争は、そのような非連続的飛躍の契機です。また、偶然の発明や発見も、歴史の飛躍を起こす重要な契機になります。それは飛躍ですから、規則的に起きるものではなく、不規則的に突然起きます。規則性をもった級数も、後の項に至るまで規則正しく繰り返されることが保証されているわけではないように、たとえ歴史にある種の方向性が見出されたとしても、その後も、その方向性が続くとは限りません。歴史には突如とした飛躍があり、いわば「暗闇の中の跳躍」があります。ここでは、歴史は、それ以前の段階を組み込みながらも、それを超克して、新しい構造や形態を創発していきます。それとともに、法則やルールも更新され、新しい法則やルールが創造されます。歴史は、自己の中から自己でない自己を生み出し、自己自身を超出する力をもっているのです。

こうして、歴史は創造的に進化していきます。それは単なる進歩ではありません。進歩は、どちらかという段階的連続的な発展を意味していますが、進化は、むしろ、突如とした飛躍を意味しています。生物進化でも、例えば爬虫類から鳥類が生まれてくるように、地質学的時間から言えば、ほとんど一瞬にして、新しい種が出現し、新しい形態が創造されることがあります。この「大進化」といわれる生物進化

では、遺伝子の変異が同じ方向に向かって連続的に起きます。ちょうどそれと同じように、歴史にも、そのような革命的で自発的な飛躍があります。例えば、産業革命のように、技術革新に伴って、経済、社会、国家、宗教までが一定方向に向かって飛躍的に再組織化され、時代が一変することがあるのも、そうした歴史の創造的進化と言えます。このように、歴史に創造的進化というものがあるとすれば、歴史を因果律によって決定論的に記述することはできないと言わねばなりません。

長い人類史の過程も、何段階にもわたる革命的な飛躍によって成り立っていました。もちろん、個々別々の国家や文明の歴史にのみ注目するならば、その過程では衰退も滅亡も退化もあります。しかし、全体として見れば、人類史は、創造と破壊を繰り返しながら、絶えず新たな脱皮をして、より高度な秩序へと飛躍してきたと言えます。事実、石器の発明や火の発見によって食糧獲得を可能にした「人類革命」。農耕牧畜による飛躍的な生産性の向上をもたらした「農牧革命」。手工業や商業の発達によって人口の周密化と階層化をもたらした「都市革命」。ソクラテスや仏陀や孔子、そして古代イスラエルの預言者たちが創造した新しい哲学と宗教によって起こされた「精神革命」。それらを背景として古代帝国の出現を可能にした「政経革命」。キリスト教や大乗仏教を生み出した「高度宗教革命」。イスラム商人やモンゴルの騎馬軍団の活躍によって起こされたユーラシアの「商業革命」。十七世紀の西欧文明に生じた科学的な世界観の大変革、つまり「科学革命」。機械による大量生産を可能にした「産業革命」。そして、今日進行しつつある「情報革命」と、人類史は何度かの飛躍的發展を経て進化してきました。

ヤスパースは『歴史の起源と目標』の中で世界史の大まかな図式を提示しましたが、それも、このような人類史の飛躍に注目してのことでした。ヤスパースは、人類が道具を発明し、植物の栽培や動物の飼育を始めた先史時代を「プロメテウスの時代」とし、そこからメソポタミアやエジプト、インダスや黄河などに発生した都市文明を「古代高度文化の時代」としました。そして、それが発展し、ユダヤの預言者やソクラテス、仏陀や孔子に代表される高度な宗教や哲学が誕生した時代を「枢軸時代」と名付けました。十七世紀以後の科学や産業の発展によって導かれた今日の時代は、「科学的技術的時代」と言われています。ヤスパースの言う「プロメテウスの時代」は農牧革命に当たり、「古代高度文化の時代」は都市革命に当たり、有名な「枢軸時代」は精神革命に当たり、「科学的技術的時代」は科学革命や産業革命に当たります。

わが国の歴史に限定しても、稲作や鉄器や騎馬技術の流入による古代社会の成立、大乘仏教の伝播による古代国家の成立、商業の発達による中世国家の発展、鉄砲の伝来や西洋の科学知識の流入による近世社会の発展、西洋近代産業技術文明の流入による近代国家の成立と、何段階かの飛躍が見られます。ユーラシアの革命的な文明の飛躍に呼応して、わが国の歴史も、その構造や様式を大きく変容させてきたのです。

人類史の何段階かの革命的飛躍を見ると、そこでは、技術や経済ばかりでなく、その革新に伴って、社会、国家、宗教、文化、すべてが同時に大変革を起こしていることが分かります。それは文明の創造的進化であり、エラン・ヴィタール（生命の飛躍）だったのです。

しかも、この創造的進化によって、人類は環境への適応能力を増大させてきました。人類は、環境によって規定されると同時に、環境を規定します。環境から働きかけられることは、環境に働きかけることです。この環境との相互作用の中で、人類は新しい技術を開発し、社会の新しい形態や構造を創造し、新しい秩序を形成しながら、環境改変能力を増大させてきたのです。

現代も、科学技術の長足の進歩による人類史上の大きな飛躍の時期だと言えます。現代は、交通通信手段の発達とともに、十九、二十、二十一世紀と、時代を追うごとに、世界の統合に向かって大きく飛躍してきました。二十一世紀初頭に当たる今日も、情報技術の高度な発達のもと、経済もグローバル化し、世界は、近代がつくった国民国家の枠を破って、合一化に向かっていきます。確かに、この大きな飛躍は、人口の急激な増大や都市の肥大化、官僚統制の強化、大衆の登場による液状化、文化の画一化と専門分化を招き、必ずしも全面的に肯定できるものではありません。それどころか、二十世紀には二度の世界大戦を経験し、今日も、地球の各地で民族紛争が絶えず、戦争も一向になくなってはいません。しかし、破壊なくして創造がないとすれば、現代のこのエポック・メイキングな人類史の飛躍も、創造的進化の途上にあると言えるのではありません。歴史は、確かに飛躍してきたのです。

#### 歴史の相転移

自然界でも、例えば、零度の水が一挙に零下の水になるように、系内部の小さなゆらぎが増幅されてある臨界点に達すると、急激に新しい秩序がつけられる（相転移現象）が見られます。ここでは、無数の要素が相互作用していますから、最初のわずかな選択でも自己増殖し、同じ方向に向かう変異が連続的組織的に起きて、新

しい形態の急速な自己組織化が起きます。

わたしたちの歴史でも、技術や経済、社会や政治が同時に急激な変動を起し、社会が短期間に一变することがあります。ここでは、ともかく変わらなければならぬという集団心理が働き、同じような行動が、まるで細菌に感染したかのようにならに広がっていきます。このような動きは、ファッションや音楽の流行ばかりでなく、農民戦争や社会運動、技術革新などにも見られます。農牧革命や都市革命、精神革命や商業革命、科学革命や産業革命なども、そのような相転移現象だったのだとみることができます。そこには、各分野相互の協調を伴う複合的な過程が見られます。

歴史においても、多くの要素の相互作用から、新たな特性や形態、より複雑な構造や機能が、ごく短い期間で、自発的に、そして急激に創発してくるのです。それは、多くの場合、連続的な変化ではなく、非連続的な飛躍によってなされます。ある分岐点に差しかかると、永続的な安定は突然中断され、新しい形態が形成されます。

現に、人類史も、いくつかの分岐点を境にして、突如としてより高度な秩序への移行が起き、革命的な変化を遂げてきました。農耕牧畜の発見、文字の発明、国家の建設、高度な宗教や哲学や科学的知識の形成、商業や産業の発展などは、そのような歴史の創発現象でした。人類史は、そのようにして、単純なものから複雑なものへと進化してきたのです。

進化とは複雑化であり、複雑化とは(分化)と(複合)による(階層化)です。一つの単純な形態が一から多様々に枝分かれし分岐していくのが(分化)であり、種類の違ったものが合体して多から一へと統合されるのが(複合)であり、上へ上へと積み重なってより上位の層がより下位の層を組み込み乗り越えていくのが(階層化)です。わたしたちの歴史も、そのような分化と複合と階層化を繰り返しながら、新しい形態を形成し、多様性を増大させてきました。都市革命一つをとっても、ここでは、農業から手工業や商業が分化し、社会的分業が成立するとともに、生産階級や防衛階級、統治階級や祭祀階級など社会階層が形成され、さらに、都市と都市が複合しつつ、古代国家の形成に向かいました。

## 2 進化する歴史

### 生成発展する国家

人類史上に現われた国家形態も、部族国家、都市国家、都市国家連合、領域国家



古代国家、中世国家、近代国家と、階層的に生成発展し、複雑化してきました。小さな部族国家から始まった原始的な国家もやがて部族連合国家から都市国家に発展、その都市国家も、中心城市の力が弱い場合には、都市国家連合を形づくり、中心城市の力が強い場合には、領域国家へと発展していきました。古代エジプトやバビロニア、アケメネス朝ペルシアやマウリア朝、秦などの古代国家は、この都市国家連合や領域国家の統合によって形成され、それらは、ローマ帝国や漢に至って完成されました。しかし、やがてこれらも遊牧民の侵入などによって崩壊、封建制や専制による中世国家へと移行します。近代の国民国家は、この中世封建制国家や専制国家の解体と再編によって成立しました。

近代の国民国家は、単一の法体系をもち、領土を確定し、高度に組織された近代軍を設立し、対外的にも対内的にも主権を主張する主権国家であり、そのことによって経済活動を活発化し、国富の蓄積をはかろうとするものでした。前近代の身分制を廃止し、多くの封建的障害を撤廃する必要があったのは、そのためです。近代の国民国家が、言語を統一し、国民教育制度を確立し、ナショナリズムを鼓吹したのも、強力な主権国家を形成しなけりなかつたためです。近代史の目覚ましい飛躍も、近代の国民国家の成立なくしてはありえません。その成立には多くの軋轢と暴力による破壊が伴いましたが、近代国家への飛躍のためには、それは必要だったとも言えます。

わが国の幕末から明治維新に至る激動も、近代の国民国家への飛躍の過程でした。ペリー来航以来、開国論と攘夷論の対立の中、倒幕運動は激化し、騒乱や打ち壊しや一揆も多発、社会は無秩序化し、勢いづく倒幕派の武力抵抗の前に公武合体論も雄藩連合論も公議政体論も潰え去り、幕府は倒壊し、薩長藩閥による明治新政府樹立に至ります。そして、明治新政府は、版籍奉還、廃藩置県、身分制の廃止、近代軍の創設や学制の発布など、矢継ぎ早に近代化策を実行し、急激にわが国を近代の国民国家へ移行させました。しかし、この急激な革新と飛躍は、陰惨な報復と復讐、暗殺など暴力の横行、多くの犠牲を伴った内乱や秩序の崩壊を通してのことでした。新しい近代の主権国家を創造するには、政治・社会全般に及ぶ破壊が必要だったのです。

二十世紀末から二十一世紀初頭も、人類史は大きな飛躍の時期を迎えています。わたしたちは、目下、そのような大転換の渦中にありますが、この激動の本質は、国民国家から世界国家への飛躍ということにあります。情報技術と交通運輸技術の異常な発達のもと、経済はグローバル化し、国民国家間の相互依存度は強力に高ま

り、世界史は、すでに、国民国家の枠よりもっと広範な共同体に向かって飛躍しつつあります。ヨーロッパ諸国はその点では先駆けていますが、アジアも、否応なしに、そういう共同体の構築を必要としてくるでしょう。これらの動きは、具体的には、自由貿易圏の確立による市場統合と通貨統合、経済統合から政治統合、そして、いずれは世界政府の樹立へと向かうことになるでしょう。

もちろん、世界政府を樹立できたとしても、それですべての問題が解決するわけではありません。しかし、核兵器の管理、通常兵器の制限、地球環境問題の解決、南北問題の解決、人口問題の解決などのためには、それは不可欠なシステムだということにはなるでしょう。二十世紀の二度の世界大戦や米ソの冷戦などは、そこへ至るための創造的破壊の過程だったとも言えます。さらに、これからも、世界戦争はともかく、局地紛争や限定戦争やテロなどは絶えることはないでしょうし、宗教や言語、地域に根差すエスニック・グループの反撥もあとを絶たないでしょう。しかし、これらの問題を抱えながら、さらに大きく飛躍しつつあるのが、世界史の現在なのです。

国家は歴史的に生成発展していくものであり、階層的に自己自身を形成していく動的システムです。国家は一つとどこにとどまらず、絶えず自分自身を乗り越えて自己組織化していきます。国家の形態や構造は、その自己形成の過程でつくられる一定のパターンであり、それは、自己自身を維持しようとするとともに、同時にみずから変わっていきます。国家の形態や構造は、その場その場で歴史的につくられていくものです。その意味で、国家は誕生もし消滅しますが、その誕生と消滅を通して、世界史は休むことなく変貌していきます。その過程では、強大な国家の征服活動や多くの国家が入り乱れて戦う戦国時代もあり、変貌途上での社会の無秩序化や不安定化もあります。しかし、そのような破壊を通してでなければ、創造はありません。

なるほど、国家は、その存在を維持しようとして、極めて利己的な態度をとりまします。そのために、国家と国家の対立、国家と世界の対立は免れません。国家はいつもみずからの利益を主張し、世界から離反しようとする傾向にあります。個人は、そういう世界と国家の矛盾対立の中で時に引き裂かれ苦悩しなければなりません。そのような対立矛盾を通してのみ、新しい国家の形態や機能、制度や機構はつくられていき、国家そのものが生成発展していくのです。

歴史は、無数の出来事の相乗効果によって新しい秩序を不断に生み出していく創造的進化の過程であり、いつまでも変化してやまない生命の活動です。そこでは、

歴史を形づくる成員も滅び、社会も滅び、国家も滅び、文明も滅びますが、それらの死を乗り越えて、歴史はその生命を保つとともに進化していきます。歴史に終局はありません。歴史は、生きて動いていく流動であり、生命の飛躍によって成り立っています。歴史は在るのではなく、成るのです。

#### 歴史の中の変わらないもの

歴史は絶え間ない流れのうちにあります。歴史は間断なく変化しながら、瞬時もとどまることなく流動していきます。変転していく定めなき、それが歴史です。しかも、その歴史の流れは、途切れることなく何もかを創造しようとする流れです。日に日に新しく創造されていく過程の中で、可能態は現実態になり、現実態は可能態になり、飛躍が行なわれます。その歴史の流れは、不可測な流れです。流れる水は片時も一所にとどまらないように、歴史もまた一定の状態にとどまることはありません。一定の状態にとどまることは、硬直化を意味します。どんなに苦痛を伴おうとも、変転することのうちに歴史の命はあります。歴史には完成もなければ安定もありません。歴史は常に生成の途上にあります。

歴史を動かす力には、技術、経済、社会、政治、文化、宗教など、多くの力が考えられ、そこには、変わりやすいものもあれば変わりにくいものもあります。これら変わりやすいものと変わりにくいものとの緊張・錯綜の中で、歴史は変貌していきます。歴史は、変わるものと変わらないもの、新しいものと古いものなどの対立を同時に含んでいます。矛盾対立を含むがゆえに生成していくのが歴史です。矛盾は、あらゆる運動と発展の根源です。矛盾を含むかぎり、歴史は命を保ちます。絶えず流れゆく川のように、刻々と変わっていく動的なもの、それが歴史です。

もちろん、変化してやまない歴史の流れの中に、その変化を貫いて変わらないもの、歴史を貫いて繰り返される恒常的なものを見出すことはできます。例えば、その愚かさにおいても、その賢明さにおいても、その崇高さにおいても、一つの時代も、長い歴史の中で、人間は同じようなことを繰り返してきたとも言えます。文学や歴史学や哲学の古典といわれるものは、一般に、そのような人間普遍的なものを叙述し、考察してきました。だからこそ、古典は、今日の人々にも、変わることのない人間性の理解を示しているのです。

しかし、そのように歴史における変わらないものが見えてくるのも、変わるものがあるからです。変わるものがあるから変わらないものが見え、変わらないものがあるから変わるものが見えます。五十年ぶりに会い、見る影もなくなった友人の相

貌の中にも、幼いころの顔形を一挙に思い出すことがあるように、わたしたちは、変化の中にこそ不変を見出すことができます。歴史の中に繰り返される恒常的なものを眺め、一貫して変わらない人間性を歴史の中から抽出してきたブルクハルトも、だからこそ、歴史における変わるもの、激変するもの、〈歴史的危機〉について深く考察したのです。

政治、社会、宗教、文化、経済、技術など、多くの要素が互いに働き合って、歴史には一定の形態が形成されます。しかも、一つの形態が形成されると、それはある期間持続します。さらに、そのパターンはしばしば繰り返され、多くの場合、パターン相互の間には相似関係が見られます。そして、多くの歴史的事実の間を縫って、そこに共通のパターンを見出し、パターンの類似を取り出して歴史を叙述するのも、歴史家の役割です。

なかでも、古代ギリシア人は、この歴史におけるパターンの繰り返しに注目し、人間性の理解に供しました。古代ギリシアの最大の歴史家、トゥキディデスも、ペロポネソス戦争史の中で、内乱とそれゆえの災難を記述し、それは、人間の性情が変わらない限り、未来の歴史でも繰り返されるであろうと考えました。過去に起こった事件に似た事件はこれからも何度も起こるであろうから、それを語っておくことよって後の人々への教訓とすることが、トゥキディデスの歴史叙述の主要なモチーフでもありました。確かに、歴史的变化の中に現われる繰り返すもの、恒常的なもの、類型的なものを観察し、変わることのない人間の本性を抉り出すことは、歴史家の務めるべき仕事でしょう。

しかし、歴史上に生成して行く国家や政治の形態にしても、文化や宗教の形態にしても、さらに建築物の様式にしても、それらは一見不変であるように見えても、それを作り上げている歴史の諸要素は不断に交代し、片時も休んではいません。だから、一つの型がつくられても、やがてそれ自身変革されていきます。歴史の諸要素は、絶えず誕生し成長し減んでいきますから、どのような形態も永遠ではありません。歴史的形態は、緩やかに、また急激に変化します。違った形態がつけられるのも、歴史です。歴史は、生命と同じく、みずから形をつくりながらそれを変え、進化していきます。どのような形も未完成で、生成の途上にあるものです。何一つ安定した形はありません。形は動態的なものであり、進化していくものです。新しい形の生成は古い形の崩壊を促し、不変なものも変わりうるのです。

川の流れが障害物にぶつかって渦を巻きながらその方向を変えていくように、わたしたちの歴史も、いくつもの渦をつくりながら変化していきます。その渦の中に

は、長く続く渦もあれば、束の間に消えてしまう渦もあり、よく似た渦もあります。しかし、どれ一つとしてまったく同一の渦はありません。ヘラクレイトスが万物の流転の中にロゴス（法則）を見たように、絶えることのない動きと変化の中にあるからこそ、恒常的な形も見えてくるのです。

無数の出来事の相互作用から成り立つ歴史は、全体としては不規則な流れなのですが、その中でも、一定期間規則的な動きをする時があります。不規則性の中にも規則性が見出され、規則性の中にも不規則性が見出されるのが、歴史です。そのうち規則性に注目するならば、確かに、歴史においては一定のパターンが形成され、しかも、そのパターンとパターンが相似形をなすことがあります。わたしたちが歴史において相似た形を見出し、そこに、繰り返すもの、恒常的なもの、類型的なもの、典型的なものを見出しうるのは、歴史がそういうダイナミズムに基づいているからです。しかし、歴史は突如として不規則な変化に移行することがありますから、法則は立てられません。歴史は、突如として革命的变化や大変動を起こしますから、法則を立てることはできないのです。

#### 歴史の連続と非連続

歴史は、また、過去から現在、現在から未来への継承であり、その点では、歴史の時間は連続です。しかし、歴史にはしばしば革命や変革があり、それを期にして歴史は飛躍していきます。この点では、歴史の時間は非連続です。歴史には転換期があり、それを境にして時代も区分されます。転換期では、歴史は過去を完結することなくむしろ停止し、新しい時代を創造していきます。

歴史には切断面があります。歴史的時間は現在において非連続であり、この非連続な断層を境にして、未来は過去を乗り越えます。ここでは、過去は、文字通り過ぎ去ったものとなります。一つの時代は滅び、新しい時代が生まれます。時代はただ連続的に推移するのではなく、非連続的に変転していくのです。歴史的時間は、一瞬一瞬断絶を孕みながら推移していきます。歴史は縫い目のない織物ではないのです。生成のためには、消滅がなければならず、消滅のためには、生成がなければなりません。そして、生成と消滅の間には、いつも断絶があります。

歴史の時間は絶えざる創造の時間であり、非決定的な時間です。各瞬間ごとに新たな世界が生まれています。過去、現在、未来の時間も、瞬間の出来事から生成してくるものと考えねばなりません。歴史の出来事は、瞬間において発生する火花です。過去と未来は、この現在の瞬間において接触します。現在は、過去を含み未来

を孕むと言われますが、過去から未来への推移には、瞬間の断絶があります。この断絶に永遠は働き、歴史的形成が起きます。瞬間は、時間の内にありながら、同時に永遠への通路でもあります。歴史の創造は、瞬間を通じた永遠なものとの交渉の内になされます。現在の瞬間は、新しいものの生まれ出る陣痛の時です。現在の瞬間のところで、決定的過去は非決定的未来へと跳躍します。そして、過去の運命は未来の自由へと乗り越えられます。

偶然は、この現在における飛躍において働いています。偶然が働くかぎり、歴史的時間には断層があり、非連続面があります。とすれば、偶然と永遠は深く連関していると言わねばなりません。偶然は、いわば神のいたずらなのです。歴史は、この神のいたずらに翻弄されて、思わぬところに動いていきます。

時間ばかりでなく、空間も、現在の瞬間の出来事から生成してきます。運動し変化する渦中の瞬間から、時間も空間も紡ぎ出されてきます。歴史は、建築や芸術の新しい様式の誕生のように、時間的に新しいものを生み出し、それを形態や構造として空間面に表現します。現在は、時間的であると同時に空間的です。〈遠い過去〉〈近い将来〉と言われるように、時間と空間は互いに浸透し連続しています。時間と空間は螺旋的に絡まり、進化が起きます。歴史的時間は螺旋的です。螺旋的時間は、古代の回帰的時間と近代の直線的时间を総合します。

なるほど、わたしたちは、無始無終の直線的时间を仮定し、紀元を設け、年代を設定し、そこへ歴史的事件を位置づけ、それらの前後関係から歴史の因果関係を推測します。しかし、このような時間は、ニュートンの絶対時間同様、一種の空間であり、真に動いてやまない創造的時間を後からの反省によってとらえた時間にすぎません。それは、無味乾燥化した零落した時間です。

螺旋的に飛躍していく時間は、偉大な革命家の決断や創造的な発明家のひらめきにも見られるように、現在の瞬間における行為の中からほとぼり出てくるものです。過去と未来が接触している現在の瞬間における行為が、未来への跳躍を可能にします。へいま、ここでの行為は、現在の中に含まれる過去を乗り越え、未来を開きます。歴史的形成は、現在の行為の決断からなされます。歴史は、瞬間ごとの決断によって、瞬間ごとに創造されています。そこには断絶と飛躍があり、悲連続があります。歴史的時間の連続性を断ち切る瞬間における行為にこそ、永遠と歴史の接点があります。

## 第四章 歴史の認識

—歴史は過去・現在・未来の映し合いである—

## 1 歴史家によってつくられる歴史

### 歴史的事実は知られるか

天正十年（一五八二年）六月二日の夜明け、明智光秀は、主君の織田信長が滞在していた京都四條本能寺を襲撃、ほとんど無防備に近かった信長は自害し、信長によって完成されつつあった天下統一の事業は挫折、わが国の戦国時代の地図は一変しました。本能寺の変です。当時、信長の宿将はそれぞれ京畿を離れていたために、中国地方攻略を命じられていた光秀は、その機を狙い、踵を返して、大兵をもって京都に引き返し、信長に反旗を翻したのです。このとき、信長は「是非に及ばず」と言っており、数本矢を放って防戦、さらに鎗でも応戦の後、燃える火の中で自害したといわれています。

しかし、この本能寺の変の一部始終は本当にあったことなのでしょうか。織田信長の行状や明智光秀の行動は、記録としては、『信長公記』によって知られます。しかし、そこには、記録者の脚色や解釈が含まれているために、必ずしもすべて信頼できるものではありません。『信長公記』の作者自身、本能寺の変の一部始終を見てきているわけでもありません。たとえば、本能寺の変を直接経験し目撃した人々でさえも、その報告は様々で、何が真実かは、事件の直後から定かではなくなっていたでしょう。まして、それ以後の記述になれば、記述者の思惑や解釈が加わり、ますます信用できなくなりそうです。本能寺の変について記述した記録や本能寺の変が勃発する直前の各戦国武将の書簡など、史料は数多く残されています。しかし、そこから、本能寺の変という大事件をあった通りに完全に再現できるかどうかは、疑問だと言わねばなりません。そこには、各人のそれぞれの思惑が紛れ込んでくるからです。

どんなに優秀な戦国時代の研究者でも、織田信長や明智光秀に直接会ってきた者はいません。本能寺の変という歴史的事件そのものが実際にどのようなものであったかということは、実のところ誰も知ることはできないのです。本能寺があったといわれる京都の現在地を発掘すると、確かに火災があったことが分かる程度にすぎません。本能寺の変そのものは、現時点ではもはや存在しないのです。

歴史は、多くの出来事から成り立っています。出来事は、他の出来事すべてを含んで生じてきます。しかも、出来事は推移します。出来事は、起きたかと思うと、すぐに消え去ってしまいます。出来事は過ぎ去り、過去のものとなった出来事はすでに消滅しています。だから、わたしたちは、歴史的出来事を直接見たり聞いたりするこ



とはできません。

過去は過ぎ去ったものであり、歴史的事実は今はもうどこにもないものです。そのため、過去の真実をわたしたちは知ることができません。まして、事件の登場人物の動機や心理、意図や目的など、内面の心の動きとなると、実際にどういうものであったかということは誰も知ることはできません。それは、ただ憶測されるだけで、そこには、ただ痕跡が残っているだけです。歴史は痕跡からしか知られないもので、残された記録や証言から推察する以外にないものです。ちょうど、原子核乾板に現われた軌跡から粒子の存在を推測する物理学者のように、歴史家は、自分の前に残された史料から歴史的事実そのものを推測する以外に、歴史的事実を知るすべはありません。歴史家と歴史的事実との間には、わたしたちと博物館のガラス窓越しの陳列品以上の隔たりがあります。歴史家は、運命的に、歴史的事実を直接には確認することができないのです。

なるほど、歴史家の前に残されている史料は、何らかの歴史的事実を物語る記録や証言には違いありません。しかし、たとえ現場に居合わせた証人の証言であっても、その証言には、証言者の思い違いや記憶違い、別の意図や思惑、ときには希望的観測や自己弁護などが、意識的にしろ無意識的にしろ入り込み、必ずしも信用できるものではありません。また、直接の観察者といっても、観察者の視野は限られていますから、その証言のいくらかの部分は伝聞を含んでいます。だから、証言には、事実とは違ったしかたで伝えられている部分があります。歴史の記録や史料にも、事実とはズレた記述や解釈が含まれていることが多いのです。そのため、歴史的事実は別様に伝えられています。

さらに、へ嘘からでた信と言われますように、伝聞や思い違いによる誤った証言でも、その証言がいかにもありそうで、人々の願望に適っているときには、それはしばしば本当であったこととなつて、事実化します。間違つた証言が大方の支持を得るのは、それがその時代の一般世論と合致し、一般世論がその普及を助長するからです。

なるほど、証拠はいくらも提示されるでしょう。しかし、事件が、言われるように起きたことの証拠になるには、それを証拠とする図式がなければなりません。その図式は、往々にして、その事件が起きたときの状況よりも、それ以後の時代に醸し出された観念によってつくられていくものです。本能寺の変についての証言があったとしても、それが、光秀の信長に対する謀叛の証拠となるには、それを謀叛とする図式がなければなりません。その図式が変われば、光秀の行動も、単なる戦国時代の合理的行動にすぎなくなります。

### 歴史に制約される史料

歴史は、歴史的出来事を意味すると同時に、その出来事の記録をも意味します。歴史的出来事は、公文書、伝記、手紙、日記、覚書、証書、碑文、遺物など、生じた出来事を目撃または伝聞した人が書き記した記録や出来事の痕跡から、間接的にしか知ることができません。しかし、その記述や痕跡がどれだけ正確に事実を伝えているかは、多くの場合不確かであり、それらにも誤謬や偽りや多義性があります。したがって、そこから再現される歴史的事実にも歪みが生じます。

それどころか、わたしたちの手元に残されている史料は膨大な記録の一部にすぎず、そのほとんどは紛失しているか消滅してしまっています。そのため、事実があったとしても、記録がなかった場合には、極端な場合、事実は存在しなかったことになってしまいます。記録のあるなしが決まります。しかも、記録が残るか残らないかは、歴史が決めます。歴史史料は確かに歴史を映しているのですが、同時に、それは歴史そのものによって制約されているのです。そのような制約された歴史史料によって歴史は構成されていくのです。

例えば、考古学的資料では、石製品や金属製品は比較的よく残りますが、有機物は残らない場合が多いのです。このことによって、先史時代の像が歪められている可能性があります。有史以後でも、例えば、古代ローマ時代、ベスピオ火山の噴火によって幸運にも保存されたポンペイ遺跡のような場合もあれば、シーザーの遠征などによって失われてしまったアレクサンドリアの大図書館の蔵書のような場合もあります。もしも、仮にポンペイの資料が残らず、アレクサンドリアの図書館の資料が残ったなら、古代ローマ像も相当変わっていたでしょう。歴史史料そのものが歴史的に保存されたり廃棄されたりするのですから、それによって再現される歴史の全体像はどのようにも変わりうるのです。しかも、歴史史料が残るか残らないかは、かなりの部分偶然が左右します。わたしたちが現在もっているある時代のイメージも、歴史の偶然によってつくられているものなかもしれないのです。

さらに、歴史の記録には、一般に、記録に値する事件だけが記録され、記録に値しない事件は記録されませんから、おのずとそこに記録者の価値観が入ってきます。歴史の記録者は、通常、戦闘や動乱など大きな事件に注目し、日常当たり前のように繰り返されていることには、あまり関心を示しません。例えば、中国の歴史書では、しばしば遊牧民が攻めてきて、それに悩まされたこと、または、それを征伐したことなどが記述されていますが、日常行なわれていた遊牧民との交易の記録は極めて少ない

のです。そのため、中国の歴史書の視点だけから遊牧民像をつくと、遊牧民の戦闘性だけが強調され、本来の遊牧民のイメージが歪められてしまします。同じようなことは、今日の新聞の社会面の記事だけで現代社会の像を作るような場合にも言えます。そればかりか、歴史的記録には偽造されたものが多いのです。古代でも、中世でも、近世でも、現代でさえも、偽文書は作られます。土地の所有権の主張や家系の捏造など、偽文書には、意図的にしろ、無意識にしろ、文書を作った者の自己弁護や自己主張が込められています。歴史的事実がその通りかどうかは、必ずしも、文書によって保証されません。記録は生きた歴史の残骸です。残された記録だけで、実際の歴史の全体像が知られるわけではありません。記録と歴史は、一対一の対応をなしていないのです。

#### 歴史的事実の選択と解釈

歴史は、無数の歴史的事実から形成されています。しかし、歴史家は、この果てしない過去の事実のすべてを記述することはできません。歴史家が、ある時代やある事件のまとまった像を描きあげるには、事実の海から、それに必要なものだけを選び、他を省略する必要があります。わたしたちが読んでいる歴史は事実に基づいてはいくつかもありませんが、実際には、歴史家の手によって多くの選択がなされてきた歴史です。選択のしかたによって、歴史像は変わります。そのため、同じ時代、同じ事件でも、歴史家によって描き方が違い、ときには、逆さまの評価が下されたりすることもあります。もともと、歴史的史料そのものが、すでに多くの選択を経た記録です。仮に、それが、何らかの事件を目前で経験し、それに関与した人々による証言であったとしても、そこには、すでに証言者自身による選択があります。歴史家は、さらに、これらの史料を選択して、自分なりの歴史像をつくっていくのです。

歴史家は、この場合、歴史家の関心に従って問題を絞り、視野を限定して、その視野に入ってきたものを多くの史料から選択し、事実を描写します。それはちょうど、昆虫が植物全体を見ないで、自分の喰えそうな葉っぱの部分だけを見ているのに似ています。わたしたちも、自分の関心に適い、自分の目に迫ってくるもののみを見ます。ちょうどそれと同じように、歴史家も、ある事柄に対しては多くの注意を払いますが、別の事柄には払いません。このとき、視野の制限による無意識の選択が生じます。

そればかりか、視点の遠近による無意識の選択もあります。例えば、顕微鏡で物を見ると、確かに、今まで見えなかったミクロの世界は見えるようになりますが、その分視野は狭くなり、マクロな部分が見えなくなります。それと同じように、歴史家の

視点が近視眼的で微視的なときには、歴史事象の全体は隠れてしまいます。この場合にも、おのずと事実の選択がなされていることとなります。しかし、それを是正するために、ちょうど画家が二、三步退いて絵の全体を見るように、遠視的に歴史の全体を眺望したとしても、なるほど視野は拡大しますが、今度は細かい部分が見えなくなり、歴史的事件の微細構造は省略されることになります。

歴史家は、自分なりの価値判断に従って、多くの史料から重要と思うものを選び、重要でないものを捨てます。そこには、否応なく、歴史家の主観的な価値観が入り込んできます。もともと、歴史研究者は、史料を探すにも、史料の海のどの辺を探せば自分の関心のある事実の記録が見出せるか、ある程度見当を付けて探索し、選択してくるのです。そのため、史料の選択は、歴史家自身の歴史観や世界観に左右されることとなります。歴史家は、それぞれの図式や尺度、ときにはイデオロギーをもっており、それによって史料や事実が選択されるのです。

新聞のニュースも、価値あるニュースかそうでないかは、新聞社の方で選択がなされています。その扱い方も、一面トップにするか箱記事にするか、新聞社によって異なることがあります。それによって、事件の重大さの印象も変わります。自由主義国の新聞と社会主義国の新聞では、同じニュースでも、まるで異なった扱いがなされます。歴史記述でも、これと同じことがなされるのです。歴史家は、選択し解釈することによって、歴史家であることができるのです。事実を語らず、語るのは歴史家なのです。

単なる年代記的な事実の羅列や単なる百科事典的な資料の集積では、歴史にはなりません。歴史家は、これらの集められた事実の配列を考え、組み立て直し、歴史を物語ります。そこに、おのずと歴史家の解釈が入ってきます。しかも、その解釈は同時代においてもなされ、次の時代、さらに次の時代にもなされます。だから、伝言ゲームのように、ときには、似ても似つかない事実が作り出されていくこともあります。たとえ、そうではなくても、歴史的事実は神話化されます。

歴史家は、自分自身では経験しなかった事実を、多くの推測を用いて再構成します。だから、歴史的事実は、歴史家がそのまま虚心に眺め、叙述したものではなくて、歴史家によって見通され、物語られたものです。例えば、考古学の遺物でも、それだけでは遺物にすぎず、それがある事件の証拠とするためには、物語が必要で、人骨が出てきて、それを単なる埋葬とみるか、人身御供とみるか、戦争とみるか、様々な物語ができます。さらに、歴史記述の背後には、記述者ばかりでなく、聞き手や読み手がいますから、その聞き手や読み手の関心を引くような事実の選択もなされます。

こうして、聞き手や読み手の好みが、歴史記述に反映してきます。歴史は常に誰かにとって存在するのですから、それに合わせて、歴史叙述の潤色が起きるのです。

〈死人に口無し〉と言われますように、もはや存在しない過去の事実に対しては、ある意味で、どのようなことでも言うことができます。どう言われようと、死人は抗弁できません。死者達は孤独で、どのようにも物語られていきます。そのため、歴史は、ときには故意に歪曲されたり、改竄されたり、捏造されたりもします。クローチエが、詩的歴史とか、弁論的・実利主義的歴史とか、傾向歴史とか、要するに偽歴史と言ったのは、そのような歴史叙述を指してのことであつたと思われれます。

確かに、十九世紀以来の実証史学は、ただひたすら事実を知り、事実によって歴史を語るという精神に基づいて、大きな成果をあげてきました。それは、先入観を交えずに、歴史的事実をありのままに認識して、歴史的事実が語る通りに歴史を記述すれば、過去の真実はその通りに知ることができるという信仰に根差していました。しかし、歴史的事実は、その事実が生じたその当初からすでに物語られ、それ以後も物語られ続けていきます。とすれば、確固とした歴史的事実が疑いもなく存在するという実証史学の素朴な信仰は崩れ去ります。

実証史学の泰斗ランケは、厳密な史料批判によって、過去の事実が純正にどのようであつたかということを描写することができる信じ、おのれを消し去って、ただ事実のみによって語らせたいと考え、それを実行しました。しかし、そのランケの叙述さえ、十九世紀当時のヨーロッパ国民史の枠と、ランケ自身の王統派的立場を超えることはできなかったと言われます。史料とその批判を通して、過去の事実をそのまま事実として再現することができるという実証史学の信念は、疑わねばなりません。

実証史学者が、どんなに自分自身を無にして、虚心坦懐に史料を読むにしても、その史料は、鏡のように、そのまま事実を反映しません。史料には意図的な歪曲や曲解、意図しない潤色などが付きまといまますから、歪みや屈折が生じます。だからこそ、実証史学が主張するように、史料の信憑性や信頼性についての批判が必要なのですが、それがどの程度厳密に行なわれるかは、歴史家によって度合いが違います。そのため、史料は、それを取り扱う歴史家の態度によって、いろいろに解釈されます。同じ一つの史料からでも、異なった解釈が引き出されます。歴史的事実は、むしろ、このような解釈や図式があつてはじめて浮かび上がってくるものなのです。史料の意味を明らかにするのは、史料そのものではなくて、歴史家自身なのです。

歴史は、実のところ、過去のことを語っているわけではありません。歴史的事実の選択の基準も過去にはなく、いつも現在にあります。だから、時代が変われば価値観も

変わり、過去の歴史の中から何を重要なものとして選択するかも変わってきます。選択そのものは、その時代その時代の関心によります。歴史とは、ある時代が注目したことの記録であり、それは次の時代には書き変えられます。歴史叙述そのものが歴史的に変化していくのです。歴史は歴史叙述を越えているのです。

## 2 主観と客観の出会い

### 歴史の中の普遍的なもの

歴史学は、歴史的事実に即しながら、個々別々の事件の個性的な特色を記述します。個性を無視して一般的本質のみを記述しても、哲学にはなっても、歴史学にはなりません。しかし、単に歴史的事実の詳細を事細かく記述するだけでも、歴史認識は成立しません。歴史を語るということは、細かな事件の記述であっても、それを通して、ある種の一般性を語っていることとなります。例えば、多くの史料から、本能寺の変をその背景から事実まで詳細に記述するにしても、おのずと、そこには、歴史における偶然とか決断とか、因果とか激動が描かれていることとなります。どんなに個別的で特殊な歴史記述にも、その中には、何らかの普遍的な視点が盛り込まれているものです。全体的視野を欠いた歴史叙述は、単なる物知りのための読み物にすぎません。歴史学は、ただ個別的で特殊なものだけを記述していればよいものではありません。

歴史家は、多くの史料に残された出来事の痕跡から、ある仮説を立て、歴史的事実を取捨選択しながら秩序立て、そこから一般的な本質を抽出してきます。そこには、歴史家の解釈があります。歴史家には、個別の記述ばかりでなく、普遍的視点も要求されます。歴史記述は、ただひたすら史料の語るところに従って客観的事実を記述しなければなりません。そこにも、ある種の普遍的な評価は必要なのです。そういう一般化があつてはじめて、歴史から学ぶということが出来ます。偉大な歴史家であればあるほど、詳細な歴史の記述をしながらも、そこに、いつも変わらない人間の本質や、逆に人間の移ろいやすさを浮き彫りにしてきます。トゥキユデイスの『歴史』、ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』、ホイジンガの『中世の秋』などは、そのような個別の中の普遍を描いているからこそ、偉大な歴史書と言われるのです。

クローチェが言うように、普遍的認識と個別的認識は相異なる二種類の認識ではなく、両者は不可分です。普遍は個別の中に具体化しなければなりません。歴史学の役割は、一回限りの個別的なものから普遍的なものを取り出すことであり、特殊なもの

のうちに含まれる一般的なものを引き出すことです。個別の中にこそ普遍があります。

### 歴史と因果

個別的なものから普遍的なものを取り出し、特殊なものから一般的なものを引き出す場合、歴史学は、差し当たり、因果関係のカテゴリーを用います。相互に関連する無数の歴史的出来事を原因と結果の系列に整理し、それを歴史的事件の説明に置き換えます。つまり、歴史的事件の諸原因のリストを秩序づけ、原因相互の関係を整理して歴史を説明します。歴史家の試みは、何よりもまず、混沌とした歴史的事実の間に因果性を見出し、歴史過程のうちに意味を見出そうとする試みだということになります。確かに、因果律は、対象を理解するときの一つの方法であり、科学的説明は一般に因果の説明です。歴史学も一つの科学でなければならないとすれば、歴史学は、歴史的事実を因果連関によって究明する科学だということになります。

しかし、歴史的イベントは、無数の原因が交差する結び目のところに発生します。歴史的世界は、時間的にも、空間的にも、無限の要素の相互連関によって成り立っている世界ですから、因果の連鎖は、時間的にも空間的にも無限に広がります。原因の数も種類も無限であり、原因と原因も相互に関連しています。そのため、歴史学は、歴史的出来事すべての原因を探査することはできません。歴史的出来事すべての原因とその相互連関を説明できて、はじめて歴史的説明ができたと言えるにしても、それは不可能です。そこで、歴史学は、この原因の無限連鎖を断ち切って、歴史的出来事の原因と結果の理由をある程度説明しうるための方法として、無数の原因の中から主立った原因をあげて整理し、秩序づけようとします。

とは言え、歴史家は、原因探究の無限連鎖を避けるために、そのような妥協案を考へるとしても、その主立った原因にも様々な種類のものがあります。一つの歴史的出来事が発生するには、直接的原因もあれば間接的原因もあり、外的原因もあれば内的原因もあり、遠い原因もあれば近い原因もあります。しかし、どの原因から始めてどの原因で終わるべきか、また、その範囲をどの程度に収めておくべきかのルールはありません。

例えば、遠い原因と近い原因を考えるにしても、あまりにも近い原因だけを考えると、十分な因果の説明にはなりませんし、あまりにも遠すぎる原因をあげても、十分な因果の説明にはなりません。本能寺の変で信長が自害したのは手勢が少なかったからだけというだけでは、本能寺の変の本質を十分説明したことにはなりません。しかし、本能寺の変の原因を遠く応仁の乱による室町幕府の弱体化に求めても、本能寺の変の

本質を説明したことにはなりません。歴史家は、普通、あまりにも近い原因やあまりにも遠い原因は切り捨てて、中間的な原因をいくつかあげること満足しているようです。

しかも、歴史家がどのような視点から、どの程度の水準で妥当な原因をあげるかは、歴史家の裁量に任されています。歴史家は、歴史的事件の原因追究を行なわねばならないとしても、その原因の選択は歴史家によって多様であり、そこに、歴史家それぞれの価値観が深く影響してきます。歴史家は、自分なりの図式を用いて、歴史的事件の因果連鎖を限定していきますが、何を主な原因とし、何を決定的な原因と判断するかは、歴史家をもつ図式に依存しているのです。原因の種類でも、個人の心理的原因を重視する歴史家もあれば、社会的経済的原因を重視する歴史家もいます。物質的原因を重視する歴史家もいれば、文化的原因を重視する歴史家もいます。こうして、歴史家は、同じ出来事でも異なった原因をあげることができ、異なった物語をつくることができます。歴史は、歴史家によってつくられるものなのです。

歴史家が、主立った原因や附帯的な原因をあげて歴史的事件を説明すると、読者は、その歴史的事件が起きるべくして起きたことのように理解します。実際、歴史家は、歴史的事件のいくつかの原因をあげて、それは歴史が進むべき唯一の道であったかのように描きます。しかし、それはいわば結果論であり、果たして、本当にその歴史的事件が起きるべくして起きる必然性があったのかどうかは分かりません。歴史家は、現在の立場に立っていますから、過去の事件の結果を知る立場にあります。歴史家は結果を見て、それに合う原因を探究しているのです。歴史的事件は、原因から結果が引き起こされているのですが、歴史的探究は、結果から原因へと廻ります。だから、何を原因とするかは、結果次第ということになります。結果がむしろ原因を生み出していることになります。原因は、いわば結果の結果なのです。歴史家は、結果が分からなければ、原因を探究することもできません。

実際の歴史には、瞬間瞬間ごとの分岐点で、どちらの方向にでも動いていくいくつもの可能性があります。そこには、決まった結果が生じる必然性は必ずしもありません。歴史的事件を因果律によって説明する歴史学の方法は、歴史的事件が起きて後の反省の段階でなされることです。それは、歴史的行為の現実から離れ、それを外部視測的に眺めたときになされる説明にすぎません。実際の歴史的行為は、ある意味で原因も分からず、どちらの方向に行くかの可能性も予測できずに動いていくものなのです。すなわち、実際の歴史的行為が、後の歴史家が説明する通りの因果的で合理的なものであったかは定かではありません。歴史的行為は、因果的に説明されたとき、まったく



色褪せたものになります。わたしたちは、習慣に基づいて、前に起こった事態が後に起こった事態の原因であると考えがちですが、歴史的行為をその内部から見ると、必ずしも、そこに必然的因果があるとは言えないのです。

渦中を行為している歴史的事件の当事者から見ると、未来は予測不可能で、偶然に満ちています。偶然が介入する予測不可能な世界には、因果律は適用できません。それでも、無理に因果律を適用しようとすれば、歴史における偶然性は除外されてしまいます。そして、歴史学のもう一つの課題、歴史的事実の個性記述が阻害されてしまいます。偶然の問題を考えるなら、歴史的出来事の連鎖を因果律によって秩序づける歴史家の試みは挫折せざるをえません。

多くの原因から多くの結果が出てくるのが歴史なので、少なくとも、歴史を単純な原因に還元することはできないでしょう。歴史的事象を、ある一つの原因によって説明し尽くすことはできません。もしもそうしたら、他の原因から起こったかもしれない当の出来事や、同じ原因から起こったかもしれない他の出来事を見逃してしまいます。歴史は、一因一果で進みはしないのです。

そのため、歴史家は、単一の原因追求が不可能な場合、歴史的事件の複数の原因をあげて、その説明に代えます。例えば、第一次大戦が起きた主な原因は、帝国主義の発展と行詰まり、バルカン問題の先鋭化、オーストリア皇太子の暗殺事件だったとされ、この三つの事実が因果律でつなぎ合わされ、第一次大戦の勃発の説明にあてられます。しかし、歴史的事件の連鎖は予想外の事件によって破られたり逸らされたりする危険がいつも伴っているのですから、たとえ、歴史的事件の説明のために多くの原因をあげるにしても、原因結果の決定的連鎖を見出すことはできないでしょう。

#### 仮説と図式

歴史家は、歴史的事件から離れたところに立っていますから、時間と空間の制限から解放されたれ、時間と空間を操作できる特権的な位置に立っています。歴史家は歴史的事件の結末をすでに知っており、歴史的事件の渦中にいた人々の知り得なかったことを知っていますから、時間的にも空間的にも切り離されている事柄を結び付けることもできます。

しかし、歴史は、無数の出来事が複雑に絡み合っって相互作用し次々と新しいものを生み出す動的な系です。ここでは、一つの出来事を説明するには、他のすべての出来事を説明しなければなりません。したがって、歴史家は、特権的な立場に立っていたとしても、現実には、過去の歴史的出来事ありのままに描くことはできません。

そこで、歴史家は、複雑な歴史的事実という材料を、例えば因果というカテゴリーで整理し、有意味と思われた事実を選び出し、合理的に説明しうる部分を取り出して、一定の類型にはめ込みます。こうして、歴史家は、複雑な歴史を単純化します。歴史家は、歴史を、いわば時間的にも空間的にも縮約して叙述するのです。したがって、実際の歴史と歴史叙述には大きな隔たりが生じます。骸骨で美人を表現する場合のように、抽象的表現と事実の間にはもともと大きな落差があるものなのです。

歴史家が、古文書であれ、金石文であれ、考古学的遺物であれ、残された痕跡から歴史的事実を再現する場合、仮説なしには再現できません。歴史家は、史料から取り出されてくる雑多な歴史的事実から、ある仮説に基づいて、必要な事実を抽出してきます。逆に言えば、歴史家が何を事実として選び出してくるかは、歴史家もつ仮説によります。仮説なしに、歴史を研究することはできません。歴史叙述も、仮説に照らして選び出してきた歴史的事実を再構成することによって成り立ちます。また、記述の単純化とか縮尺も、仮説なしにはできません。もちろん、その仮説が成り立たず、事実によって反駁されるときには、歴史家は仮説を修正します。しかし、なんの仮説もなしに、歴史研究を進めることはできません。

実際、歴史家も、史料を探すときさえ、ある先行図式をもって史料の海の中に潜入します。古文書や考古学的資料は、それだけでは単なる史料にすぎません。史料は、歴史家がそれに対して先行図式を通して問いかけなければ、みずから語ってくれません。事実を引き出すには、認識の図式が必要です。

歴史家が歴史を叙述する場合でも、ある一定の観点から重要な事実と重要でない事実を分け、それを加工してはじめて歴史の叙述となります。歴史研究者は、歴史的对象に自分なりの図式を当てはめることによって、歴史的认识を成立させています。それはちやうど、画家が、ある構図から対象を選択したり、単純化したりして、独自の絵を創作するのに似ています。だから、同じバラの花を描くにしても、画家によって違ったしかたで描かれます。それと同じように、歴史家も、みずからの仮説に基づいて歴史的事実を選択や単純化を施し、歴史を描写しますから、同じ歴史的事件を描いても、その描き方は歴史家によって異なります。

その意味では、歴史をどのように記述していくかは、記述する歴史家の人生観や世界観に依存します。歴史家のもつ史観がその歴史叙述を根底において規定しているのは、そのためです。歴史家のもつ史観こそ、歴史叙述を生み出し、ひいては歴史的事実そのものをも生み出しているとも言えます。とするなら、本能寺の変という歴史的事実も、歴史家の叙述のしかたによって、いくつも生起しているということにもなり

ます。

#### 歴史の不確定性原理

歴史家が目の前にしている史料は、種々雑多な記録や資料や遺物の堆積からなりま  
す。それは歴史的事実そのものではなく、その残滓にすぎず、常に不完全で、何とで  
も解釈することができます。そのため、同じ一つの史料からどのような意味を取り出  
してくるかは、歴史家のもつ図式に左右されますから、歴史家のパースペクティヴに  
応じて、歴史は様々な顔を見せてくるのです。

有名なエッシャーの多義図形にも、天使が踊っているようにも見え、悪魔が踊って  
いるようにも見える「円の極限」と題する多義図形があります。同じ一つの図形です  
が、わたしたちの見方によって、悪魔に見えたり、天使に見えたりします。天使を見  
ているときには悪魔は消え、悪魔を見ているときには天使は消えます。一方が図にな  
ると、他方は地となり背景に退きます。歴史も、このエッシャーの多義図形のように、  
いわば悪魔と天使の重ね合わせのような状態にあります。それを、歴史家が、天使と  
観測すれば天使に見え、悪魔と観測すれば悪魔に見えるのです。歴史論争も、このこ  
とによって起きます。

量子力学が記述するミクロの世界でも、電子や光は、波としても粒子としても観測  
することができます。ミクロの世界はいわば波と粒子の重ね合わせの状態にあり、わ  
たしたちがそれをどのように観測するかによって、重ね合わせの状態は解消され、現  
象は一定の状態に収束します。波として見るか粒子として見るかは、観測者次第とい  
うこととなります。

ちょうどそれと同じように、歴史的事実も、歴史家の観測次第で、浮かび上がって  
きたり、闇のなかに消えていったりします。事実が、確固として最初から存在してい  
るのではなく、歴史家がある図式でもって観測したとき、その観測に応じて現われ出  
てくるものなのです。その意味では、歴史認識はどこまでも仮說的認識にとどまりま  
す。

十九世紀以来の科学的実証主義も仮說的認識の一つにすぎません。実証史学は、客  
観的な事実が観測者とは別に独立して存在すると確信する近代の科学的合理思想を前  
提しています。しかし、この合理思想でもって、常に非合理なものを含み矛盾に面し  
ている歴史に切り込んでいくと、その歴史像は、その合理思想によって単純化され、  
その叙述は無味乾燥なものになってしまいます。ここでも、歴史は、歴史家によって  
つくり変えられていることとなります。実際の歴史が、科学的実証史学が記述するよ

うな論証的で理屈ばったものであるかどうかは分かりません。

クーンが『科学革命の構造』で明らかにしましたように、近代の自然科学においてさえ、自然を見るパラダイムが転換されると、自然観の大きな革命が起こされ、自然自体もそれに応じて変革を受けます。例えば、プトレマイオスの天動説が正しいと思われていたときには、天体の運動はどれもこれも天動説で説明されていました。実際、天動説による惑星の軌道の説明は、微に入り細を穿って精密を極めていました。しかし、そこに、コペルニクスの地動説が出てくると、天体の運動すべてが簡単に地動説で説明され、世界観そのものが大きく変革されてしまいました<sup>4</sup>。天動説から地動説への転換は、天体の運動の解釈を変えたのです。歴史も、また、これと同じように、歴史家がつパラダイムによって、どのようにでも記述することができます。しかも、その歴史のパラダイム自身が歴史的に変革されていきます。

量子力学で記述されるミクロの世界では、観測という行為自体が、粒子の状態に影響を与えてしまうために、粒子の位置や運動量を同時に正確に測ることはできません。量子力学の不確定性原理です。そこでは、観測することが観測事実に影響を及ぼしますから、観測結果は、観測手段に対して相対的にしか現われてきません。観測者を抜きにして、現象は出現しないのです。現象の中には、必ず観測者が含まれます。観測する者と観測されるものとは、相関的にのみ存在します。

歴史学でも、研究対象そのものへの観測者の干渉はありますから、この点では、歴史学と現代物理学は相通じています。歴史も、また、自然と同じように、観測者があつる方法で観測したとき、それに応じて、確定した状態を示します。歴史も、認識者のパースペクティヴに応じて様々な顔を見せるのです。実際、過去の歴史も、観測手段によって、新しい様相をもって現われてきます。航空写真技術や放射性炭素分析、花粉分析や年輪年代法などの開発によって、歴史の新しい相が見えてきたのも、そのうちのひとつでしょう。ここでも、観測の手續きが観測されているものに影響を与えています。歴史も、自然同様、探究すればするほど、それに応じた多様な様相を示すのです。歴史家と歴史的事実は分かつてできません。歴史的事実は、歴史家のもつ図式次第で、見えてきたり見えなくなつたりするものなのです。

歴史においても、叙述されるものと叙述するものを分けることはできません。もともと、歴史的史料そのものの中に、すでに、史料によって語られる歴史的事実と、それを通して語る記述者とが、同時に重なり合つて含まれています。さらに、その史料を用いて語られる歴史叙述の中にも、叙述されるものと叙述するものが同時に重なり合つて含まれています。事実と記述は互いに重なり合つて、歴史をつくるのです。歴

史的事実は最初から確固として存在するのではなく、記述としての歴史によって復元されてはじめて出現します。

歴史的事実も記述次第なのです。歴史においても、完全に客観的な事実というものは存在しません。過去も、未来同様、決定不可能で不確定なのです。歴史家が記述する歴史的事実の中には、どうしても、歴史家の見方というものが入り込んできます。そのため、歴史家は、歴史的事実という磐石な地盤に立脚することができません。十九世紀の実証史学は、まず事実を確定し、その後、事実からおのずと浮かび出てくる時代像を引き出してこなければならぬという考えでした。しかし、その事実そのものが、それを記述する歴史家と相関的である以上、もはやこのような事実主義は成り立ちません。

#### 主観と客観は分離できない

鏡そのものを見ようとする、そこには必ず自分の顔が映ります。それと同じように、主観と客観は分かたることができません。例えば、エッシャーの多義図形「円の極限」の例で言えば、天使が踊っているように見たり、悪魔が踊っているように見たりするわたしたちの視点が、主観であり、天使や悪魔が折り重なっている影像が客観ということになります。天使や悪魔は、見方次第で現れたり現われなかったりするのですから、主観と客観はいつもつながっていると云わねばなりません。現象は主観と客観の相関するところに生じ、出来事は主観と客観の出会いのところに生じるのです。歴史的事実も、主客の一致点に立ち現われます。歴史研究も、主客非分離に基礎を置かねばなりません。近代の認識論は、主観と客観を独立させ、知る主体と知られる対象を截然と分け、知る主体が知られる対象に影響を与えることはないということを前提していました。しかし、物理学から歴史学まで、主客非分離に基礎を置かねばならないとすれば、もはや、このような近代の認識論は成り立ちません。存在と認識は深く結びついています。何らかの事柄が存在するということは、認識されて存在するということです。認識がなければ、当の存在も確定することができません。

近代史学の確立者ランケは、歴史家は公平無私な立場に立ち、史料の解釈に当たっては、わたしたちの主観を勝手に持ち込んでほならないと主張し、彼自身それを実践しました。確かに、ランケは、ランケ自身の主観的な立場を徹底的に括弧の中に入れて、高度な客観性に基づいて歴史を記述しようとした。しかし、実際にそれが客観的叙述であったかどうかは別問題です。できるだけ先入観を排し、過去の人間の思想や感情に即して客観的に史料を読み込むことは極めて大切なことで、歴史研究の第

一歩なのですが、それが完全にできるかどうかは分らないのです。

十九世紀の事実主義は、主観と客観がそれぞれ独立に存在すると考える主客分離主義に基づき、虚心に史料を読むなら、歴史家は客観的事実を正確に知ることができるという前提に立っていました。しかし、クローチエ以来、二十世紀の歴史思想が指摘し続けてきましたように、歴史学においても、主観と客観は分離することができません。歴史家の解釈から独立して、客観的に存在する歴史的事実は存在しないのです。歴史は、すべて、ある意味で、主観と客観の出会いにおいて生じる虚像にすぎないのです。

なるほど、史料から得られる単純な歴史的事実は存在するとしても、ただそれだけでは歴史になりません。事実と事実の間の連関が記述されなければ、歴史にはなりません。歴史家は、客観的で明白な過去を、わたしたちの目の前に示そうと努力します。しかし、その歴史的事実の連関の叙述まで客観的に叙述しうるかどうかは、疑問だと言わねばなりません。そこには、必ず歴史家自身の主観が入り込んできます。歴史には、完全に客観的なものはありません。

なにより、歴史的史料そのものが、その時代の史料作成者の主観による記録です。史料作成者は、自分にとって重要と思われたものを書き記しているのですから、ここに、すでに史料作成者の主観が入っています。それどころか、史料作成者には種々の制約があり、偏見も先入観もありますから、その史料が客観的な事実を伝えているかどうかは分かりません。歴史家は、歴史的事実を知るために、それについて語っている史料にその証言を求めますが、しかし、その証言自身が、証言者の視点から映し出された限りの事実であり、証言者の主観によって形作られているのです。

さらに、その史料に基づいて歴史を語る歴史家にも、別の偏見や先入観が働きます。歴史家も、史料作成者同様、自分が生きる歴史的現実の中に巻き込まれており、種々の利害や感情をもっています。そのような立場から歴史的事実も評価されるのですから、記録者がどんなに良心的・客観的であろうとしても、そこから記述される歴史は客観的ではありません。歴史家は、別の文脈で語られた歴史的事実を、また別の文脈に引き入れて解釈していきます。そこには、史料から知られる歴史的事実の絶えざる変形と加工があります。そのような変形や加工に、歴史家の主観が入ってきます。歴史は、過去の史料作成者と現代の歴史家との二重の主観性の交わるところで語られていくのです。

過去の歴史的事実を、現代の歴史家がある視点から眺め、それを記述するのですから、どうしても、それは現代の立場からの解釈になり、そこに現代特有の先入観も入

り込んできます。歴史家も、歴史家が所属する社会の一員であって、様々な立場があり、信念をもっています。そのため、歴史家が史料に基づいて実証的に歴史的事実を掘り起こしてやるにしても、その叙述には、意識するしないにかかわらず、歴史家の主観が働いてきます。ときには、特定の史観やイデオロギーに基づく歴史記述も可能になってきます。そこには、歴史家の自己正当化や、場合によっては、恨みつらみさえ言外に語られていることさえあります。そのような形で、歴史はしばしば歪曲され、捏造されます。歴史家も、自分の立場や地位、信念から離れて、完全に中立的な立場に立つことはできないのです。

たとえば、歴史家が、個人的な偏見を乗り越えて、歴史を客観的に記述するよう心掛けたとしても、なお、歴史家もつ仮説や視点の主観性は残るでしょう。歴史記述は、歴史家のもつ視点からなされるのですから、その主観的な性格は免れません。仮に、仮説なしに行なうとしても、それ自身が一つの仮説になります。十九世紀の客観主義的事実主義も、それ自身が一つの仮説であり、その仮説から、因果律を背景に合理的な過去像をつくってきたにすぎないとも言えます。歴史はただ解釈されてのみ存在するのですから、同一の歴史的事実でも、歴史家によって解釈は異なります。歴史はもともと出来事の叙述であり、ヒストリーであり、ストーリー（物語）です。最初から主観性を前提していることだとも言えます。歴史は事実そのもののうちにあるのではなく、むしろ、歴史家自身のうちにあります。

だから、よく言われますように、歴史は歴史家の数だけあるということになります。同じ時代の歴史を記述するにも、何を重視し何を無視するかは歴史家によって異なります。それによって、描かれる時代像も、歴史家によって異なってきます。さらに、良心的歴史家であればあるほど、歴史的事実の解釈に迷い、絶えず揺れ動いていますから、同じ一人の歴史家でも、解釈が異なってくる場合があります。また、同じ一人の歴史家でも、長い人生経験を通して視点が変わり、そのため、それに従って記述される歴史も変わることがよくあります。それどころか、時代的に、歴史は常に書き変えられていきます。以前重大視されていたことも、その後の時代には軽視されることもあります。時代とともに変わっていく問題意識によって、歴史記述も変化していくのです。特に、革命や動乱の前と後では、歴史記述は大きく変わり、天と地ほど違ってくるのです。歴史記述の主観性を、わたしたちは承認する以外にありません。

E・H・カーが『歴史とは何か』で言っていますように、歴史的事実は、歴史家がその事実と呼びかけたときにのみ、語りかけてくるものなのです。空の青さは、私と空の出会うところに生成してきます。それと同じように、歴史的事実も、主観と客観

の出会いとところに現われ出てきます。歴史記述においても、主観と客観は本来分離することができないのです。

#### 歴史学の方法を自然科学へ

主観と客観が分離できないのは、歴史学ばかりではありません。自然科学も、主客非分離に基づいています。自然科学でも、歴史学と同じく、観測するという行為と相関的に現象が立ち現われてきます。自然科学でも、歴史学でも、わたしたちが観測し行為するということが対象を変容させます。ここでは、観測するものと観測されるものの相関に基づく不確定性原理が成り立ちます。

科学者も、歴史家も、仮説から出発します。自然科学も、歴史学も、何をもってデータとし、歴史的事実とするかは、仮説に照らして見出されてきます。自然科学者が実験室で行なう測定も、自然科学者がある仮説のもとに収集してきたものであり、仮説なしには見えてこないものなのです。その点では、それは、歴史学者がある仮説のもとに史料を収集するのに似ています。そして、自然科学も、観測データや歴史的事実を仮説に基づいて再構成します。自然科学者は、ある仮説をもつて自然を尋問し、自然からいわば自白を引き出します。だから、自然現象は、誘導された自白のように、仮説に適合したしかたで現われます。自然科学者が実験に訴えて仮説を実証する過程も、単純なものではありません。科学者は、データの誤差を無視し、理想化を施し、仮説と実験との間の適合を自分自身で判断します。この点では、歴史学者も、同じことを行なっていることとなります。歴史家が歴史的事実をどのように見るか、歴史家の見方によって、歴史的事実はどのようにも現われてくるものなのです。

もちろん、科学者も、仮説がデータに合わないときは、仮説を修正します。しかし、科学者は、また、その修正された仮説によって事実を説明し、その仮説を実証していきます。そこには、仮説と事実の循環的過程があります。この点でも、科学者の方法は、歴史学者の方法と同じです。歴史家も、ある仮説に基づいて史料を解釈し、その解釈によって仮説を証明するという循環的過程を経て、歴史認識を確立します。そこには、歴史的事実による仮説の修正もあります。だから、科学者や歴史学者がつくり出す仮説は、別の視点をもった科学者や歴史学者によって変更され、反駁されることを免れません。しかし、このことは、自然科学にとっても、歴史学にとっても、新しい発見へ前進していくには必要なことです。こうして、自然科学も、歴史学も、ともに歴史的に生成発展していくこととなります。



自然科学も、必ずしも、すべてが一般的法則を打ち立てるのを目標としているわけではなく、哲学などと比較すれば、歴史学同様、特殊なもの・個別なものに注目しています。逆に、歴史学も、単に個別なもののみ終始しているわけではなく、そこから、時代精神とか人間性とか、一般的なものを出しようとしています。自然科学も、歴史学も、個別なものの中に普遍的なものを見出そうとしているのです。この点から言っても、自然科学と歴史学は共通しています。

自然科学が打ち立てる自然法則も決して絶対ではなく、それぞれの範囲内において、現象を単純化すれば成り立つという程度のもので、自然科学も、別の分野に移ったリ、複雑なものをそのままにつかもうとすれば、どんな法則もすべてに適用することはできなくなります。自然法則も仮説にすぎず、ある範囲内での自然の一つの傾向性を言い表わしたものにすぎません。自然科学においても、もはやニュートンの時代のように、普遍的法則を主張することはできないのです。

自然法則は未来の予測可能性を含意していましたが、自然科学も、気象学や地震学、進化論や宇宙論になれば、未来は正確には予測することができません。この点でも、自然科学は、より歴史学に近づいているのだと言わねばなりません。現に、自然科学は、二十世紀百年を通して劇的な変化を遂げました。相対性理論や量子力学、自己組織化理論やカオス理論などの登場によって、自然の振る舞いは相対的・確率的・不確定的なものになり、さらに非決定的・不可逆なものになってきました。絶対性や確実性、決定性や可逆性は、もはや自然科学においてさえ、全面的には適用できなくなってきたのです。この点でも、自然科学は、歴史学に接近してきたと言えます。

実験とか実証、さらに再現可能性は、必ずしも科学の絶対条件ではありません。古生物学や進化論、地質学や惑星科学、宇宙論などは、実験することもできません。再現することもできないし、何億年も先の結果を見届けることもできません。だから、たとえ未来を予測しても、検証することができません。これらの科学は、どれも自然や生命の歴史を問題にしていますが、歴史を問題にする科学は、現在残されている痕跡から過去の過程や構造を推測する以外にありません。それは、歴史学の方法に酷似しています。実際、地層の重なり方から地球の歴史を探る地質学や、化石の分布から生物進化の歴史を推測する古生物学は、歴史的事実を年代順に配列して時代の経過を理解しようとしている歴史家の仕事と、方法論的には同じです。さらに、相対性理論や量子力学を応用した今日の進化宇宙論などは、宇宙の壮大な歴史を問題にし、ニュートンのな機軸論的宇宙観を駆逐しました。

自然は自然史なのです。自然科学も、歴史的な自然を探究しなければなりません。宇

宙、物質、生命、どの分野も歴史性をもったものとして把握しなければなりません。宇宙も、物質も、生命も、無数の要素が複雑に相互作用し自己形成していく自己組織系です。それは推移し、進化し、履歴をもちます。自然科学の探究も、存在から生成へ向かわねばなりません。自然観がより歴史的になり、自然科学の方法がむしろ歴史学の方法に近づいているとすれば、自然科学の方法を歴史学に適用して歴史の法則性を見つけようとするのではなく、逆に、歴史学の方法を自然科学に適用していく必要があるでしょう。

さらに、科学はむしろ科学史であり、自然科学自身、歴史的に変化していくものです。自然科学も、必ずしも、データや学説が徐々に積み重なって進歩していくものではありません。歴史が革命や動乱を境にして大幅に書き変えられていくように、科学も、また、革命的にパラダイムが変わり、現象記述が革命的に変わっていきます。

このことを明らかにしたのは、クーンでした。クーンによれば、科学も、科学者共同体に共有されたパラダイムにいつも拘束されています。しかし、そのパラダイムで容易に解決されない様々な変則例を新パラダイムが見事に説明できると、ここに大きな科学のパラダイム転換、科学革命が起きます。革命後は、科学者たちはもっぱら新たなパラダイムによって様々な現象を説明し、そのパラダイムをますます確定的で正確なものにしていきます。こうして、そのパラダイムは科学者集団の間で公認され信仰されます。しかし、それも、また、次のパラダイム転換によって書き変えられていくことは免れません。科学も、歴史的に変革されていくものなのです。

### 3 過去・現在・未来の映し合い

#### 過去は現在と未来を映す

歴史家は現在の位置に立っていますから、過去の時代に対して、実際に過去に生きていた人々よりも、過去のことをよりよく見渡せる立場にあります。そのため、史料から知られる過去の歴史的事実を歴史家が解釈する場合でも、その解釈は、いきおい現在の結果からなされることが多いのです。だから、その解釈には現在の立場が反映します。古代史でも、中世史でも、近世史でも、その歴史を見ることの中には、いつも現在の要求があります。また、過去の事実を現在の立場から翻訳して解釈するのではなく、過去に起きたことの意味を十分に理解したことはなりません。歴史家は、現在の立場から過去の事実を組み立て直し、わたしたちの観点から理解できるように並べ替え、過去の事実の意味変換を行ないます。それは、過去においては気づくこと

のできなかった新しい連関性の発見につながります。歴史家は、現在の立場から過去の諸事実を合成し、過去をわたしたちの過去へとつくり変え、それに新しい意味を与えるのです。

とすると、E・H・カーの言いますように、歴史を研究する前に、それを書いた歴史家を研究しなければならないことになります。歴史的事実を思い浮かべる前に、その事実を誰が語っているのか、どのような立場にある歴史家が記述しているのかを見極めねばなりません。歴史家も、必ずしも不偏不党の立場で歴史を記述しているのではなく、一定の価値判断をもって歴史記述をしています。その価値判断は様々ですが、歴史記述も様々です。同じ一つのことでも、多くの歴史家によって異なったイメージで描かれます。歴史家が歴史的史料を集め整理する際でさえ、歴史家の社会的地位などが影響してきます。歴史家も、その出身や育ち、地位や経験など、無意識の背景をもってきます。それが、歴史家の見方を左右します。

さらに、歴史家も時代の流れの中にあり、その時代の時代思潮の影響を受けます。例えば、十九世紀、ヨーロッパが世界に進出し猛烈な勢いで発展していた時代には、西欧の歴史家もおおむね歴史の進歩を信じ、それに基づいて歴史を書いていました。ところが、二十世紀、第一次大戦後ヨーロッパの衰退が明らかになると、途端に、シュペングラールやトインビーに代表されるように、歴史観にも没落史観や循環史観が現われてきます。歴史観そのものが歴史に拘束されているのです。歴史家の歴史叙述が、それが書かれた現在の立場や状況を反映するのはそのことによります。

実際、どの歴史記述にも、そこには、現在の立場からの問題関心が潜んでいます。また、わたしたちが現在において生きているという立場から過去の人々の営みを積極的に意味付けて、はじめて、生き生きとした歴史叙述も可能になります。過去の事件の奥行きが見えてくるためにも、現在における体験がなければなりません。わたしたちは、現在の経験を過去に反映させ、過去を現在の時点へと手練り寄せながら、過去の歴史の中に積極的に参加します。クローチエの言うように、すべての歴史は現代史なのです。過去を理解するということは、現代の目を通して過去を見ることです。すべての歴史が現代に支えられており、過去と現代が同時代性をもつからこそ、わたしたちは、例えば戦国時代の人々に学ぶこともできるのです。

歴史家は、偉大な歴史家であればあるほど、過去を見ているとともに現代を見ている。歴史家は現代人です。歴史家は、まるでタイムマシンに乗って、現在の世界から過去の世界に向かうように歴史を見ますから、その歴史記述には、歴史家の現代での位置が反映します。

わたしたちは、現在の光に照らして過去を理解し、過去の光に照らして現在を理解するので。現在と過去との相互写映を通して、過去も現在もよく理解することができます。わたしたちは過去によって生み出されているとともに、過去もまたわたしたちによって生み出されています。歴史は歴史家をつくり、歴史家は歴史をつくり、人は過去によって規定されると同時に、過去を規定します。E・H・カーの言うように、歴史とは、歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きること知らない対話なのです。歴史は、現在と過去との絶えることのない映し合いなのです。

さらに、その現在は未来と深く関係しています。現在は、時々刻々未来に食い込んでいきます。わたしたちは、いつも、将来どのように生きていくべきか、また、住んでいる社会がどうあるべきかを考えながら生きています。わたしたちは、ただ歴史を眺めているのではなく、歴史を生きているのです。未来に向けてどのように行動するかというところから、歴史的反省も起きてきます。将来に向かっての決断のためにも、過去の経験は必要です。そのため、未来の行動にとって意味と価値をもつものが、過去の事実から選択されてくるのです。

例えば、古代・中世・近世という時代の三区分法も、遠くヨーロッパのルネサンスの頃に源泉をもち、未来への実践的関心と深いつながりがありました。中世から脱却し、未来に向けてどのように生きていくべきか、人々が行動に行き惑い、新しい生き方を模索する過程で、急に古代ギリシア人の生き方が蘇ってきました。ルネサンス時代の人文主義者たちは、その新しい生き方と知恵を古代ギリシアに求め、そこに自分たちの原点を求めたのです。そのため、古代と現代の間に挟まった中世が過度に暗黒化され、その分古代は過度に理想化されました。もちろん、時代の三区分法は実際の歴史を反映してはいませんが、それは、ルネサンス人にとって前へ進むには必要だったのです。この三区分法は、十八世紀の啓蒙主義の頃まで続き、それを引き継いだ現代も、なおこれを継承しています。歴史的危機の時代にこそ歴史は省みられ、死んでいた歴史は蘇り、過去の歴史は現在となって、未来が開かれます。歴史の時代区分も、そのような歴史のダイナミズムに基づいているのです。

#### 歴史は鏡である

歴史は、過去・現在・未来の映し合いです。過去は現在に流れ込み、現在は未来に流れ込みますが、逆に、未来は現在に反映し、現在は過去に反映します。過去から現在には限定され、現在から未来は限定されますが、逆に、また、未来から現在は規定さ

れ、現在から過去は規定されます。現在は、過去と未来の接点です。未来への関心は、現在において、過去への関心と接続されています。

しかも、現在はずぐ過去になり、未来はずぐ現在になります。川を下る舟のように、現在は未来に向かって動いていきます。そして、現在が刻々と動いていくにつれ、未来も過去も刻々と変わっていきます。ちょうど有視界飛行を行なっているパイロットのように、わたしたちは、未来に向かって突き進みながら、次々と新しい過去の風景をつくっていきます。未来へ進むにつれて、絶えず過去の歴史は更新されていきますが、その歴史の絶えざる更新は、現在の動きを反映しています。歴史家は、そういう現在に立っているのです。

前へ進むにしたがって、絶えず新しい視野が開けてきますから、それにつれて、過去に対する視点が変わります。前に進むということは、常に新しい問題にぶつかるということです。それに応じて、過去への問いかけも違ってきます。そして、その視点や問いかけの変化に応じて、過去はその様相を新しくします。歴史記述が時代によって二転三転するのはそのためです。未来に向かって進んでいくにしたがって、歴史は新しく生まれてくるのです。

さらに、未来へ進むにしたがって、過去は次第に遠い遠景になっていきます。近景から見たときの過去と遠景から見たときの過去は、また違ったしかたで描かれます。近景は拡大鏡的に、遠景は巨視的に、近景は虫の目で、遠景は鳥の目で描かれます。そのため、近景で大きな意味をもっていたことが、遠景では大して重要ではなくなり、近景で見えなかつたものが、遠景では大きな意味をもってきます。歴史は常に途上にあり、歴史叙述は目まぐるしく変わっていきます。歴史叙述そのものが、歴史を形成していくのです。

歴史は三面の鏡です。過去は現在を映し、現在は未来を映します。未来は現在を映し、現在は過去を映します。わたしたちが過去の歴史を模範として現在を生き、未来を開いていけるのも、歴史が鏡だからです。わたしたちが未来に向かって生き感うとき、つまり歴史の危機の時代には、かつての危機の時代が蘇ってきます。そして、わたしたちは、歴史の鏡に映して、現在と未来を認識します。と同時に、過去をも認識します。わたしたちは、人生の経験を積み重ねることによって、かつての人々が何を悩み、何に苦しみ、どのような知恵を編み出して生きていったかを深く理解することができるのです。

鏡に映してこそ自分の姿を見ることができるよう、歴史を学ぶことは自己を知ることなのです。過去を認識することは、現在の自己を認識することなのです。わたし

私たちは、過去の鏡に現在の自己を映し、過去の人々の中に自己自身の像を見ます。へ歴史は教師である」と言われることの深い意味が、そこにあります。歴史を深く知ることは、人生を生きるための深い知恵を与えます。現在と未来を知るには、過去に学ばねばなりません。

歴史認識は単なる主観でも客観でもなく、主観と客観が出会うところに成り立ちます。歴史家が史料を通して過去の事実と出会う瞬間、その直接経験のところに歴史認識は生成してきます。その認識には、歴史家の現在も過去の事実も同時に含まれます。現在と過去が一致するところに、歴史の認識は成立します。しかも、その現在と過去が出会う一致点は未来に向かって動き、動くにしたがって、過去も動きます。動く現在と動く過去の一致点のところに、歴史認識は成立します。歴史事実の一つの経験なのです。過去を想起するということは、現在の経験の中に過去を蘇らせることです。その想起の中には、過去も現在も未来も含まれています。現在は過去に働きかけ、過去は現在に働きかけ、両者とも、螺旋的に未来に向かっていきます。そして、絶えず歴史を形成していきます。歴史を認識しながら歴史を形成し、歴史を形成しながら歴史を認識していくのが、わたしたちなのです。

## 第五章 歴史の理解と記述

—歴史は解釈され物語られることによって動く—

## 1 解釈される歴史

### 理解とは何か

明智光秀が本能寺の変で織田信長に反旗を翻したのは、長年、信長にいじめられていた光秀の積もり積もった怨念からの行動だったと言われています。このような解釈は、昔から、本能寺の変が起きたことを理解するためのかなり説得力をもった解釈でした。教養豊かで宮中対策もよくした光秀と、野人にすぎず常に自分自身への絶対服従を求める独裁者・信長とは、所詮は相立たず、信長への光秀の復讐はいずれは起きる事件だったとも言えます。それが、丹波と近江を治めていた光秀からその領国を奪い、中国地方攻略を命ずるといふ信長の理不尽な仕打ちに至って、頂点に達した。光秀が亀岡から踵を返して大軍を率いて本能寺を目指したのは、そのことによると言われます。

江戸・文化文政期の歌舞伎作家、四世・鶴屋南北作の『時今也枯梗旗揚』<sup>（たけはいまきぎょうのぼたあげ）</sup>も、このような本能寺の変の個人的心理学的解釈をことさら強調し、芝居仕立てにしたものでした。それは、それまで封建時代にあるまじき主殺しの謀叛人とされていた光秀の行動に対する鮮やかな逆転解釈でもありました。

しかし、光秀が信長に反旗を翻したのは、本当にそういう個人的恨みだけからだったのでしょうか。わたしたちは、どのようにして昔の人の心の内部で起こったことを知ることができるのでしょうか。果たして、歴史的事件をそのような心理学的解釈だけで説明しうるのでしょうか。最近では、光秀の行動も、単に個人的恨みから起こしたものでなく、京都の公家衆、足利義昭、毛利、上杉らとも連繋し、確かな成算のもとに起こされたことだったと言われています。

なるほど、わたしたちは歴史的人物の行動の背後を探り、その元となった動機を理解しようとはしますが、その動機を確定することは困難です。どんなに偉大な人間でも、自分の行動の動機をはっきりと自覚しているかどうかは分かりません。また、歴史的人物の意図に直接近づくことも難しいのです。人の行動には建前と本音の違いもあり、欺瞞に満ちているからです。行為はなお謎に包まれています。

さらに、行為はしばしば意図しない結果を招きます。しかし、歴史家は行為の結果からその意図を解釈しますから、歴史家の解釈と実際の歴史的人物の意図とは一致するとは限りません。むしろ、意図の解釈は、歴史家の方からの再構成である場合が多



く、そこには、歴史家の主観が反映します。光秀を謀叛人とすることも、光秀の行動を復讐心から出たとすることも、光秀の行動が意図に反して失敗に帰したという結果から判断されているにすぎません。

解釈の究極の課題が、外なるものを通して内なるものを理解し、主体的に個性を理解することであったとしても、それは必ずしも内面を知ることの意味しません。人は個人の心理にまで立ち入ることはできず、個人的心理を知ることが歴史理解の出発点でもありません。むしろ、歴史的主体の個性を理解するには、それを可能にしている歴史的社会的条件を理解する必要があります。歴史上の偉大な個人の行動にしても、作品にしても、思想にしても、その時代と社会の産物でもあります。したがって、一つの行動や作品や思想がどういう社会的要求から生まれてきたか、その社会に対してどういう意味をもっていたかなどを理解して、はじめて、その歴史上の人物や出来事を深く理解したことになります。

人は誰でも、何らかの伝統に属しています。個人は、共同体の伝統の中で体験し、思惟し、行為していますから、歴史上の人物の個性には、彼らが生きた時代が反映します。だからこそ、歴史上の人物の個性も、それを越える社会や文化から理解しなければならぬのです。たとえ天才の個人的発想であっても、歴史的に形成されてきた文化を基礎にしています。それを理解してこそ、その歴史的主体には見えなかった時代の構造が見えてきます。そうして、はじめて、わたしたちは、歴史的主体を、彼が理解したよりもよりよく理解することができるのです。

しかし、同時に、その解釈者自身も、歴史的・社会的・文化的に、その時代に制約されてもいます。歴史的に条件づけられた歴史上の出来事を解釈する解釈者自身も、歴史的に条件づけられているのです。解釈者は、その時代を背景にした解釈者自身の関心から、歴史を構成します。歴史上の人物にも、その人物が知り得ない同時代の多種多様な出来事が関与していますから、解釈者は、それらを、自分が立っている立場から再構成して理解します。歴史上の人物以上に歴史上の人物を理解するには、そのような解釈者の立場からの理解が必要なのです。

だから、理解には主観性が伴います。解釈者は、解釈者自身の視野から自由ではありえません。現に、鶴屋南北の明智光秀解釈にも、解釈する側の尺度が反映しています。そこには、文化文政時代の封建論理の崩れという歴史的環境が反映しているのです。歴史的事実は何とでも解釈できる多義性をもちますから、歴史的事実の解釈は、解釈者の立つ歴史的状况に左右されます。さらに、その歴史解釈者の生きる時代も未来に向かって動いていきますから、歴史の解釈には終わりはありません。

としますと、十九世紀の伝統的な解釈学が目指したような客観的な歴史理解はできないということになります。実際、過去の歴史を理解しようとしているわたしたちは、絶えず理解できないものに面します。例えば、『古事記』や『日本書紀』に書かれている古代の歴史の伝承などは現代から遠く離れており、古代人と心情を共有していない現代人の感覚では理解できないものが多いのです。

しかし、このように時代の隔たりがあるからこそ、現在のわたしたちの立場から、これを意味あるしかたで理解し直す必要があります。理解不可能なものを理解するには、解釈者が立っている時代の枠の中にそれを取り込んで翻訳する必要があります。理解とは、このような意味変換作業なのです。自分の視野や図式の中に取り込み、新しく理解し直すことが真の理解です。確かに、古代社会にしても、未開社会にしても、それを理解するには、まず、わたしたち現代人の先入見や偏見を括弧の中に入れる必要がありますが、しかし、何もなしに、遠く隔たったものを理解することはできないのです。

理解は、解釈者が立っている歴史的環境の視野と、解釈対象が背景にもつ歴史的環境の視野が重なるところに成り立ちます。歴史的事実の理解とは、解釈する主体と解釈される客体との出会いです。理解が成り立つためには、デカルト<sup>4</sup>以来の主視と客視を分ける二分法を克服しなければなりません。

歴史事象と解釈は相関しています。歴史上の事実は、解釈なくして浮かび出てきません。歴史は、ある意味で、解釈のみの歴史とも言えます。記録がすでに解釈を含み、それをさらに解釈して歴史の物語はできているのですから、歴史家の解釈から独立した客観的歴史はありません。歴史は、同時代においても、後代においても、常に解釈され、その解釈自身が歴史的に変動していくものなのです。

#### 体験・表現・理解

過去から生い育ち、未来へと広がっていく生の過程の中にこそ、わたしたちの生のリアリティがあります。わたしたちは、この生を、生そのものから理解しなければなりません。

しかも、歴史的個人の行為や作品や思想は、体験の表現です。表現は生命の根源的な働きであり、意識によつて照らし出されない深みから出てきます。体験は一種の受苦であり、苦悩であり、感情です。それなくして、表現も創造もありません。そして、その表現には、個人の体験ばかりでなく、共同社会の体験も表現されています。歴史的な生の表現を介して歴史的な生を理解することこそ、歴史学の課題なのです。

しかし、すでに消え去った過去の人々の言行を理解するには、現在におけるわたしたちの体験がなければなりません。歴史的表現を理解するには、その理解を可能にする解读者自身の体験が不可欠なのです。理解もまた体験です。わたしたちは、体験することによって理解します。自己自身の体験を掘り下げることこそ、過去の出来事に命を与えます。しかも、その理解もまた、単に個人的ではなく、共同社会にその根を張っています。

体験の表現を体験から理解し、それを表現することが解釈です。そのようにしてこそ、著者以上に著者を理解するという解釈学の目標は達せられます。解釈学は歴史的生の理解の方法論として確立されてきましたが、歴史学も、そのような理解の学でなければなりません。そうでなければ、過去の人間の生き生きとしたあり方は記述されえません。

経験は思惟によって分析されるものではなく、ただ体験されます。人は、経験を通して理解します。経験の過程は自分を乗り越えていく過程であり、苦痛を伴います。しかし、そのことによって、経験は新しい経験へと開かれていきます。そして、新しい経験は新しい理解をもたらし、過去の人々の事績の深みをあらわにします。

わたしたちは、現在における経験を過去に投影することによって、過去を理解することができます。過去の人々の歴史的事績も、それがいかに偉大で労苦を伴ったものであるかが分かるには、現在のわたしたちの経験がなければなりません。個人においても、集団においても、経験を積むことによって、過去の見え方が変わってきます。私が成長し成熟するにしたがって、歴史上の偉大な人々の行為、作品、思想の深みもよく理解できるようになります。解读者の経験の深まりとともに、過去は幾重にもその深みを見せてきます。その層をなす理解は、自己の経験と成長を反映しています。また、逆に、歴史上の偉大な事績の深みがよく理解できるようになることによって、私自身も成長し成熟します。過去の理解によって、自己の経験もより深い理解に達します。人は経験によって学びます。そのとき、過去の事績に照らし出されることが必要なのです。

わたしたちが、自己自身の経験の深まりとともに、古典をより深く理解し、それとともに自己の経験をより深めることができるのも、そのことによりです。昔から、歴史に学ぶことの大切さが言われてきたのも、そのような現在と過去の経験の映し合いに基づいているのです。現在の私の経験が過去の先人の経験を照らし、過去の先人の経験が現在の私の経験を照らします。過去の経験と現在の経験が鏡のように映し合うことが理解なのです。

私自身の体験から、歴史的人物や事件がよりよく理解でき、逆に、歴史上の人物や事件をよく知って、私自身がよく理解できます。わたしたちは、歴史的事実に働きかけることによって、歴史的事実から働きかけられ、自己自身を認識します。自己理解は他者理解であり、他者理解は自己理解なのです。体験と体験が表現を通して共鳴することが理解ということであり、それを通して、生を生自身から理解することができます。過去と現在との映し映されの関係が歴史理解です。しかも、その理解は、そのような共鳴効果によって、体験それ自身より深い自覚をもたらします。

体験は表現において一段と明瞭化し、理解において、さらに一段と生の根底に深められます。表現において一歩前進した体験は、理解を通して、さらに一歩前進するのです。このような体験―表現―理解の螺旋運動において、歴史的生の内容は豊富になります。

#### 追体験は可能か

しかし、わたしたちは、過去の人々が体験した通りのことを追体験し、過去を知ることができのでしょうか。なるほど、古典的解釈学では、あらゆる先入見を排して著者の体験を追体験することによって、著者を著者以上に理解することが目指されました。しかし、過去の人々の体験を、わたしたちは、現在において、そのままその通りに体験することはできません。追体験は不可能です。わたしたちは、織田信長や明智光秀が体験したことを同じことを体験することはできないのです。現在と過去、自己と他者は同一ではないのですから、過去や他者の理解は、アステカの人身御供の理解と同じ程度に困難です。過去の理解には壁があります。とすれば、解釈される作品を生み出すに至った原作者の歴史的・心理的事実を追体験し、著者以上に著者を理解するという伝統的解釈学が目指した目標は、断念せざるをえません。

とはいえ、追体験は、著者と同一体験をすることではないとも言えます。過去の理解でも、追体験とは、過去そのものを体験することではなく、現在のわたしたちの体験との連関において過去の体験を取り込むことなのです。わたしたちは、信長や光秀の体験をそのまま体験することはできません。ただ、それらを自己自身の体験の中に組み入れ、彼らの体験をわたしたちのものにし、過去を現在に生かすこと、そのことが追体験にほかなりません。

追体験は一種の創造です。追体験は、文字通り後からの体験です。そこには、体験間の食い違いがあります。歴史家と歴史的事実、解釈者と対象の間には断層があります。しかし、それでもなお、体験同士の間には、解釈は生まれてきます。追体験

とは、私と過去の出会いであり、現在と過去の共鳴です。歴史的主体の体験と解釈者の体験とは同一であることはできないし、またその必要もありません。

わたしたちは、自己自身の体験から広がる地平の中に、過去の表現を取り込むことができます。そして、そのみずからの地平から解釈することが、理解です。ガダマーが言いますように、地平とは、ある地点から見えるすべてのものを包み込む視界のことです。固有の地平をもつことは理解への障害にはならず、逆に、それは、理解がはじめて可能になる視野です。そして、理解とは、この解釈者の地平と対象の地平の融合なのです。地平の融合によって、わたしたち自身の地平も拡大し豊かになります。地平の融合がなされれば、時代の隔たりも、克服されねばならないようなものではなくなります。地平の融合によって、現在から過去を理解するということは可能になります。その意味で、地平は本質的に開かれています。閉じた地平はありません。地平は移動し、視界の拡大をもたらします。わたしたちは、自己自身の体験そのものの地平を拡大することによって、過去を理解することができるのです<sup>1</sup>。

だから、歴史的行為の意味は、それ自身によってではなく、その行為が置かれる解釈者の地平によって規定されます。行為の意味は、行為主体の意図を越えて、それが置かれる場や連関によって規定されます。意味は関係であり、現在の側にも、過去の側にも還元することはできません。歴史的行動や社会的実践、芸術・思想の業績の意味、歴史的事実の意味は最初からあるのではなく、歴史家と歴史的事実、現在と過去の関係によって生じます。だから、ある行動や出来事の歴史の意味は、行為者の意図をいつも越えます。歴史の意味は、歴史的事件そのものから起きてくるものではなく、その出来事の後に形成される状況から語り出されるのです。どのような視点から問題の出来事を見るかによって、出来事の歴史の意味は決まってきます。そこにまた、解釈という仕事があります。意味は、理解と解釈という作業を通して生成してくるのです。そのため、歴史的視点の変化に応じて、出来事の意味は変化します。行為の意味は関係によって多種多様に受け取られ、絶えず変換されていきます。だからこそ、明智光秀の行動も、その時代その時代の文脈のもとに置かれて、その意味評価は目まぐるしく変わってきたのです。意味評価自身が歴史的なのです。歴史家は、その歴史的事実の意味変換を行ないます。

#### 解釈学的循環

過去の歴史に目を向け、それを眺めるとき、わたしたちの前には、複雑な要因が絡んだ無数の出来事が果てしなく広がっているのが見えます。それを報告する資料も、

無尽蔵に横たわっています。そこから、わたしたちは、どのようにして歴史の統一像を引き出していくのでしょうか。どのようにして歴史を記述し、歴史の真実を把握するのでしょうか。そして、歴史の全体像をどのようにして形成するのでしょうか。

そのような統一ある歴史認識に至るには、ある先行理解がなければならないでしょう。ハイデッガーが言いますように、認識や理解には先行構造があります。わたしたちは、理解すべき対象を、あらかじめある文脈の中に置き、それにある視点からあらかじめ近づき、それを、あるしかたにおいてあらかじめ把握します。そのためには、先行判断や先行理解が必要なのです。解釈が成り立つには、その前にすでに理解の働きがなければならず、それを前提にして解釈は可能になります。そして、その先行判断は、解釈者自身の状況に依存します。その意味では、先入見なくして認識はありえません。わたしたちは、先入見に照らして事柄をまえてもって理解するとともに、その先入見の妥当性を吟味しながら、それを確認したり修正したりします。だから、先行判断は、それ自身、経験を通して変化していきます。それとともに、解釈も歴史的に変化していきます。

全体の理解は先行理解から始まります。先行理解によってまえてもって全体が把握され、そのことによって部分の意味も理解されます。歴史が叙述されるためには、何らかの全体がまえてもって与えられていなければなりません。無数の歴史的出来事のうち、何が重大な意味のある出来事かを判断し選択するのも、全体視からなされます。全体視に導かれなければ、個々の出来事を評価することができません。

個々の出来事は、全体と結び付けられ、全体に対する関係において考察される時、はじめて理解されます。歴史的認識は、出来事の意味の認識です。それぞれの特殊な出来事は、全体の部分として、全体に対する内面的な関係が明らかにされることによって、認識されます。文書や碑文、歴史的行為などの意味も、歴史家によって、全体から解釈されてこそ意味をもちます。部分の意味を確定するには、全体の意味連関がなければなりません。理解は全体把握にかかわっています。

しかし、また、その全体は部分から組み立てられます。その部分が統合されることによって、全体の解釈も成り立ちます。個々の歴史的事実の間に共通する一般的な意味を見い出す努力がなされなければ、全体は分かりません。よく言われるように、部分を知るためには、全体が分かっているなければならぬし、全体を知るためには、部分が分かっているなければなりません。

いわゆる「解釈学的循環」は、この全体から部分へ、部分から全体へと進む螺旋運動を言います。全体の中に部分があることによって、全体から部分を記述することが可

能になり、部分の中に全体があることによって、部分から全体を記述することが可能になります。全体は部分から理解され、部分は全体から理解されます。歴史認識には、このような循環が潜んでいます。歴史認識は、そのような解釈学的循環を積極的に受容し、実践していかねばなりません。しかも、この解釈学的循環は、どこで始まりどこで終わるかを規定することができません。解釈学的循環は終わりのない循環です。歴史が絶えず書き直されていくのは、そのことによりです。

#### 歴史の中の解釈

歴史は、無数の出来事の相互作用を通して、過去から現在、現在から未来へと自己自身を形成する動的な系です。しかも、その中で歴史を構成する主体は、どれも内部解釈者です。歴史を解釈する主体が、解釈される歴史の中で解釈し、歴史を構成します。人間は、歴史内解釈者として歴史を理解するとともに、そのことによって歴史をつくっていききます。

歴史学もそれ自身歴史の中の出来事であり、歴史の内部に息づき、歴史をつくっています。だから、わたしたちの歴史解釈によって、歴史そのものが動きます。現に、過去は悲惨だったという解釈は、未来への行動を引き起こします。歴史解釈者は歴史の傍観者ではなく、歴史の中で歴史を解釈することによって、歴史に参画しています。解釈者は、解釈によって行為しているのです。歴史学は、いわば歴史自身の自己観察なのです。

歴史によって包まれるものが歴史を包み、歴史を包むものが歴史に包まれるのです。全体の中に部分があるとともに、部分の中に全体があります。全体を映す部分の解釈によって、全体は創造されるとともに、その全体の変化とともに、部分はまた違ったしかたで解釈されていきます。ここでは、歴史が歴史記述を限定するとともに、歴史記述が歴史を限定します。

確かに、解釈するものと解釈されるもの、歴史解釈者と歴史そのもの間には、抜きがたい差異があります。歴史とその解釈者、表現されるものと表現の間にはズレがあり、それが解釈のズレを生み出します。人は、およそ、理解するとき別様に理解します。理解には誤解が伴います。しかし、その理解のズレから変化が起きますのです。

こうして、歴史解釈は歴史過程のうちで絶えず変動し、解釈そのものが歴史を形成します。歴史は、歴史の変化とともに書き変えられ、書き変えられるとともに、歴史そのものが変わっていきます。歴史は、未来に向かってても、過去に向かってても、つくられていくのです。わたしたちが新しいものを経験すると、解釈自身が変容するばか

りでなく、解釈される事実も変容します。解釈なくして歴史はありません。歴史は解釈の王国なのです。

## 2 物語られる歴史

### 歴史記述と文脈

本能寺の変での明智光秀の行為も、厳しい封建倫理の文脈に置かれるか、それが崩れ出した時代の文脈に置かれるか、合理主義的な時代の文脈に置かれるかによって、評価や解釈はまるで違ってきます。すでに本能寺の変を伝える史料そのものが、ある文脈のもとで書かれています。同時代であっても、置かれる文脈の違いによって、行為の評価は違って現われます。わたしたちは、ある文脈で語られた歴史を、また別の文脈に移し替えて語っています。文脈が変わると、過去の見えは変わり、意味も変化します。史料から得られた歴史的事実は、ある一定の文脈の中に置かれて解釈されるとき意味をもち、歴史は一つのまとまった形をなします。時代とともに変わっていく問題意識とともに、過去の事実の意味も変わり、歴史は常に更新されていきます。

時代区分も一つの文脈です。実際の歴史に切れ目があるわけではないのですが、その時代区分のどこに位置づけるかによって、歴史的事実の意味も変わります。同じジャンテの『神曲』を理解するにも、ヨーロッパの十四世紀初めを中世の終わりとして理解するか、近世の始まりとして理解するかで、随分と意味は変わってきます。しかも、その時代区分も、歴史とともに新しくなります。

現在と過去の間には、通訳不可能な断絶があります。歴史家は、この理解することの困難な過去の出来事を、現在の言語空間に置き換える役割を果たしています。歴史叙述は、時代間の意味理解であり、そこでは、別のコンテキストへの置き換えという作業がなされていることになります。歴史家は、現在と過去の間の通訳者なのです。だから、そこには、歴史家が立つ現在の意識的・無意識的文脈が働いています。歴史家は、過去の事実を現在の文脈に移し替えて、その意味を解釈します。そのため、過去の像は、現在の文脈から別様に描かれることになります。

ポストモダンの思想家たちは、特に、この文脈の違いによる意味の差異化に注目しました。事実は言語を通して意味を与えられていますが、事実と言語の間には食い違いがあります。言語は実体を表わしません。むしろ、事実は、言葉によって言い変えられていきます。また、言葉そのものも、その意味するところを絶え間なく変化させていきます。同じ言葉を使っている、それが置かれている時代の文脈によって、そ



の意味は違っています。だから、文書の字面のみを読んでいても分かりません。文脈を理解しなければなりません。歴史叙述においても、物語られた歴史は過去の事実に対応しません。物語と事実の間にはズレがあります。そこには、読み違えや解釈替え、再構成や脱構築があります。したがって、実証主義的な歴史学が信仰していた過去についての客観的認識は不可能です。テキストは書き手の意図通りに読まれることとはなく、どのようなテキストも、異なる脈絡の中に置かれることによって、違ったしかたで理解されていくのです。

一つの過去の事実は、歴史が前進するにしたがって、多くの文脈の中に引き入れられて判断されていきますから、その意味は一義的には決定されず、絶え間なく変化していきます。歴史が未来に向かって進んでいくに従い、過去に対する歴史的判断も変化していきます。特に歴史記述は、大概の場合、その結果から判断されることが多く、その結果にも、近い結果と遠い結果がありますから、歴史的行為の評価は時代の変化とともに変転していきます。

例えば、一八三七年、天保の飢饉に対する大坂町奉行の無策と豪商の奸智を糾弾して起こされた大塩平八郎の乱も、当座の結果だけから見れば大失敗でした。事実、当時は、その行動の反社会性によって、氣遣い沙汰とも判断されたのです。ところが、もう少し後の結果から見れば、それは、倒幕から明治新政府樹立に至る新しい時代の先駆けであったとも評価することができます。当座の結果としては失敗だったものでも、時代を隔てて見れば、後の時代にとって大変な意味をもっていたりするのです。それに応じて、行為の成功不成功の評価も変わっていきます。

社会の変動は、いつもその社会の価値体系を揺るがし、それにしたがって、歴史評価も二転三転します。現代史でも、例えば東欧の歴史は、ナチス・ドイツに支配されたかと思うと、スターリン・ソ連に支配され、さらに、ソ連の軛から解放されたかと思うと、今度はヨーロッパ連合に加わらねばならないというように、右往左往してきました。その度ごとに、歴史記述や歴史事実の評価も二転三転してきたのです。

歴史的言動や行為は、置かれる文脈や時代の変化によって、その意味や価値が時に正反対のものに変わります。なかでも、戦前と戦後、革命以前と革命以後など、大きな歴史変動の後には、文脈が大幅に変更されるために、事実の評価も逆転することが多いのです。古代ギリシアのペロポネソス戦争をつぶさに記述したトゥキディデスも、『歴史』の中で、

「無思慮な暴勇が、愛宕的な勇氣と呼ばれるようになり、これに対して、先を見通して踏うあみことは臆病者のかくれみの、と思われた。沈着とは卑怯者の口実、万

事を解するとは万事につけて無為無策に他ならず、逆にきまぐれな知謀こそ男らしさを増すものとされ、安全を期して策をめぐらすといえば、これは耳ざわりのよい断り文句だと思われた」

と言い、革命や内乱の際には、言葉の意味が大きく変動してしまうといった意味のことを語っています。知覚心理学でも、同じ長さの線が置かれる場によって短く見えたり長く見えたりすることがあるように、歴史的判断にも、文脈の違いによる錯覚というものがありません。その意味では、歴史的判断はいつでも誤りうる可能性があるあることとなります。

### 善悪の逆転

天使が踊っているようにも悪魔が踊っているようにも見えるエッシャーの多義図形のように、歴史的事象はいわば善悪の重ね合わせのような状態にあります。そのため、歴史の変動とともに、一つの歴史的行為も善にも悪にもなりません。歴史評価で、善悪の判断がまったく逆になることがあるのは、そのことによります。

例えば、江戸時代、十代將軍・家治の老中、田沼意次は、当時発展しつつあったわが国の商業資本を積極的に利用して、幕府の財政を再建しようと考えました。そのために、特権的な同業者組織（座）の新設、商工業者の同業組合（株仲間）の公認、冥加金や運上金の徴収、新田開発、長崎貿易の振興など、積極財政を講じました。それに対して、次の老中、松平定信は、同じ財政再建を、農民の帰村、食糧備蓄、倭約令や棄損令（さくせんれい）の施行など、緊縮財政によって行なおうとしました。寛政の改革です。そのため、積極財政家の田沼意次は、松平定信によって、汚職政治家として葬り去られてしまいました。歴史的にも、寛政の改革の方が評価され、田沼意次は悪く言われてきました。

しかし、時代も変わり、この田沼財政と松平財政を、二十一世紀初頭の世界同時不況下の文脈に置いてみると、逆に、田沼財政の方が斬新・積極的で、デフレ克服のための素晴らしい内需振興策だったこととなります。それに対して、松平定信の緊縮財政は、デフレと不況を加速する最も劣悪な政策だったこととなります。実際、寛政の改革では、当時成長しつつあった多くの商人がその政策のために没落し、すでに進展しつつあった商業資本が大きく毀損されました。同じ一つの歴史的事業も、置かれる文脈の違いによって、善ともなり悪ともなりうるのです。

そのように考えるなら、日本の歴史でも、蘇我入鹿や平清盛など、マイナスに評価されている人物も、その悪評は後の中臣鎌足や源氏から貼られたレッテルにすぎず、

実際には、両者とも、海外の文物を受け入れ、国家を豊かにした大人物であったことに気づきません。変転する歴史とともに、意味と価値の争奪戦は延々と続くのだと言わねばなりません。

としますと、現在の立場から、過去の歴史に対して、軽々しく善悪、幸不幸の判断を下すことは厳に慎まねばならないでしょう。善悪史観は、子供や民衆、あるいは、政治的な煽動家やそれに踊らされた大衆の好む歴史観です。むしろ、善悪の判断を保留することによって、歴史と人間に対する深い洞察をするのが、大人や紳士の心掛けるべきことだと言えます。歴史の風雪に耐えてきた古典は、そういう人生と世界についての深い洞察を含んでいるからこそ、歴史の変転を乗り越えて末永く生きてきたのです。マルク・ブロックが、『歴史の弁明』の中で、

「ロベスピエール派にも反ロベスピエール派にも勘弁願いたい、お願いだからごく単純に、ロベスピエールがどのような人だったかを言ってほしい」<sup>4</sup>

と言っているのも、そういう善悪史観にうんざりしての発言だったのです。<sup>4</sup>  
しかし、それにもかかわらず、歴史記述は、往々にして、現在からの単純な歴史評価がなされることが多いと言わねばなりません。一つの時代は、その前の時代に対して、しばしば道徳的判断を押しつけがらです。道徳は、他人を非難し自己を弁護するための道具として使われるものですが、歴史的判断でも、現在を擁護し過去を非難するために、それは使われます。

歴史記述には、多かれ少なかれ、イデオロギー性が隠されています。それが一定の宗教的立場に立つものであるにしても、道徳上の教訓の類であるにしても、権威の維持や統治の正当化のためであるにしても、過去はしばしば自分たちの都合のよいように利用されていきます。ここでは、過去の事実の潤色や脚色、曲解や捏造が平気なされます。

なかでもよく使われるのが、意識的・無意識的な隠蔽や誇張です。望遠鏡で月を拡大して見ると、月のゴツゴツした表面が見えてくる分、視野は狭くなり、奥行きは失われます。それと同じように、歴史記述でも、週刊誌の記事同様、何かある特殊な事実を拡大鏡的に記述すると、それが事実を伝えたものであったとしても、そこには、視野の狭窄からくる誇張が入り込み、他の部分が隠されてしまいます。それによって、歴史的出来事の全体の印象は大きく変わってしまいます。

#### 物語としての歴史

たとえば、そのようなイデオロギー性をもった歴史記述でなくても、歴史記述には物

語性があります。出来事が年代順に羅列された年表や年代記だけでは、出来事と出来事との結びつきも分からず、完結性もありません。そこには筋というものはありませんから、出来事の意味も分かりません。ダントやヘイドン・ホワイトなどポストモダンの思想家たちが主張しましたように、歴史は出来事の叙述であり、物語です。歴史叙述には物語化が伴います。歴史家は、偶然と混沌に満ちた歴史的事象から事実を選択し、時間的順序に従ってつなぎ合わせ、因果的説明や動機的説明を加え、事件の成り行きに一貫性を与えます。そのように、ある一つの歴史を秩序立った物語に仕立てるには、ストーリーの構成とプロット（筋立て）がなければなりません。

現実の事件は悲劇的でも喜劇的でもありません。または、悲劇的でも喜劇的でもありません。それを、悲劇仕立てにするか、喜劇仕立てにするか、風刺や茶番に仕立てるか、どのようでも物語化できるのが歴史です。そして、それを「開始」と「持続」と「終焉」という筋にしたがって記述すれば、歴史物語になります。もしも、始まりも終わりもなければ、物語はできないでしょう。筋があつてはじめて、出来事は統合された全体の一部をなし、意味を獲得します。しかし、事件の始まりや終わりをどこに置くかは、歴史家が判断します。そのため、歴史家の判断次第で、事件の意味も大きく異なってきます。歴史の渦中にいる者は、事件がどこで始まりどこで終わるか分かっていないのですから、歴史的出来事の意味を決定するのは、始まりと終わりを設定する歴史家だということになります。

例えば、フランス革命の終焉を、ナポレオンの登場の直前に見るか、ナポレオンの登場に見るか、ナポレオンの追放までを含むかで、その意味はまったく変わってしまいます。フランス革命の終焉をナポレオンの登場の直前に見るなら、それは、トクヴィルやバークが見たように、古き良き秩序の単なる破壊の物語にすぎなかったということにもなります。もしも、それをナポレオンの登場とその事績までを含むとすれば、フランス革命は、近代の国民国家形成という創造に向けての旧秩序の解体作業だったという物語になります。もしも、フランス革命の終焉を、ナポレオン追放後のウィーン体制成立までを含むとすれば、それは、フランス革命によって推進された自由主義や国民主義運動の挫折の物語となります。

歴史記述は料理に似ています。料理でも、生の素材をどのように料理するかによって、フランス料理にも日本料理にもできるように、歴史記述でも、歴史家が歴史的事実をどう処理するかによって、どのような物語にもなりうるのです。素材をどう料理するかは、歴史家に任されています。歴史そのものは偶然に満ちており、まるで、筋書きを無視して主人公が突然死んでしまうようなアンチロマンの小説のようです。

それを、ある筋立てのもとに一つのロマンに仕立てるのは、歴史家なのです。歴史家は事実を加工し、変形し、作り変えて、物語にします。しかも、史料そのものがすでに物語られていますから、史料に基づいて物語られる歴史は、二重の物語によって構成されていることになります。こうして、物語としての歴史は、歴史的事実とは異なるものとなります。しかし、そういう物語がなければ、出来事に意味を与えることもできず、歴史を認識することもできません。

その意味では、歴史を書くには構想力が必要です。構想力がなかったら、歴史は構成もされず、読むことも、理解することもできないでしょう。構想力こそ、歴史記述に一貫性を与えます。しかし、この歴史的構想力は経験に先んじてあるものではなく、歴史家がその時代で経験している体験に根差すものです。

さらに、物語には、それが通用する場所、市場がなければなりません。歴史は誰かにとつてあり、それを読み聞く者をもっています。古代や中世では宗教的な祭りの場があり、そこで、聴衆の希望に応えた物語が口承伝達されました。そのため、物語には、それを聞く者やその時代の願望が入り込んできます。歴史的英雄像なども、民衆の願望に応じて創造されました。それが歴史の実像を伝えているかどうかは別として、いかにもありそうなこと、望ましいことであれば、真実になりました。歴史物語は、特定の社会的条件のもと、その要請に応じて創作されていくのです。古代の神話も、すでに、そういう物語としての歴史を伝えています。神話の背景には、古代の人々が思い描いた壮大な世界観が語られているのです。

古来、歴史家は、運命に支配される人間や天命に背いたがゆえに滅ぶ王朝などを描いてきました。そこには、倫理的規範に基づく構想があり、物語がありました。なるほど、そのような倫理的教訓的歴史は、近代の実証主義的な歴史記述によって払拭されました。しかし、それでもなお、現代の歴史記述においてさえ、その背後には物語があります。現代でも、その文脈の中に、政治的な偏りやイデオロギーを忍び込ませた歴史さえ物語られているのです。

単なる事実の報告だけでは、歴史になりません。物語なくして、歴史はありません。物語は幾様にも語られ、物語の数だけ歴史があります。歴史記述は物語としてのみ存在し、相対的なものです。歴史は過去と同じものではありません。ポストモダンの一般的な思潮は、このように、過去は物語によって語られる不確かなものであると主張してきました。そして、実証的な研究によって歴史事実を探究することができるという前提に立っていた近代歴史学の地盤を崩し、歴史的事実への疑問を表明してきました。

人間は物語る動物です。人間は語る存在であり、語ることによって理解する存在で

す。人間は、個人にしても、共同体にしても、自己自身を理解するためには、その歴史を語らねばなりません。人間は、語り継ぐことによって過去、現在、未来をつなぎます。過去、現在、未来の連続性がなければ、人は生きていくことができません。

しかし、語りには、虚偽がいつも忍び込んできます。言葉は事を伝えず、言葉には虚偽があります。そのため、物語としての歴史は、いつも誤って伝えられます。語ることは、必ずしも事をあらわにし、覆いを取ることを意味しません。語ることは、同時に覆い隠し、隠蔽します。だから、歴史は語られるとともに、騙られます。

歴史は、歴史的事実によって構成された一種の芸術なのです。ちょうど、画家が様々な素材を用いて独自の絵を描くように、歴史家も、歴史的事実を伝える史料を用いて、歴史という物語をつくります。歴史叙述は、過去の歴史的事実を一つの物語へと組み立てていく一種の創作なのです。だからこそ、そこには、芸術の創作同様、構想力がなければなりません。

その点から言えば、自然科学も一種の芸術だとも言えます。自然科学も、仮説というシナリオによって語られた自然の物語なのです。なるほど、自然科学は、可能な限り広い範囲に及ぶ合理的な意見の一致を得ており、普遍的なものだと信じられています。しかし、科学も、歴史的文化的にみれば相対的なものです。科学も、仮説と検証を繰り返しながら、次々と新しい仮説を立てていきます。科学も歴史的なものです。自然科学は自然についての、歴史学は歴史についての理解の学であり、それらはどちらも芸術に近いのです。

#### 筋立てとしての歴史観

歴史は物語です。歴史家は、多くの歴史的事実を取捨選択しながら、それらを連関付けて、一つのまとまった物語をつくります。しかし、それらを一つの物語にまとめあげるには、歴史観がなければなりません。歴史観がなければ、歴史は書けません。たとえ事実のみに基づいて歴史を書くにしても、それをどう物語るか、そのシナリオを書くには、筋書きがなければなりません。その筋書きを提供するのが歴史観であり、その歴史観を形成するのが構想力です。それが明確に自覚されたものでなくても、歴史家には、多くの場合、歴史観は無意識の前提となっています。

古代や中世の歴史も、そのほとんどが、哲学的、政治的、神学的物語でした。そこでは、奢れる者は神の妬みを買って滅び、放漫に流れ民衆を苦しめた王は天命の改まりとともに誅伐されるものとして描かれました。事実がそうであったかとはともかく、それは一つの物語だったのです。そこには、歴史への道徳的判断があり、歴史から教

訓を引き出すための倫理的な意図がありました。

西洋の歴史観の原型をなすキリスト教の終末史観も、そのような物語の一つでした。それは、人類の歴史に、神による「世界創造」という「初め」と、「最後の審判」という「終わり」を設け、人類の歴史は、天地創造から墮罪へ、墮罪から救済へ向かう直線的な過程と考えました。地上の国の歴史は罪ある歴史であり、破滅を免れませんが、それはまた、最後の審判を経て、神の国を回復する過程でもあります。人類の歴史は、神の国の回復という究極目的に向かって進む過程だということです。それは一つの宗教的物語なのですが、少なくとも、西洋の古代末期から中世にかけては、この物語がなければ年代記さえ書けなかったのです。

西洋近代の啓蒙主義の進歩史観も、歴史を人間的理性の開化の過程と見る一つの物語でした。人間の歴史は、野蛮な状態から文明化された状態へ、そして理性の時代へと進歩してきたし、進歩しなければならぬと、進歩史観は考えました。それは、人間が完全な善に到達した状態を未来に設定し、そこから現在と過去を解釈します。現在の立脚点は未来への希望に向かう過程であり、過去は現在の到達点に至るための諸段階であり、未来や現在よりも道徳的に劣った段階とみなされました。進歩史観は、過去の歴史を、進歩の尺度に合わせて裁いたのです。

啓蒙主義の進歩史観は目的論的歴史観です。目的論的歴史観は、人間の知性や倫理性の完成という究極目的に向かって進歩するのが歴史だとします。そのため、進歩史観は、価値の極度に低い状態としての始元を歴史の初めに置き、価値の最高に実現された状態を歴史の終わりに置き、その間に価値的な進歩を想定します。歴史に未開状態という始元と理性王国という究極目的を設定するこの啓蒙主義の進歩史観は、確かに、レーヴィットの言うように、キリスト教の終末論的歴史観の世俗化でした。

ヘーゲルの歴史哲学も、この十九世紀の発展史観を代表しています。ヘーゲルによれば、歴史は世界精神の現実化の過程であり、自由の意識の発展の過程です。なるほど、世界史は、個人にしても、民族にしても、その休まない変化と交替によって成り立っています。しかし、それらは、世界精神が歴史を通して自己を実現する手段です。歴史を切り開いていく偉大な個人も、彼らはただ自己の野心に燃えて動くにすぎないとしても、世界精神は、それを手段として、自由な精神の実現に向かって自己を展開します。このヘーゲルの精神的発展史観も、神の摂理の代わりに理性あるいは世界精神を置いたキリスト教の終末史観の変形にすぎませんでした。

マルクスの唯物史観も、一つの筋書きでした。マルクスは、歴史を動かす原動力として生産力を考え、この生産力と生産関係の間に起こってくる矛盾を歴史発展の原動

力と考えました。そして、このような歴史は、エンゲルスの修正も加えれば、原始共産制、アジアの専制、古代奴隸制、中世封建制、近代資本制、共産制の六段階を経て発展し、究極目的に至り着くとしました。唯物史観も、歴史における必然的な発展法則を説いたのです。しかも、この発展を担うものは階級闘争であり、現代の資本主義社会においては、ブルジョワジー（資本家）の支配に対するプロレタリアート（労働者）の闘争がブルジョワ社会の終焉をもたらすとしました。そして、このプロレタリア革命によって、一切の支配から解放された階級のない社会が実現すると予言したのです。マルクスの唯物史観も歴史の究極目的を設定したのです。

これは、よく言われますように、ユダヤ・キリスト教の終末史観を継ぐ一種の疑似宗教です。ここでは、歴史の推進力として、神の摂理の代わりに生産力が置かれ、信仰者と無神論者の対立の代わりに階級闘争が置かれ、最後の審判の代わりにプロレタリア革命が置かれています。プロレタリアートは、いわば「神に選ばれた民」だということになります。歴史の歩みを、その始元から終末へ向かって進む直線的な進行過程とみて、歴史に終わりを設定する点でも、両者は共通しています。

それは、どんなに堅固な理論で武装されていても、傲慢者は神の憤りを買って滅亡し、民衆を苦しめた支配者は天命によって放伐されるという古典的な歴史物語と、それほど変わりはありません。古典的な歴史物語では、善は勝利し悪は滅ぶとされ、善によって勃興し悪によって没落する王朝が描かれました。しかし、マルクスの唯物史観も、ブルジョワジーを悪人とし、プロレタリアートを善人とし、その対立闘争の末プロレタリアートが勝利を治めるという一種の勧善懲悪史観です。単純化してみれば、これが、この歴史物語のプロットだったと言えるでしょう。

マルクスが歴史に決定論的法則を設けたのも、その背後に、歴史に対して道徳的判断を下し、これを政治的に強化する意図があったからでしょう。それは、善を称賛し悪を罰し、歴史から教訓を引き出すとする修辭学的歴史物語であり、プロレタリアートへの賛美とブルジョワジーへの憎悪を表明する愛と憎の絡まった党派的歴史物語でした。そこには、一定のイデオロギーを鼓吹し、自己を被害者の立場に置いて正当化する深層心理が働いていました。唯物史観が歴史の流れの中に決定論的法則を設定したのも、歴史には動かすことのできない摂理があるとしたキリスト教の摂理史観に類似していますし、未来に設定された共産社会の実現という究極目的は、キリスト教の千年王国説の世俗化にすぎませんでした。

しかし、歴史観は歴史を包むとともに、歴史に包まれます。歴史観は、また歴史の産物であり、それ自身歴史に支配されています。そのため、しばしば、歴史観は歴史



によって破られ、復讐を受けます。実際の二十世紀の歴史は、マルクスの予言に反して、後進国で共産革命が起きたり、共産主義が一国社会主義になっていったり、市場主義を取り入れて資本主義化していったりしました。そして、最後に、その歴史観そのものが、共産主義社会の崩壊とともに急激に衰退していきました。これも、歴史による復讐でした。何ごとも、幻想を鼓吹するイデオロギー史観は、詐欺師の甘言にも似て、期待が裏切られて破綻せざるをえないものなのです。

### 3 相対主義を超えて

#### 歴史の相対主義

歴史記述は多様であり、相対的です。価値図式そのものが、個人によっても、社会によっても、文化圏によっても異なるために、それに応じて、歴史的事実も異なつて判断されます。時代が違っただけでも、過去への問いかけ方が変わり、違つた歴史が書かれます。歴史記述には現在からの解釈が含まれていますから、時代が進むにしたがつて新しい視点が現われ、歴史は何度も塗り変えられています。本能寺の変での明智光秀の行動も、謀叛とみられたり、復讐とみられたり、合理的行動とみられたりするように、歴史評価も目まぐるしく変わります。絶えず新たに引き起こされる事件は、絶えず新たな歴史叙述を促します。絶えず叙述し直されていく過去の記述は、相対的な価値しきません。

歴史家の違いによっても、歴史は多様に語られます。同じ過去の事実でも、歴史家によつて視点が違いますから、その評価も違つてきます。評価は、事実の客観的評価ではなく、むしろ、評価者それぞれの価値観の表現なのです。同じ一人の歴史家でさえ、現実に翻弄されながら見方を変えていきますから、歴史の書き方も度々更新されます。歴史家は歴史の一部なのです。度々更新される歴史は、どれも相対的な意味しかもちません。

ポストモダンリズムは、この歴史の相対主義を掘り起こし、歴史認識には客観性がなく、歴史的真理も存在しないと主張し、懐疑主義に陥つてしまいました。しかし、必ずしも、懐疑主義に陥る必要はないでしょう。すべては相対的価値しかもないのなら、逆に、どのような歴史記述も、すべて等しくその意味を認められることになりません。相対主義を徹底するなら、かえつて、わたしたちは何ものにも因われず、自由な考え方をすることができます。解釈のズレや誤解も理解することができます。相対性の自覚こそ、人々を自由にします。わたしたちも、また、それぞれに自分自身の歴史

をつくっていくことができるのです。

歴史的世界は、無数の歴史的主体と歴史的出来事が時間的にも空間的にも互いに連関し合っている世界です。このような世界の中に働き出ている歴史的出来事は、それを受け取る歴史的主体の違いによって、多種多様に映し取られます。同じ一つの町でも、異なった方角から眺めればまったく別なものに見え、視野の違いによって幾つもの町があるように見えます。ちょうどそれと同じように、歴史的出来事は一つでも、無数の異なった視点から眺められることによって、無数の異なった見えが現われてきます。歴史的主体の各々は一つの歴史的出来事を異なった視野から見えていますから、視野の数だけ歴史的出来事があるように見えるのです。視野の違いによって問題設定そのものが変わりますから、それとともに、歴史的出来事そのものも違って現われます。

様々な歴史家が、様々な言説を通して、同一の歴史出来事を異なったものとして解釈しているのは、パースペクティヴの違いによります。歴史家は、それぞれのパースペクティヴから、異なった歴史の物語を作り上げています。パースペクティヴが異なれば、歴史的出来事も別様に見えます。歴史は、観測者ごとに相対的にしか現われないのです。さらに、歴史家個人の判断や理解は、その歴史家が属している集団や社会の経験にも影響されますから、集団や社会の多様性に応じて、歴史解釈自体も多彩です。どの集団も社会も、それぞれ独自の経験に照らして、歴史の意味づけを行なっているのです。

歴史の風景は、また、視野の近さと遠さによっても変わります。過去の歴史も、近くから見ると悲惨や不幸など醜いものが見えますが、時代を隔てて遠くから見ると美しい絵のようにさえ見えます。ここでは、歴史を測定する視野も単位も変わってしまうのです。現在は休むことなく動いていきますから、それにつれて視野も移動します。視野の変化にしがって、過去の見えも変わります。パースペクティヴの変化は、わたしたちが動いていくということと連動しています。パースペクティヴ的な知覚は本来動的なものであり、歴史認識も動的な過程なのです。

歴史は、このように、二重、三重のパースペクティヴから見られた万華鏡のような世界なのです。一つの歴史の見方が絶対に正しいということはありません。一つの歴史出来事に、一つの意味を断定することはできません。歴史には絶対的な基準系はなく、絶対不動の定点も存在しません。さらに、歴史は常に特定のパースペクティヴの内にしか現われませんから、歴史は完全な形では把握することができません。対象がある視点から見るときは必ず見えない部分が残る、ある観察者からの見えには盲点が生じるからです。

## 相対主義の克服

歴史的世界は、出来事と出来事が無限に相關している世界です。そこでは、出来事は他のすべての出来事を映し、他の出来事に映されます。一つの出来事は、他のあらゆる出来事を含み、他のあらゆる出来事に含まれます。そして、出来事は相集まって新たな出来事を生みます。出来事と出来事は相互に内在し、相互に映し合い、相互に作用し合って、歴史を形成します。

歴史は創造的な過程です。歴史的主体は、この歴史的世界の命です。歴史的主体は、自己の内に歴史的世界を映します。そして、各々の歴史的主体は固有の視点をもち、それぞれの視点から歴史を多様に理解しながら相互に作用し、歴史を形成します。歴史は、各歴史的主体が描く無数の歴史像の映し合いからできているのです。歴史的主体は歴史の中にあり、歴史は歴史的主体の中にあります。歴史的主体は、歴史の内に含まれながら歴史を含み、歴史を一步前へ進めます。

歴史の出来事の意味は、歴史的に継起する出来事の相互の関係性にあります。しかも、歴史的主体の視野はそれぞれに異なっていますから、同じ一つの歴史の出来事でも多様な意味に理解されます。同じ出来事でも、善とも悪とも判断されるのです。自己も他者も皆一定の立場に拘束されていますから、どのような歴史解釈も相対的です。歴史は相互に異質な無数の物語からなり、歴史解釈は多元的にならざるをえません。

したがって、歴史家は、同じ歴史事象を表現するにも、まったく違う面を見ていますから、歴史家の描く歴史像の間には共約不可能な断絶があります。その断絶は、地平融合をはかることによって理解を進め、変換可能なものとしなければなりません。それでもなお、歴史観の断絶を埋めることはできません。相互に異質な複数の歴史解釈が、解釈上の優位を求めて戦います。そして、その戦いがまた歴史を形成します。

解釈はまた行為です。歴史的主体は、行為を通して歴史を創造する力を持ちます。歴史主体は、歴史世界を映しながら歴史世界を動かす支点なのです。歴史認識の相対主義が懐疑主義に陥らずに、創造性を回復するには、行為的立場に立たねばなりません。単なる相対主義も、単なるパースペクティヴィズムも、まだ静的です。これを、行為論的動的相関主義によって克服しなければなりません。相関主義から形成主義へと発展すれば、相対主義も動的な様相を帯び、歴史のダイナミズムをつかむことができます。

## 歴史の中での観測

わたしたちは、歴史の中にあつて歴史を観測する歴史内観測者です。歴史を歴史の内から見ることは、歴史内観測なくして、歴史をとらえることはできません。歴史を歴史の外から見ることはできないのです。歴史を歴史の外から客観的に認識することができると考え、歴史の必然的法則を打ち立てようとしたところに、近代の歴史哲学の誤りがありました。その近代の歴史哲学も近代という時代の産物にすぎなかつたように、たとえ歴史を歴史の外から見ようとしても、それ自身がまた歴史の中に組み込まれてしまいます。

わたしたちは、歴史という劇場の中において、それぞれのパースペクティブから歴史の劇を展望しているのですから、歴史は、わたしたちのパースペクティブによつてそれぞれ異なつたしかたで映し取られます。その分、歴史は歴史内観測によつて歪められ、改変されていることとなります。歴史は、歴史内観測者を通過することによつて、屈折するのです。こうして、わたしたちが歴史の中で歴史を観測し、認識し、記述し、評価すること、それ自身がまた歴史を動かしていきます。歴史内観測は歴史の構造を変えます。歴史内認識者は、認識という働きを通して、歴史の自己形成に参与しているのです。歴史内認識なくして、歴史の自己形成はありません。歴史は、自己自身の中に歴史内認識者を含むことによつて、自己自身を絶え間なく形成していくのです。

わたしたちは、歴史の外に立つて歴史を観測しているのではなく、歴史の内にあつて歴史を観測しています。だから、観測するという行為は、観測される歴史の性質を変えます。観測者を抜きにして、歴史事実は確定できません。観測は一つの行為であり、その観測は歴史内で行なわれているために、歴史において観測を行なおうとする、それ自身が歴史に反映してしまいます。ここでも、観測するものと観測されるもの、主観と客観は分離することができません。

未来を予言する場合にも、予言そのものは、歴史の外ではなく歴史の中で行なわれる歴史内行為ですから、予言そのものが歴史の現実を攪乱します。さらに、その予言もまた攪乱された現実から反作用を受けますから、未来は予言した通りにはなりません。予言したそのことが予言に反する行動を引き起し、実際の未来は予言された事実とは違つたものになるからです。

例えば、マルクスは、資本主義はその必然的矛盾によつて滅び、共産主義社会が到来すると予言しました。しかし、その予言が、実際は十九世紀後半の歴史の中でなされたために、資本主義社会の人々は、それを食い止めようしました。そのために資本主義社会は存続し、マルクスの予言は、まさにマルクスが予言したことによつて実現されませんでした。予言は歴史内予言であつたがゆえに歴史を乱し、実際の歴史は

似ても似つかないものになっていったのです。

もちろん、予言したことが予言を予言以上に自己実現してしまうこともありますから、歴史は複雑です。予言に賛同する者が多く、予言に適した行動を皆がとるようになったために、予言は予言したことによって実現されることがあります。二十世紀の共産圏の形成には、このような一面もありました。これも、予言が歴史内予言であることによります。

わたしたちは歴史に含まれているとともに、歴史を包みます。歴史と歴史記述、観測されるものと観測するものは、包み包まれる関係にあつて、歴史の変動を起こしています。歴史と歴史内観測者の循環的相互作用から、完結することのない歴史の不断の運動は起きてきます。

歴史は、観測者が観測される世界の中にいる自己観測系です。歴史は、その中に自己の観測者を含み、自己自身を描写し、自己自身を記述します。わたしたちが歴史を認識するということは、歴史が自己の内に見ることで、わたしたちの歴史認識は、歴史の自己認識でもあります。自己認識によって、歴史は自己形成していくのです。

歴史は、また、生命同様、自分で自分を産出する系であり、自分自身で新しいものを生み出していく創造的な系です。ここでは、歴史を観察する者は同時に歴史の中で行為する者であり、そのことによって、それは歴史の自己形成に寄与しています。行為者は歴史の産物であると同時に、歴史を産出します。行為者は、歴史によってつくられるものであると同時に、歴史をつくります。

歴史は、自己自身を自己自身の中で描写し、この自己描写によって自己自身を形成し、形成された自己自身を再び自己描写し、そのことによって、また、新たに自己自身を形成していきます。歴史は、自己言及的な循環を通して自分自身を変革していく自己創出系です。人類史の階層的自己発展も、自己観察と自己言及によります。自己観察と自己言及は、歴史の生成のためには必要なのです。歴史は、自己自身を記述することによって前進します。そして、それはいつまでも未完成です。歴史に完成はありませんから、歴史の自己認識は限りなく続きます。歴史は、観察されるものの中に観察するものがある自己言及システムなのです。

#### 記述不安定性

歴史は、無数の出来事が相互に作用しながら自己自身を形成していく動的な系です。それは、もともと、その内部に観測者を含んでいる系です。ここでは、それを観測し

ようとすれば、どうしてもその系の内部に入ってしまうから、外部観測そのものが成り立ちません。歴史においては、歴史の外からの観測が成り立ちません。歴史は、歴史の中からだけ観測されます。わたしたちは、劇場の中の観客のように、自分たちが住んでいる歴史の世界を、その中で観測し、解釈し、行為しています。わたしたちは、歴史の内部観測者であり、内部行為者です。内部観測と内部行為は新しい経験の内から創発し、歴史を切り開いていきます。

歴史においては、観測に伴うどんなにミクロな攪乱であっても、その攪乱が歴史を乱し、それが全般的な構造変動を起こします。内閣支持率の報道のちよつとした差でも、実際の政治動向を左右することがあるように、観測がちよつとしたノイズであっても、そのノイズによって、歴史はまったく異なる結果を示すことがあります。歴史は、そのような内部観測によって攪乱され、思わぬ方向に動いていく自己創出系です。ここでは、観測行為と観測対象は分離できませんから、観測結果は観測行為と相関的にしか現われません。歴史に不確定性原理が成り立つのは、歴史が、観測するものと観測されるものの動的な相互作用によって変動していく自己観察系だからです。

記述されるべき世界の中に記述者がいるために、記述されるべき世界の構造そのものが変えられてしまうことを、記述不安定性と言います。歴史も、その記述者を自身の中に巻き込んでいる記述不安定系です。歴史を結果の方から外部観測的に記述している歴史家たりとも、歴史の外に立つことはできません。劇場の中の観客が役者に影響を与えているように、わたしたちは歴史内観測者であり歴史内記述者であることによつて、歴史を駆動しているのです。

ここでは、系の振る舞いがその内部で行なわれる観測に対して敏感に反応するため、系の記述のしかたをわずかに変えただけでも、系の同一性は保証されません。対象を異なつたしかたで記述することで対象の構造が変更されてしまう現象は、人間の営む歴史では始終あります。例えば、新聞やテレビなど報道機関が、社会の内部にあつて、一つの事件を大きく扱い、危機を煽ると、国際関係上の小さな事件でも、大きく増幅され、国民感情が激変します。事実とその解釈の間の差異が変動を起こすのです。

歴史内記述は一つの行為であり、それは歴史を動かします。記述するものと記述されるものは分離することができません。記述者は歴史の中から歴史を記述し、その記述の中に歴史そのものが埋め込まれているために、記述することそのことが歴史を変えます。こうして、歴史と歴史記述は相乗的に生成変化していきます。歴史は、解釈され物語られることによつて動いていくのです。

## 第六章 歴史の創造

―行為は歴史を開く―

## 1 歴史を切り開く行為

### 行為の投入

一八六三年五月、外国船を砲撃して危機に陥った長州藩は、防衛強化のため、高杉晋作に、出身身分を問わない軍・奇兵隊を結成させました。しかし、翌年八月、長州藩は、第一次長州征伐で十五万の幕府軍と対峙、そのため、長州藩では幕府への恭順派が実権を握り奇兵隊も解散させられました。幕府打倒を主張していた晋作は身の危険を感じ、博多へ逃れましたが、密かに長州に舞い戻り、たった一人で決起、解散させられていた奇兵隊や諸隊に決起を促しました。しかし、一八六四年十二月十五日夜、晋作の呼びかけに呼応して功山寺に集まった有志は、たったの八十人でした。ところが、これがやがて三千人に膨れ上がり、高杉軍は下関の拠点奪回、萩へ進軍、恭順派を追放して、長州藩を倒幕で統一しました。かくて、一八六六年の第二次長州征伐では、長州藩は海からも攻められました。晋作の奇策によって、幕軍を敗北に至らせることができました。その戦いの果て、晋作は、一八六七年四月十四日、二十九歳で病没しました。しかし、この幕軍の敗北によって倒幕の動きが急激に拡大、大政奉還から王政復古、明治新政府の成立へとわが国は大きく変貌し、新しい時代に突入していきます。その意味で、高杉晋作の功山寺挙兵は、わが国の歴史でも画期的な回天の行為だったと言えます。

歴史は動くのではなく、動かすものです。歴史は、ひとりでは変わっていくものではなく、変えていくものであり、そうである以上、変える者がいます。人は常に何かを言い、何事かを為し、働いています。その行為によって歴史は動きます。高杉晋作の行動によって幕府の威信が一挙に低下したように、投げ出された行為の一撃によって、歴史空間が一変することがあります。わたしたちは、歴史によって形成されるとき、歴史を形成します。わたしたちの行為は過去の歴史によって規定されていますが、しかし、それを打ち破り、新しい歴史をつくっていくのもわたしたちの行為なのです。

わたしたちは、常時ある状況の中に投げ出されるとともに、その状況の中に一つの行為を投げ出してもいます。このとき、どんなに些細な行為であっても、行為の決断と実行の重みは無視できません。行為の決断は、ある行為をするかしないかの選択であり、二者択一です。二者択一の行為によって、状況は変えられます。一方を選ぶ行為が歴史を限定し、歴史の形成を起こします。どちらの方向に進んでいけばよい



のか迷っているとき、どちらか一方の行為を選択することによって、歴史は一変します。

行為するということは選択するということです。この無数の行為の選択が無数の対称性の破れを構成し、歴史の過程や結果を非決定的なものにします。行為の選択と決断こそ、歴史の新しさを創造します。特に、一人の人生を左右するような選択や一国の命運を決するような選択の重みは大きいと言わねばなりません。現在における行為の決断と実行の中に、過去と現在のあらゆる出来事が集約し、そこからシナリオのない歴史のドラマがつくられます。どのようなドラマがつくりだされるかは、その時その場での行為の選択と相互行為に依存しますから、前もって予測することも、規定することも、法則化することもできません。

その意味では、状況を切り開き、状況を変革していく行為こそ、歴史を動かす行為として評価しなければなりません。行為によって状況は打開され、時代は開拓されていくのですから、時代の流れに抗して、その流れを転換していく行為を、歴史を動かす積極面に位置づけねばなりません。時代の変革は、このような例外的個人の先駆的な行動から起きてくるのです。今までの歴史上で活躍した革命家たちも、時代に反抗し、時代の逆風に抵抗しながら、みずからの行為によって道を開き、状況を積極的につくってきました。

行為は歴史を開きます。歴史は、ただ単に眺められるのではなく、生きられねばなりません。生きるということは、ある一定の状況の中に行為を投げ入れ、状況をつくっていくということです。行為し活動することが、生きるということです。行為して活動する人間によって、歴史はつくられていくのです。

わたしたちは、歴史の単なる傍観者ではありません。わたしたちは、歴史の中で行為しています。歴史の認識も、この行為と深く結びついていますから、学問も実践的性格を帯びてきます。

例えば、フランスのマルク・ブロックはすぐれたヨーロッパ中世史の歴史家でしたが、『歴史の弁明』を書き上げている途中でナチス・ドイツ軍の侵入に遭遇、それに対するレジスタンス運動に急遽参加し、命を失いました。確かに、それは悲劇的な結末ではありましたが、しかし、その歴史学上の業績にもまさる歴史的行為が、レジスタンス運動への参加だったのです。ブロックの『歴史の弁明』が後半部分でブツツリと切れているのは、そのことを如実に語っています。だから、『歴史の弁明』は未完の著作に終わっていますが、しかし、そこで、彼の歴史学は完成しているのだと言わねばなりません。真に歴史を生きる歴史家はそうでなければなりません。行為や実践

は理論に優ります。身をもってする実践こそ、歴史を動かしていきます。

二十世紀以来、わたしたちは、世界経済の緊密化とともに、その急激な崩壊を何度も経験してきましたが、そこからの回復も、何もしないで回復していくというものはありませんでした。政治が経済に積極的に介入することによって回復してきたのです。一九三〇年代の世界恐慌でも、アメリカのニューディール政策などに代表されるように、積極的な公共投資が有効需要を起し、それが失業者や過剰物資をなくしていききました。果敢に行動してこそ、経済も回復します。歴史の変化は、ただ無為のまま自然と起きてくるものではなく、その中で、わたしたちが行為することによって起きてくるのです。

人間の営む歴史は、人間の行為的連関によって成り立っています。そして、歴史の変動は、この行為的連関の中に一つの行為が投げ込まれることによって生じます。行為的連関の場に投げ込まれた行為は、その行為的連関を組み替え、新しい秩序を生み出していきます。人は、行為することによって関係を形成し、行為的連関を変えていきます。関係を動かし、連関性を変え、状況を切り開いていく積極的行為が必要なのです。

#### 未来への行為と過去

確かに、わたしたちは過去の歴史によってつくられています。わたしたちは過去からの伝統や習慣の中に産み落とされ、そこで成長します。現在は過去の累積の上に成り立っており、過去は現在の中に生きています。現在にまで食い込んでいる過去は取り消すことのできない事実であり、わたしたちにとって極端とも化し、呵責ない運命ともなります。

しかし、わたしたちは、この運命を積極的な行為によって打開してもいきます。わたしたちの行為は常に歴史によって制約されていますが、しかし、わたしたちは、その行為によって、その制約を乗り越えてもいきます。行為こそ運動と発展を起し、未来とかわります。わたしたちは、大海に漕ぎだす船乗りのように、未来に向かって行為を投げ出すことによって、過去の運命を打ち破り、新たな創造に向かって進むのです。

—とはいえ、わたしたち自身が参加している歴史がどのように動いていくかは、わたしたちには分かりません。わたしたちの身に何が降りかかるかも、見通すことができません。未来を切り開こうとすると、わたしたちはいつも未解決の矛盾にぶつかります。未来には絶えず新しい課題が発生し、その解決に向かってわたしたちは行動し

ますが、いつもその解決は不完全で、また新たな課題が生じます。

このような苦難に面したとき、わたしたちは再び過去を振り返ります。人間は、前に進むためにも、後ろを振り返らねばなりません。未来に向かって歴史を形作るうとするときにこそ、真の過去が見えてきます。わたしたちは、歴史をつくりながら、歴史を体得します。未来を開拓するためにも、過去は必要なのです。このとき、過去は模範となり、抛り所とみなされます。わたしたちは、過去に学ぶことよってのみ、前に進むことができるのです。そればかりか、過去もまた、この未来への新しい行為によつて更新され、その知識もより深められ、生きたものとなります。

例えば、国家の龐大な財政難を解決しなければならないというような課題に面したとき、先人はどのようにして財政改革を実行してきたかが急に見えてきます。現在における実践的な関心から、歴史に対する問いかけも立ち現われてくるのです。実際、将来のあるべき姿を熟考している歴史家こそ、過去の歴史の中から深い意味を取り出し、それを現在に蘇らせませす。それに対して、細分化し専門化した歴史学は、なるほど過去の知識をより豊富にはしますが、現在を生き未来を切り開くには、どれほどの貢献もしません。

現在は、過去と未来の単なる接点ではなく、過去から未来への転回点です。わたしたちが立っている現在という時点は、そこにすべての過去が宿つているとともに、刻一刻と未来を作り出す支点です。そして、この現在という支点に行為があります。現在における行為の中にこそ、過去と未来は現前しています。過去・現在・未来へと連続する単なる時間があつて、その中で、私は行為しているわけではありません。私の行為の瞬間瞬間の中から、過去、現在、未来の歴史が紡ぎ出されてくるのです。どんな行為でも、過去・現在・未来という歴史的時間を瞬間ごとに組み替えています。歴史は、現在の瞬間瞬間のところで生まれ出ています。そこには、歴史が飛躍する非連続点があります。現在の行為の瞬間、創造の瞬間において、わたしたちは過去を乗り越え、未来を開いていくのです。

例えば、六四五年六月十二日、中大兄皇子と中臣鎌足が、朝鮮三国の入貢の儀にかこつけて、蘇我入鹿をおびき寄せ、入鹿を斬つたその瞬間、唐の律令国家に倣つた中央集権体制へと変貌していくその後のわが国の歴史の流れが開かれていきました。そこには、歴史の非連続面と切断面があります。

わたしたちは、みずからの行為を通して歴史を形成しています。歴史の生成は、現在においてわたしたちが行為することと切り離すことができません。過去の全歴史が現在の行為の中に集約して流入しているとともに、そこから未来が開かれてい

きます。行為から出来事は生じ、歴史は生じます。意欲と情熱にかられた行動、苦悩し労苦する行為を通して、過去の必然は超克され、未来の自由は開かれます。わたしたちは、歴史によってつくられるとともに、歴史をつくり出します。人間は、歴史をつくる歴史的存在なのです。

ニーチェも、『生に対する歴史の利害について』の中で、活動し、努力し、苦悩し、解放する生き方を導び、歴史を切り開く行為の必要を強調しました。過去の枯渇し因習化した悪弊を断ち切り、苦悩しながらも解放を目指す創造的人間こそ、歴史はあるのであって、単に過去を鑑賞する者のために、歴史はあるわけではありません。束縛を断ち切り、未来に向かって努力し活動し、勇敢に自己自身の道を進む者こそ、自由で創造的な生へと歴史を切り開きます。これを、ニーチェは「批判的歴史」と言いました。

しかし、それでもなお、未来に向かって決意する創造的主体は、過去の偉大な生き方によって鼓舞される必要があります。創造的主体は、歴史の中から偉大な行為、偉大な人間の理想を読み取り、それと共感しながら道を開いていきます。このような歴史のあり方を、ニーチェは「記念碑的歴史」と言いました。

また、わたしたちは、過去を保存し尊敬し、これを模範とし教師とすることを、歴史に見出しますが、それも、どこまでも、新たな未来へと努力し精進するためのものでなければなりません。このような歴史のあり方を、ニーチェは「尚古的歴史」と言いました。

もしもそうではなく、飢えてもいないのに過剰な知識を吸収し、単に過去の絆に固着しているだけなら、それは、むしろ生を圧殺するものだと言わねばなりません。過去の無数の顕微鏡的事実に向かってただ好奇心を働かせるだけで、現在ただいまを生きることを忘れていた専門的歴史家は、むしろ生を阻害します。歴史が新たな未来へと踏み出すためにあるのなら、ここでは、逆に、過去の「忘却」が必要です。創造的営為に向かうときのみ、真に生きた歴史意識が生じます。歴史はどこまでも生に奉仕するものでなければならぬ、歴史認識と実践は未来から生起するものと、ニーチェは言うのです。

#### 行為による認識

未来に向けて行動を投げ出すとき、ぶつかった苦難が過去の歴史に新しい光を投げかけます。過去の像はわたしたちの行為の投影であり、行為の変化に応じて歴史像も変化します。歴史認識の背景には、未来への予期や期待、要求や意図、動機や感情な

どがあります。現場の体験が認識の源泉にはあります。現在と未来から、過去の歴史はつくられます。したがって、未来に向かってより深く掘削していけばいくほど、過去の像は新しい様相をもって現われてきます。しかも、新しく得られた過去への認識がまた将来への決断を促し、未来に対する実践知を提供します。こうして、わたしたちは、新しい段階に飛躍していきます。

例えば、現在、ヨーロッパは経済統合から政治統合に向けて努力していますが、その統合をどのようにして成り立たせるか、その理想をどこに置くか、EUの条件や由来の手掛かりを得ようとする課題に面したとき、ヨーロッパ人はヨーロッパ中世を思い出し、その歴史に目を向け、それを蘇らせます。ヨーロッパ中世においては、まだ国民国家が成立していなかったために、かえって、ヨーロッパには国境や民族の差を越えた一体性の意識が醸し出されていました。その一体性をつくっていたのは、ローマ・カトリックとその教会組織でした。ヨーロッパが多くの領邦国家に分かれていながら、同時にローマ・カトリックによって精神的に統合されていた中世という時代が、EUの問題に直面したとき、急に思い出されてくるのです。

過去の記憶は単なる記録や保存ではありません。わたしたちは、未来に対して行為を投げ出すことによって、過去の記録からそれに相応しい記憶を呼び戻し、まったくどうなるか分からない未来に対処していきます。だから、行為の投げ出しのしかたによって、過去の記憶は絶えず新しく蘇ってきます。

十五、十六世紀のヨーロッパのルネサンスにおいても、中世の束縛から離れ、新しい生き方を模索しようとしていたヨーロッパ人たちは、古代のギリシア・ローマの古典に帰り、それを再生して、新しい生き方の指針としました。歴史は幾度となくみずからの過去に帰り、帰ることによって同時に再生してきます。わが国の明治維新が王政復古による急激な革新だったことから分かるように、復古が変革のバネになります。行為の必要性が過去の歴史を復興します。だから、また、復興された過去は、純粹にあつた通りの過去ではありません。過去も、更新されるとき、理想化されるのです。歴史は、やむことのない復帰と再生によって螺旋的に歴史的生命を持続し、これを絶えず創造していきます。

記憶は、行為という文脈の中で理解しなければなりません。未来に向かってどのように行為していくかということと記憶は直結しています。ものを覚えたり思い出したりすることが、生きて働くということと深く関係しているように、過去の歴史を想起し再生するにも、未来への行為の投入がなければなりません。逆に言えば、未来に向けて必要なものが想起され、今、生きていく上にとって unnecessary なものは忘却され

ます。記憶とともに忘却ということがなければ、人は生きていくことができません。

ハイデッガーの言うように、人間は、世界内存在として、世界の中に投げ出されながら投げ出す存在であり、そこにこそ存在理解が成り立ち、解釈が成立します。自己の可能性に向けて自己自身を投げ出すという行為が、歴史に対する問いかけを呼び起こし、それが歴史理解となります。わたしたちは、前に向かって生き、後ろに向かって理解するのです。わたしたちは、行為することによって理解し、理解することによって行為します。行為は理解をもたらし、理解は行為を導きます。

認識は行為であり、行為は認識です。行為と認識は不可分です。わたしたちは行為しながら認識し、認識しながら行為します。わたしたちは、歴史の中で、身体を通して行為している生きた主体です。そういう行為する主体によって、歴史は認識されません。歴史の中で行為する者のみが歴史を認識します。わたしたちは、舞台の上に身を投じている役者のように、歴史の中に身をもって飛び込み、歴史を認識しているのです。歴史における理論と実践は分かちがたく結びついています。

#### 歴史中での行為

わたしたちは、日々、歴史のただ中を生きています。わたしたちは、歴史の中で行為しながら、歴史を形成しています。誰も歴史の外に止まることはできません。行為は、歴史の外で行なわれるのではなく、歴史の内で行なわれているのです。わたしたちは、歴史の中において歴史を動かす歴史内行為者なのです。

歴史を動かすものが歴史の中にあるのです。しかも、そのような行為者を、歴史自身が生み出し続けます。演劇がそこで演じられる演技によって変えられていくように、歴史も、歴史の中の演技者によってどのようにも変わっていきます。わたしたちは歴史内観測者であるばかりでなく、何より歴史内行為者です。歴史内行為は歴史を動かします。歴史的行為が歴史の外で行なわれるのではなく、歴史の中で行なわれているからこそ、歴史に不確定性原理が成り立つのです。

だから、歴史における実験は一つの歴史内行為となり、歴史を攪乱します。したがって、実験によって歴史法則を実証することも、法則に基づいて歴史を計画することもできません。実験や計画は、歴史から必ずしゅ返しを受けます。歴史における実験は、それ自身歴史の自己形成の一部なのです。二十世紀の共産主義の実験も似ても似つかないものを生み出しました。歴史は人間がつくるものなのですが、人間の手で計画することができないのです。歴史的实验は歴史内行為ですから、それまでの歴史

的条件や履歴に影響されるばかりでなく、実験をしたことそのことが歴史的経験と履歴になつてしまい、取り返しがつきません。歴史は不可逆であり、しかも法則を破る自由をもちますから、歴史においては、実験を繰り返しても、同じことが再現されることはありません。歴史においては、歴史をつくるものをつくられるものが一つなのですから、どの行為が投げ込まれるかによって、歴史の形成の方向はどのような方向に進みます。

なるほど、わたしたちは、歴史の中に好むと好まざるにかかわらず産み落とされています。そのかぎり、わたしたちは歴史によって規定されていますが、しかし、歴史を規定するのもわたしたちです。歴史によって行為が限定されるばかりでなく、行為によつても歴史が限定されます。歴史と行為の相互限定によつて、歴史的世界は変動していきます。歴史の変動は、歴史内行為と歴史の相互限定から生じるのです。このように、形成されるものの中に形成するものがある歴史の自己形成の動きを、歴史の外から決定論的に記述することはできません。

例えば、生まれてきた子供にとつて、言語は与えられたものであり、そのルールに従つて言語を使用していかなねばならないのですが、しかし、その子供も、成長するに従つて、その言語の使い方を少しずつ変えていきます。そのために、言語は、世代とともに、その使用法や表現、意味や文法さえも変わっていきます。ヴィトゲンシュタインが言うように、言語の意味は、言語内におけるその使用によつて決まります<sup>4</sup>。言語ゲームの中で行なわれている行為によつて、言語ゲームそのものが変えられていきます。ちょうど国際政治のルールのように、そのもとで演じられる行動や主張そのものによつて、ルールそのものが変えられていくのです。

歴史も、また、その中で演じられる歴史内行為者の行為によつて内部から変更されていきます。歴史はその内部に行為者を含みますから、その行為者によつて、その規則そのものが変えられていきます。だから、このような歴史を、歴史の外から決定論的法則によつて縛ることはできません。たとえ法則で縛つても、歴史は気軽にその法則を破つて変動していきます。

としますと、制度化された価値を相対化し、既存の規範を敢えて破つてもなされる歴史内行為が、逆に、大きな歴史の変動をもたらすことに注目しなければならぬでしょう。既存の社会構造に規定された行為ではなく、既存の社会構造を規定し返す主体的行為が社会の変革を起こします。そのような行為によつて、歴史の価値や意味も変換されていきます。客観的な動かし得ない歴史の流れがあつて、その流れに沿つて、個々人の行為が位置づけられるわけではありません。わたしたちが行為することに

よって歴史は形作られ、行為の中から歴史が織り出されていくのです。

その意味では、渦中の行為によってこそ、歴史は開かれると言わねばなりません。歴史は単に観察されるものではなく、行為されるものです。渦中に身を投じ、意を決して新たな未来に突入していく行為こそ、偉大な行為です。

例えば、北条時宗が度重なる元からの服属要求を拒み、意を決して元からの使者の首を斬ったとき、その後二度にもわたって神風が吹き、元軍を退散させることができるといふようなことはもちろん分かってはいません。それでも、時宗は決断し、どうなるか分からない未知の世界にみずからの行為を投げ込んだのです。渦中の行為の中には、原因も結果も、分別も反省もありません。渦中の行為を動かすものは衝動や情熱であって、それは合理的理性を越えています。ひたむきに専心没頭し、止むに止まれず行なわれる行為こそ、歴史を動かします。没入する行為の中にこそ、真の自己があります。

それと比べるなら、歴史学が記述する行為の外面的記述、紀元何年と言われるような均一な歴史的時間の上に位置づけられた客観的な行為は、同じ行為でも、精気のない実感のわかない行為に見えます。渦中の行為は、後からの反省ではつかむことができないのです。渦中の行為を外から客観的につかもうとすれば、それ自身が別なものになってしまいます。右往左往しながらも現場を動き切り開いてきた政治家、現実を翻弄されながらも命をかけて決然と立った革命家の行為、これら渦中に身を投じて歴史を動かしてきた行為の真実は、歴史学によって客観的に描くことはできません。

渦中の行為は観察される行為ではなく、身体を通して実践される行為です。身体なくして行為することはできません。人は身体を通じた行為の中で体験し、その体験の中にこそ新しいものが生まれます。実践の意味もそこにあります。わたしたちは渦中を生き、渦中で死んでいくのです。

## 2 自由と創造

### 英雄と天才

歴史を切り開く行為として、英雄の行為は見逃すことができません。英雄は、その勇気ある行為によって、新しい時代を開拓していきます。英雄は、困難に面しても、その力強い行動力によって、大胆に事業を遂行していきます。英雄は、運命に立ち向かう者であり、戦闘者です。英雄は、不屈の精神をもって苦難に耐え、運命を打開していきます。英雄を動かすものは、強力な意志によって支えられた情熱です。英雄は、



時代と戦いながら、自己の信念を貫いて行動し、時代を変革していきます。だから、英雄は、多くの場合、一つの秩序からもう一つの新しい秩序に移行する変動期に登場します。アレクサンドロス、シーザー、チンギスハカン、ナポレオンなど世界史上の英雄、わが国の織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、坂本龍馬、高杉晋作、西郷隆盛など、みな、そういう変動期に登場しています。というより、むしろ、このような英雄たちによってこそ、歴史の変動期が形づくられていくと言わなければなりません。

しかも、英雄は、歴史の流れの中で神話化されていきます。歴史上の英雄像には、民衆が描いてきた理想像や偉大な者への尊崇の感情など、民衆の願望が託されています。わが国でも、倭建や源義経などに代表されるように、英雄像も歴史とともに創造されてきました。それは、事実のみを追究する実証史学を越えた歴史の否定できない動きです。こうして、英雄像は時間を超越した歴史的典型となり、人々の行動の指針や理想像となつていきます。

もつとも、時代は、英雄と似て非なるものを英雄に祭り上げることがあります。特に現代は、民主主義社会、全体主義社会を問わず、英雄ならざる偶像を生み出します。現代は偽英雄の時代です。偽英雄は単なる煽動家あるいは野心家にすぎないのですが、現代の大衆は、これを、大衆の願望を一身に体現した英雄として、大衆の偶像に祭り上げます。偽英雄は単なる幻想を売る山師にすぎないのですが、大衆はいとも簡単にその言動に誘惑され、これについていきます。二十世紀が生み出したヒトラーやスターリン、毛沢東などは、そのような偽英雄の典型でしょう。もつとも、このような偽英雄は、歴史による清掃作業によって、いずれは没落します。

宗教や芸術、科学や技術などの分野に現われる天才や偉人も、その行動や思想、作品や理論、発明や発見などによって、歴史に大きな影響を与えます。天才は強い確信と信念の持ち主であり、独創的な能力と構想力を持ち、それを実現する豊かですぐれた才能をもっています。そして、天才は、その独創性によって新しいものを創造し、その時代の典型や様式をつくり、時代に表現を与えます。仏陀やイエス・キリストなどの宗教的天才、ガリレオやニュートン、アインシュタインなどの科学上の天才などは、みな、そういう性格を備えています。天才は、文化の飛躍の推進者であり、新しい価値の創造者です。

また、偉人は、多くの人々がどのような方向に進むべきか迷っているとき、時代がそのときどきの風潮に動かされて流されていくときに、正しい方向を指し示し、時代を開拓していきます。偉人は、その時代に認められないことも多いのですが、それにもかかわらず、時代の軌轍に屈することなく、自己の信念を守り、新しい歴史を形成

していきます。わが国でも、江戸幕府末期の大塩平八郎や吉田松陰などは、そのような偉人の代表と言えます。

天才や偉人は、時代がつくるとともに、時代をつくります。彼らは時代の革新者です。彼らの苦闘を通して、新しい歴史は形成されます。歴史を単に偉大な人物の物語とだけすることはできませんが、しかし、偉大な人々を見出さない時代は歴史の不幸です。偉大な人々は、新しい時代を創造する歴史的生命の核なのです。偉人は、時代の風潮に迎合しているだけの単なるタレントではありません。だからこそ、彼らはその後の時代の模範ともなり、教師ともなるのです。

偉大な英雄や天才や偉人を、歴史の創造を担う創造的個人として高く評価しなければなりません。創造的個人は、歴史の道筋に決定的な影響を与える傑出した個人です。これら創造的活動をする卓越した個人は、いつも苦難を乗り越え、時代を動かしていきます。そのような創造的個人の創造的行為によって、歴史は創造されていくのです。歴史的个人は、そこへと歴史の力が集まり、そこから新しい力が湧き出てくる歴史の焦点です。そのような歴史的个人の創造的行為がなければ、歴史は変革されません。

ヘーゲルは、このような世界歴史を更新するような歴史的人物を「世界的個人」と言いました。確かに、時代の大きな変革を起こすのは、そのような世界的個人の創造的行為です。政治の革命であれ、科学の革命であれ、巨大な革命は、最初はたった一人の独創的個人の考えや行動から始まります。そういう少数の個人の活動から、新しい歴史は始まるのです。

なるほど、歴史を動かすのは民衆であり社会構造であるという考えがあります。しかし、その民衆を率いてある一定の方向に動かしていくのは創造的個人です。創造的個人によって、社会構造も変更されていきます。時代（とき）の場に抛（な）られた創造的個人の創造的行為がゆらぎを生み出し、それが時代（とき）の場に生かされ、時代は新しく編成し直されていきます。

#### 発明と発見

行為によって歴史が開かれるとすれば、偉大な発明や発見が社会を一変させることにも注目しておかねばなりません。発明・発見史上偉大な業績を残した天才や技術改良に尽くした名もなき技術者が、歴史変動に果たした役割は大きいと言わねばなりません。長い人類史を振り返ってみても、新しい道具の発明や製作が社会を大きく変えてきました。

例えば、紀元前二〇〇〇年以後のユーラシアの人類史を概観しても、ここでは、ユ

ーラシアの草原地帯を根拠に活躍した騎馬遊牧民の技術が歴史変動に果たした大きな役割を評価しなければなりません。特に、ユーラシアの騎馬遊牧民は鉄の精錬技術を発達させ、騎馬技術と戦闘技術を改良し、ユーラシアの西や南や東の諸文明を攪乱して、世界史を大きく変えてきました。中国の春秋時代から戦国時代への突入やその後の秦漢帝国による中国文明の成立も、遊牧民がもたらした鉄精錬技術の流入と武器の発達なくしてはありえません。わが国が、弥生時代から古墳時代、飛鳥時代にかけて、地域国家の形成から統一国家の形成に向かったのも、その背景には、朝鮮半島からの鉄生産技術の流入がありました。

航海術の発達や船の改良による歴史変動も大きいと言わねばなりません。ヨーロッパ人が大西洋を横断したのはコロンブスに始まるわけではなく、それ以前に、ヴァイキングなど、かなりのヨーロッパ人が新大陸に渡っていたことが知られています。しかし、それでも、コロンブスの新大陸発見は、ヨーロッパの歴史を考える場合、大きい意味をもっています。この発見によって、その後、アメリカ大陸、アフリカ、ヨーロッパを結ぶ大西洋交易圏が成立、新大陸がヨーロッパ近世の構造に組み込まれるとともに、ヨーロッパ自身が新大陸なくしては成り立たなくなり、メキシコ産やペルー産の銀の大量流入により、貿易構造も、新大陸発見以来激変しました。新大陸なくして、ヨーロッパの近世はありえなかったのです。

現代も、また、情報技術をはじめ科学技術の驚異的な発達によって、国民国家の枠組みが根底からゆらぎ、人類史は、より大きな広範国家形成へ、さらに世界統合に向かって激変している時代です。技術の発達は、社会や国家を大きく再編し、歴史を塗り替えていきます。しかし、この技術の発達もひとりでに起きるのではなく、そこには、有名無名を問わず、技術の開発に携わった人々がいたのです。どのような技術にしても、その元をたざせば、誰か一人の心に湧き出た工夫や洞察から始まります。その行為が出发点になって、歴史は大きく変えられていくのです。

環境の意味を新しい角度からとらえ直してみる能力が洞察力です。人類は、この洞察力によって環境の新しい意味を創造してきました。道具の発明や技術の開発は、環境の意味変換によってなされます。人類の歴史は、石器の発明以来、農業や牧畜の発見を経て、今日の高度情報技術開発に至るまで、環境の意味変換の歴史でした。そして、それは、環境への人間の適応を可能にできました。人間は、道具の発明や技術の開発、社会の構造や制度の変革などによって、環境に適応していきます。しかも、同じような自然条件下にあっても、人間の反応は機械的ではなく、多様な反応と適応のしかたを示します。

だから、地理決定論は誤りです。例えば、砂漠地帯に住む古代の諸民族のほとんどが多神教だったことを考えれば、砂漠地帯だから一神教が生まれたのではないことが分かります。砂漠地帯に住むそれぞれの民族の反応と適応の違いを考えねばならないのです。

また、同じようなことですが、わが国が島国だったとしても、島国だから閉鎖的になるとは限りません。島国だということは単にわたしたちの歴史的活動の条件にすぎず、それをどう利用するかによって、わたしたちの生活の性質は変わります。実際、海を障害と考えず交通路と考えれば、島国はむしろ開放的になります。航海術という技術は、それを可能にします。

人間は、道具の発明や技術の開発によって、環境の制約を乗り越えることができます。人間は、そのような行為によって環境に働きかけ、自己と環境の関係を乗り越え、問題を解決していきます。行為によって世界は開かれます。行為によって変革が起き、ものごとの意味が変えられるのです。そして、そこから、人間の歴史は大きく変わります。

人間は、技術によって環境に適応してだけでなく、環境を改変し、積極的に環境を創造してきました。物の製作という行為は、環境の改変をもたらします。人間は、食糧獲得や運輸・通信などのために自然を開拓し、自然の猛威を克服してきました。旧・新石器時代以来、技術がなければ、今日のわたしたちの文明の大部分はなかったでしょう。そして、それは、改変された環境をさらに改変していくということによって形成されてきました。

現代の日本文明といつても、もはやモンスーンというような自然風土の条件だけでは規定しきれない巨大な高度産業技術文明を形成しています。とともに、環境もまた、高度産業技術によって大幅に制御された文明的環境に改変されています。それは、もはや稲作漁撈文明なども規定することのできないものです。それにともなって、国民性とか文化という目に見えない文明の核も変化していきます。

人間が環境を変えていくことがなければ、歴史というものはなかったでしょう。人間は技術を通して環境を改変するとともに、自らの社会組織を変えながら、歴史を形成してきたのです。そのため、今日においては、わたしたちのまわりの自然環境そのものも、もはや単なる自然の産物ではなく、長い人間の歴史の営みによって形作られてきた歴史的環境となっています。人間は、環境の内にながら環境をつくり、環境を創造してきたのです。そこに、技術と歴史の意味があります。

なるほど、人間は自然法則の束縛を受けています。しかし、人間は、同時に、その

自然法則に従いながらも、技術によって、自然の制約から自己自身を解放してきました。環境に対する人間の技術的適応によって、環境の新しい形を創造してきたのです。そこに、人間の文明の営みがありました。物の製作は自由を含みます。技術は、ある意味で、自由な創造なのです。

確かに、現代文明の技術力は物凄く、その環境改変能力の飛躍的増大は自然環境への負荷を増大させているばかりか、戦争の増大、人間の機械化、身体性の欠如など、自然根源性の喪失をもたらし、その破壊力は凄まじいと言わねばなりません。

しかし、それでもなお、人間の歴史は環境に規定されると同時に、環境を規定してきました。わたしたちは、環境によってつくられると同時に、環境をつくってきました。衣食住、生業、戦争の形態など、歴史的営みが、地形や地勢、気候や風土に規定されると同時に、道路、所有地の境界、田園や都市など様々な地形や景観が、また、歴史的に形成されてきました。歴史は地理によって規定されると同時に、地理も歴史によって規定されます。人間と環境の相互作用から、歴史は形成されていくのです。

技術上の発明や発見も、人間と自然の相互作用の中から出てきます。発明・発見は、洞察力によって新しい選択を見出し、新しい形を創造していく一種の創作です。それは、自然を加工し、すでにある組み合わせから新しい組み合わせを見出し、以前にはなかった新たな統合を生み出します。この発明・発見は、しばしば人間の生存を根本的に転換し、文明の突然の飛躍をもたらしてきました。石器の製作でさえ、人類史の当初にあつては大発明だったのです。それを境にして、人間生活も一変したのです。この地球表面の景観を一変させるほどの威力をもつに至った技術的創造力の根源は、単なる人間世界を越えて、どこか超人的な生命力に駆動されているかのようです。

技術的行為も大きく歴史を創造してきました。技術の進歩によって歴史の発展が急激に起きるということは無視できません。技術の発展が生産力を増大させ、社会・経済の変化を起し、それが歴史を動かしていきます。現代の産業技術文明の源泉である産業革命も、機械生産と化石エネルギーの利用という飛躍的な技術開発によって起きたことです。とすれば、そこで働いている偉大な技術者の創造的活動を歴史の大きな駆動力として評価しなければなりません。

#### 歴史の中の自由

高杉晋作の意を決した行動がわが国の新たな歴史の形成を加速したように、あるいは、蒸気機関の発明が現代の巨大な産業技術文明の出発点になったように、行為こそ歴史を開きます。そして、そこに自由があります。自由に基づく決断から、歴史はつ

くられていくのです。人間は歴史を変革し、新しい歴史を未来につくっていきます。なるほど、わたしたちは過去の歴史的条件に制約されていますが、しかし、わたしたちは、現在における行為によってそれを克服し、歴史を新しく形成していくことができます。そこに、行為の自由があります。

わたしたちは、必ずしも、歴史的必然や運命に支配されてはいません。わたしたちは、必ずしも、社会の制約や階級的な条件に束縛されてはいません。人は環境に規定されながらも、環境の制約を乗り越え、環境を新しくつくっていきます。

歴史は、また、歴史の因果法則にも決定論的法則にも支配されてはいません。人間は、行為によって、歴史法則を破る自由もっています。法則を破る自由な行為が、歴史を新しく形成していくのです。歴史がすでにつくられていることに注目すれば、そこに必然と運命があると言わねばなりません。歴史をつくっていくことができることに注目すれば、そこに自由の地平が開かれます。わたしたちは、必然と自由との戦いを通して、未来を開拓していくのです。

歴史にはいくつもの分岐点があり、そこにはいくつもの選択肢があります。その分岐点において、どの方向を選択し、どのような行為を投じるかによって、歴史の新しい自己形成は始まります。それは、予見不可能で不確実な動きであり、非決定的で偶然に満ちています。しかし、そこに自由があります。未来の歴史は、ある意味で、現在における決断一つでどのようでも形成していくことができるのです。そこには予測不可能性がありますが、予測することができない創造性にこそ、自由は宿っています。現在の瞬間は創造的であり、創造の瞬間にこそ自由があります。

### 行為と創造

出来事と出来事の相互連関から、歴史は変動していきます。一つの出来事の生起には無限の出来事が働き出、その一つの出来事からまた無限の出来事が生成してきます。そして、その出来事は、行為から生起してくるのです。

歴史は、無数の個人の行為が相互に作用し合って、次々と新しいものを創発していく自己組織系です。相互連関性の場に投げ出された行為がゆらぎを生み出し、そのゆらぎが増幅されて、歴史は不断に新しい秩序を生み出していきます。だから、どんなにささやかな行為でも、相互連関性の場を通して他に影響を及ぼし、歴史を動かします。まして、偉大な発明や発見、偉大な革命行為などは、歴史に大きな影響を及ぼします。歴史の自己形成は、相互連関性の世界で個々人が行為することによって起きるのです。行為する主体は、世界の相互連関性を変えます。わたしたちの行為は相互連

関性によって形成されると同時に、その相互連関性を組み替えてもいるのです。独創的個人が新しいものを創造し、それが相乗的に社会を動かしていくことに注目しなければなりません。長い歴史の中では、少数の独創性のある先駆者が大勢の人々を巻き込んで、歴史を創造してきました。もちろん、名もなき者や敗者も歴史の形成に貢献しますが、どちらにしても、歴史的個人は、みずからの行為を通して、歴史を創造する活力をもっています。

この点から言えば、歴史の動きに一般法則を見出そうとするのではなく、その法則によっては律しきれない個性と創造性の方こそ見るべきでしょう。個性と創造性は、平均や一般化によっては処理しえませんが、歴史には何ら法則性はありません。人類の長い歴史においては、歴史的個人の勇気ある行動や偶然の発明・発見など、独創的行為が歴史を思わぬ方向に動かし、予測不可能な大きな変動を起こしてきたのです。

歴史は、絶えず新しい創造に向かって生成発展していきます。不連続の創造、それが歴史です。だからこそ、状況に変化を起し、事態を切り開き、まったく新たなものをつくり出す創造的行為を評価しなければならないのです。

歴史的創造は突発的な行為から出発します。突発的な行為は歴史の連続性を破ります。発明や発見が歴史を思わぬ方向に飛躍させていくのも、そのことによりです。地球上を覆うばかりの現代の産業技術文明の源泉も、蒸気機関の発明よりさらに古く、十八世紀末のイギリスで、綿の紡績を水力機械でできないかと考えた技術者の発想の瞬間にまで遡ることができます。発明や発見や決断など、創造の時間は一回的な時間であり、瞬間です。その瞬間のところに、歴史の分岐点が形成されます。過去を集めて未来へ突入する現在の瞬間に、歴史をつくる行為があります。歴史をつくる行為は歴史的時間を限定し、新しい歴史的時間を創造していきます。そういう創造的行為によって、一時代を区切るエポックが形成されます。エポックとしての歴史的時間は非連続であり、そこに歴史の飛躍もあります。

はじめに行為があります。行為なくして歴史は形成されません。わたしたちがどのような行為し、どのように動くかということによって、歴史は新たに形成されていきます。行為は、歴史を動かす主軸です。歴史の中に行為があると同時に、行為の中に歴史があります。

人間の営む歴史は創造的進化的過程であり、絶えず変化し生成してやまない生命の運動です。この生成の中に行為があると同時に、行為の中に生成があります。行為がなければ生成もありません。為すことは成ることであり、為すことなくして成ること

はありえないのです。



註

- I
- 1 笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』 吉川弘文館 二〇〇七年 IV
- I
- 1 三谷博『明治維新を考える』 有志舎 二〇〇六年 序章および I
  - 2 T・クーン『科学革命の構造』 中山茂訳 みすず書房 一九九三年
  - 3 オルテガ『危機の本質』 オルテガ著作集 4 前田敬作ほか訳 白水社 一九七〇年 三〇五
  - 4 ハラクレイトス『断片』 〇〇『ソクラテス以前哲学者断片集』 別冊 内山勝利編 岩波書店 一九九八年 四五頁
- II
- 1 ボアンカレ『科学と方法』 吉田洋一訳 岩波文庫 一九八三年 七三頁
  - 2 マイネッケ『ドイツの悲劇』 矢田俊隆訳 世界の名著 54 中央公論社 一九六九年
  - 3 エビクロス『エビクロス―教説と手紙―』 出隆・岩崎允胤訳 岩波文庫 一九七一年 一四頁
  - 4 澤泉重一・片井修『セレンディビティの探究』 角川学芸ブックス 二〇〇七年 第四章 第五章
  - 5 九鬼周造『偶然性の問題』 岩波書店 一九六八年 三二五頁
  - 6 グールド『ワングフル・ライフ』 渡辺政隆訳 早川書房 一九九四年 三三六―三五八頁
  - 7 同書 四三八―四四二頁、四九四―四九七頁
  - 8 ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』 上下 倉骨彰訳 草思社 二〇〇四年
  - 9 マルク・ブロック『歴史のための弁明』 松村剛訳 岩波書店 二〇〇四年 一七〇頁
  - 10 Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Pt. B., Felix Meiner, 1920, S. 88 (『歴史哲学講義』(上) 長谷川宏訳 ワイド版岩波文庫 二〇〇三年 六三三頁)
  - 11 ワールドロップ『複雑系』 田中三彦・遠山俊征訳 新潮社 一九九七年 四八―四九頁
- III
- 1 ブルクハルト『世界史的諸考察』 藤田健治訳 二玄社 一九八一年
- IV
- 2 ブルクハルト『イタリヤ・ルネサンスの文化』 柴田治三郎訳 世界の名著 45 中央公論社 一九七三年 I
  - 3 ブルクハルト『世界史的諸考察』 藤田健治訳 二玄社 一九八一年
- 六

- 4 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会 一九八九年 五一〜七八頁 参照
  - 5 Jaspers, Von Ursprung und Ziel der Geschichte, Piper, 1963, S. 45〜S. 49 (『歴史の起源と目標』重田英世訳 理想社 一九七八年 六〇〜六五頁)
  - 6 トウキユディダス『戦史』(中)久保正彰訳 岩波文庫 一九七七年 卷三(八二)
  - 7 ヘラクレイトス『断片』1-31 45, 60, 72, 115 『ソクラテス以前哲学者断片集』別冊 内山 勝利編 岩波書店 一九九八年 三四〜五八頁
- IV
- 1 太田牛一『信長公記』桑田忠親校注 新人物往來社 一九九七年 三八七頁〜三九〇頁
  - 2 クローチエ『歴史の理論と歴史』羽仁五郎訳 岩波文庫 一九八三年 五三頁以下
  - 3 同書 第一部三〜三
  - 4 T・クーン『科学革命の構造』中山茂訳 みすず書房 一九九三年 第十章
  - 5 E・H・カー『歴史とは何か』清水幾太郎訳 岩波新書 一九八五年 八頁
  - 6 T・クーン 前掲書 第六章〜第九章
  - 7 E・H・カー 前掲書 二七〜三〇頁
  - 8 クローチエ 前掲書 一六頁
  - 9 E・H・カー 前掲書 四〇頁
- V
- 1 Gadamer, Wahrheit und Methode, Gesamte Werke Bd. I, J. C. B. Mohr, 1986, S. 307-S. 312 (『真理と方法』II 善田収・巻田悦郎訳 法政大学出版会 二〇〇八年 四七三〜四八〇頁)
  - 2 Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1963, §2 (『存在と時間』(上) 細谷貞雄訳 ちくま学芸文庫 一九九四年 第三二節)
  - 3 トウキユディダス『戦史』(中)久保正彰訳 岩波文庫 一九七七年 卷三(八二)
  - 4 マルク・ブロック『歴史のための弁明』松村剛訳 岩波書店 二〇〇四年 一九九頁
  - 5 ダント『物語としての歴史』河本英夫訳 国文社 一九八九年 第八章  
ヘイドン・ホワイ特『歴史における物語性の価値』『物語と歴史』海老根宏・原田大介訳 リキエスタの会 二〇〇一年
  - 6 レーヴィット『世界史と救済史』信田正三ほか訳 創文社 一九七八年 一一三〜一二四頁

- 1 マルク・ブロック『歴史のための弁明』松村剛訳 岩波書店 二〇〇四年
- 2 Nietzsche, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben, Unzeitgemäße Betrachtungen, Zweites Stück. Kröner, 1964. (『生に対する歴史の利害について』世界文学大系42 秋山英夫訳 筑摩書房 一九六〇年)
- 3 Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1963, \$75 \$76 (『存在と時間』(下) 細谷貞雄訳 ちくま学芸文庫 一九九四年 第七五節 第七六節)
- 4 Wittgenstein, Philosophische Untersuchungen, I - I - 43, Suhrkamp, 1967, S. 137. S. 35 (『哲学探究』ウイットゲンシュタイン全集8 藤本隆志訳 大修館書店 一九七六年 一五〇一六頁 四九頁)
- 5 Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Ph. B., Felix Meiner, 1920, S. 74f. (『歴史哲学講義』(一) 長谷川宏訳 ワイド版岩波文庫 二〇〇三年 五八頁以下)

第1章

**三B政策** 第一次大戦前のドイツの帝国主義政策を象徴する表現。ドイツは、ベルリン、ビザンチウム、バグダードの三要都を鉄道で連結し、バルシア湾に進出しようとした。

**カオス** 変数同士が相互に運動している運動方程式の解には、予測不可能で複雑な振る舞いをする運動形態があり、それをカオスという。そこには初期値鋭敏性があるために、決定論的方程式の解が非決定論的な予測不可能性を引き起こすという矛盾した様相が見られる。

**閾値** 注目する反応がある系に起こさせるとき必要な作用の大きさ・強度の限界値。

**七卿落ち** 一八六三年、尊攘派の公家、三条実美など七名が、京都から長州藩へ脱走した事件。

**禁門の変** 蛤御門の変とも言う。京都での地位を失墜した長州藩は、勢力回復のため、藩主や

尊攘派七卿の赦免を願ったが赦されず、さらに池田屋事件で藩士が殺されたため、一八六

四年、京都の蛤御門付近で、会津・薩摩など諸藩の兵と戦って敗北した。

**ブリュッセル** (一八二七―二〇〇三)ベルギーの物理学者・化学者。ロシア生まれ。自己組織化理論によって、不可逆性と乱雑性をもつ動的系を研究。宇宙、物質、生命、社会のあらゆる現象に見られる秩序形成過程を理論化した。著書に『構造・安定性・ゆらぎ』『混沌からの秩序』『存在から発展へ』などがある。

**自己組織化** 外界と物質・エネルギー・情報をやり取りしている開放系は、自己自身で秩序を形成する能力をもっている。この秩序形成を自己組織化という。

**平衡から遠く離れた開放系** 植物や動物の成長や進化のように、外部の環境と物質・エネルギー・情報の出入れをしながら、環境に応じて形態や機能を柔軟に変えていく開かれたシステム。

**アヘン戦争** 一八四〇―四二年、清朝のアヘン禁輸措置からイギリスと清朝との間に起こった戦争。清朝が敗北し、中国の半植民地化の起点となる。

**アロー号事件** 一八五六年、広東港に停泊中のイギリス国旗を掲げた小帆船、アロー号の竊検問題から起こった清国とイギリス・フランスとの間の戦争。

**変法自強運動** 法・制度を改革して自らを強くする意。清期末期に、康有為・梁啓超らが、明治維新にならって唱えた憲法制定・国会開設・学制改革などの政策。

**パン暴動** フランス革命で、一七八九年、バスティユ襲撃の英雄マイヤールに率いられた主婦たちを中心とする群衆が、パンの供出を要求して、ヴェルサイユ宮殿に向かい、供出を約束させ

た事件。

トーマス・クーン (一九二二—一九九六) アメリカの科学史家。その著『科学革命の構造』で、科学理論の発展と転換の構造を説明する(パラダイム)概念を提出し、各方面に影響を与えた。パラダイム 一時代の支配的なものの見方のこと。特に、科学上の問題を取り扱う前提となるべきその時代の共通の思考の枠組み、範型。

通常科学 クーンが『科学革命の構造』で使ったnormal scienceという概念の日本語訳。(規範的)科学とも訳される。通常科学は、規範とされるべき科学への取り組み方が明確に定められた科学で、ある種の権威をもった科学者集団によって支持されている科学のこと。これに對抗して登場してくるのが、異常科学または革命的科学といわれる。

相対性理論 アインシュタインが提唱した理論。特殊相対性理論と一般相対性理論によって構成される。自然法則は互いに等速直線運動をする観測者に対して同じ形式を保つとするのが、特殊相対性理論。それに対して、加速度運動系を含む任意の座標系の観測者に対し法則が同形になるという要請から重力現象などを説明したが、一般相対性理論。

量子力学 現代物理学の基本をなす理論体系の一つ。分子、原子、原子核、素粒子などのミクロの世界を支配する物理法則を中心とする。最近では、宇宙も含めて、マクロの世界も視野に収める。観測対象と観測者は独立してないと考える不確定性原理を基本とするため、観測値の予言は、一般に確率的のみ与えられる。

エーテル 初め、光の電波を媒介する媒質としてホイヘンスが仮定し、後、一般に電磁場の媒質とされた物質。相対性理論によって、その存在が否定された。

ヘラクレイトス (前五〇〇頃) 古代ギリシアのソクラテス以前の哲学者。永遠の(生成を説き、事物の変化の相を強調して、それを燃える(火)に象徴させた。しかし、同時に、相互に転化し合うものの緊張的調和によって普遍の秩序(ロゴス)が保たれるという洞察も示している。

## 第2章

クレオパトラの鼻 「クレオパトラの鼻、もしこれが低かったら地上の全表面は変わっていたことであろう」というパスカルの『パンセ』の警句に由来する。

ポアンカレ (一八五四—一九一二) フランスの数学者。数論・関数論・微分方程式・位相幾何学のほか、天体力学および物理数学、電磁気学などについて卓抜な研究を行なった。また、マツハの流れをくむ実証主義の立場から科学批判を展開した。著書に『科学と方法』『天体力学』などがある。

マイネッケ (一八六二—一九五四) ドイツの歴史家。著書『世界市民主義と国民国家』『歴

史主義の成立』などで、ランケ史学を継承しながら理念史・精神史を開拓した。

**エビクロス** (前三四一頃〜前二七〇頃) アテナイに学園を開き、デモクリトスの流れをくむ原子論を基礎とする実践哲学を説いた。真の快楽は、欲望から開放された平静な心境(アタラクシ)のうちにあるとした。

**セレンディビティ** お伽話「セレンディブ(セイロン)の三王子」に由来する造語。思わぬものを偶然に見出す能力のこと。

**縁起** 一切の事物は固定的な実体をもたず、様々な原因や条件が寄り集まって成立しているという考え。仏教の根本思想。

**九鬼周造** (一八八八〜一九四二) 日本の哲学者。一九二二年から足掛け八年にわたってヨーロッパ

を留学。ベルクソンやハイデッガーに直接師事する。帰国後、京都帝国大学に在職し、二元の「出会い」を強調する独自の哲学を展開。著書に『いきの構造』『偶然性の問題』などがある。

**グールド** (一九四一〜) アメリカの進化生物学者。新しい進化観を提唱するとともに、すぐれた科学エッセーを執筆。著書に『ダーウィン以来』『ワンダフル・ライフ』などがある。

**カンブリア紀** 古生代、最古の時代。約五億四千万年前から五億年前まで。三葉虫のほか、多くの無脊椎動物が爆発的に出現した。

**ハル・ノート** 太平洋戦争勃発直前の日米交渉におけるアメリカ側の最終案。一九四一年、国務長官ハルの名で出された。その内容は、日本の中国・仏印(フランス領インドシナ)からの無条件即時撤退など、それまでのアメリカの提案をこえる強硬なものであった。これを機に、日本は対米開戦に踏み切った。

**保障占領** ある条件の履行を間接的に相手国に強制するための占領。休戦条約や降伏条約を確保する場合に多く行なわれる。

**ゾルゲ事件** 一九四一年一〇月、日本政府の機密をソ連に通報した疑いにより、ドイツ人新聞記者でソ連赤軍諜報員リヒャルト・ゾルゲとその協力者尾崎秀美らが逮捕された事件。ゾルゲと尾崎は死刑。

**尾崎秀美** (一九〇一〜一九四四) 中国研究家。東亜協同体論を主唱。一九四一年のゾルゲ事件に連座して処刑された。

**ヘーゲル** (一七七〇〜一八三二) ドイツ観念論哲学の完成者。自然、歴史、精神の全世界を不断の運動、変化、発展の過程とし、これを絶対精神の弁証法的発展として把握した。著書に『精神現象学』『論理学』『エネチクロペデー』などがある。

**マルクス** (一八一八〜一八八三) ドイツの哲学者。一八四九年以後ロンドンに居住。はじめヘーゲル左派に属したが、四〇年代の中頃、エンゲルスとともに科学的社会主義の立場を創始し、資本主義を批判した。主著に『資本論』がある。

マルクス (一八一八〜一八八三) ドイツの哲学者。一八四九年以後ロンドンに居住。はじめヘーゲル左派に属したが、四〇年代の中頃、エンゲルスとともに科学的社会主義の立場を創始し、資本主義を批判した。主著に『資本論』がある。

生産力 物質的財貨を生産すること。社会の生産力は、生産手段と労働力が一定の生産関係を通じて結合することによって生み出されるとされる。

トインビー (一八八九―一九七五) イギリスの歴史家。独自の史観で世界諸文明の興亡の一般法則を体系づけた。主著に『歴史の研究』がある。

ニュートン力学 ニュートンは、物体の運動を単純な運動法則に従って決定論的に動くのとも考え、これを運動方程式に書き表わした。そこでは、ある時点での物体の質量や物体にかかる力や速度を決めれば、その後の物体の位置や速度はすべて決定される。ここでは、結果は、すべて原因(初期条件)の中に含まれていると考えられている。しかし、これでは、風になびく木の葉の着地点も、鳥がどこへ飛んでいくかも、予測できない。

マルク・ブロック (一八八六―一九四四) フランスの歴史学者。ヨーロッパ中世史の研究者。著書に『封建社会』などがある。

ブライアン・アサー (一九四五―) アイルランド生まれの数理経済学者。アメリカで活躍。経済や技術における自己強化現象や経路依存現象に注目し、特に製品の使用に伴う収穫増を数理的に解析した。近代経済学の均衡理論を逆転し、複雑系経済学の先駆者となった。著書に『収益増と経路依存』などがある。

### 第3章

ブルクハルト (一八一八―一八九七) スイスの文化史家。ルネサンス文化の研究によって文化史に新生命を吹き、歴史哲学的考察にも深遠な洞察力を示した。主著に『イタリア・ルネサンスの文化』『ギリシア文化史』『世界史的諸考察』などがある。

シュンペーター (一八三三―一九五〇) オーストリア出身。後、アメリカで活躍。ケインズと並ぶ二十世紀最大の経済学者。新製品や新市場など、企業者の革新が資本主義的経済発展の原因であることを主張した。著書に『経済発展の理論』『経済分析の歴史』などがある。

ヤスパース (一八八三―一九六九) ドイツの哲学者。初め精神医学者。世界観の心理学で世界観の類型論を志し、ついで、実存哲学の代表者の一人となる。著書に『現代の精神的状況』『哲学』『歴史の起源と目標』などがある。

エラン・ヴァイタール ベルクソン哲学の用語。その著『創造的進化』の中で用いられた。

トウキュディデス (前四六〇頃―前四〇〇頃) 古代ギリシア(アテナイ)の歴史家。透徹した史観と公平・正確な叙述によって、後世史家の模範となる。主著『歴史』八卷(未完)で、ペロポネソス戦争の歴史を記述した。

## 第4章

信長公記 織田信長の一代記。太田牛一著。一六〇〇年頃成立。

クローチエ (一八六六―一九五二) イタリアの哲学者。特に、歴史哲学をはじめ、芸術と言語について独自の表現理論を展開した。著書に『歴史叙述の理論と歴史』『美学』などがある。

ランケ (一七九五―一八八六) ドイツ近代歴史学の祖。厳密な史料批判と史実の精緻・鋭利な客観的叙述によって、新学風を樹立した。著書に『ローマ教皇史』『プロイセン史』『世界史』などがある。

ホイジンガ (一八七二―一九四五) オランダの歴史学者。ヨーロッパ中世文化史研究に新生面を開く。著書に『中世の秋』などがある。

不確定性原理 ミクロの粒子の位置と運動量の測定の当たって、両方ともに正確な値を得ることは原理的に不可能な場合があることを示した量子力学の原理。一九二七年、ハイゼンベルクによって提唱された。

エッシャー (一八九八―一九七二) オランダの版画家。独特の幾何学的方法論を駆使して、幻想的な多義図形を制作した。

E・H・カー (一八九二―一九八二) イギリスの外交官、国際政治学者、歴史家。国際政治における理想と現実の関係を考察。また、ロシア革命史を研究した。著書に『ソ連史』『歴史とは何か』などがある。

シュベングラール (一八八〇―一九三六) ドイツの哲学者。文明史家。主著『西欧の没落』で、世界の諸文化を形態学的に観察し、文化周期の見地から、現在の西欧文化はすでに没落の段階に達していると主張した。

## 第5章

四世・鶴屋南北 (一七五五―一八二九) 歌舞伎脚本作者。一八一一年(文化八年)南北の名を襲ぎ、舞台構成の奇想と煽情的な作風で時代に迎えられた。代表作に「東海道四谷怪談」などがある。

解釈学 解釈の方法や理論を取り扱う学問。元は聖書解釈の方法学として出発した。その後、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ディルタイが、一切の人間精神の産物を体験の表現としてとらえた上で、それを理解するための解釈の方法、規則、理論の学として、解釈学を唱えた。

精神科学の基礎的方法。

デカルト (一五九六―一六五〇) フランスの哲学者。後、オランダで思索に専念。スウェーデン



で説、あらゆる知識の絶対確実な基礎を求めて一切を方法的に疑った後、それでも疑いえない確実な真理として考える我々を見出し、精神と物体を互いに独立な実体とする二元論の哲学体系を樹立した。著書に『方法序説』『省察』『哲学の原理』などがある。

**アステカの人身御供** 十四世紀から十六世紀初頭までメキシコ盆地に栄えたアステカ王国には、神は人間の血を好むという信仰があり、そのため、捕虜や奴隷などの心臓をえぐり、毎年、人身御供として神に捧げる儀式が盛んに行なわれた。この野蛮な風習は、現代人からは理解困難である。

**ガダマー** (一九〇〇～二〇〇二) ドイツの哲学者。デイルタイやハイデッガーの思想を継承しながら、哲学的解釈学を確立した。古典文献学に造詣が深い。その哲学的解釈学は、人間存在の歴史性に関するハイデッガーの分析と、プラトン研究によって育まれた人文主義的精神の二つの柱から成り立っている。主著に『真理と方法』がある。

**ハイデッガー** (一八八九～一九七六) ドイツの哲学者。デイルタイやフッサールに源泉をもつ解釈学的現象学によって、人間存在のあり方を分析し、存在の真理を追求した。主著に『存在と時間』などがある。

**ダンテ** (一二六五～一三二一) 中世と近世との分水嶺に位置するイタリアの詩人。政治に加わり、一三〇〇年、フィレンツェ共和国の六統領の一人となったが、翌年追放され、半生を放浪しながら文学に精進した。著書に『神曲』などがある。

**ポストモダン** 建築・芸術・思想などの領域で、近代主義を超えようとする傾向。  
**兼横令** 法令によって個人の貸借関係を破棄させること。江戸幕府・諸藩で、札差などから諸大名・旗本・御家人などに貸与した金穀の返納を免除する令。

**ダント** (一九二四～) アメリカの美術批評家、哲学者。その著『物語としての歴史』の中で、分析哲学の立場から、歴史記述は物語文からなるとし、あらゆる歴史的説明は、開始と中間と終焉からなる物語だと主張した。

**ヘイドン・ホワイト** (一九二八～) アメリカの批評家。歴史理論家。その著『メタヒストリー』で、歴史を記述した作品を物語的・散文的形態をとった言語構造体ととらえ、歴史の詩学の名のもとに、その構造体のメタヒストリカルな形式的分析を試みた。

**トクヴィル** (一八〇五～一八五九) フランスの政治家。一八三〇年代に米国を旅行。その見聞を基にした『アメリカの民主政』は、アメリカ研究の古典となった。  
**パーク** (一七二九～一七九七) イギリスの政論家。ホイッグ党員。ジョージ三世の専制に反対すると同時に、フランス革命の過激化にも反対した。近代の政治的保守主義の祖。著書に『フランス革命についての省察』などがある。

**レーヴィット** (一八九七～一九七三) ドイツのユダヤ系哲学者。ハイデッガーに師事。ナチスを逃

れて来日。東北帝国大学を経て、その後アメリカに移り、最後にハイデルベルク大学教授に就く。特に、精神史・思想的方面から現代の問題を抉り出すすぐれた業績を残した。著書に

『ヘーゲルからニーチェへ』『ヨーロッパのニヒリズム』『世界史と救済史』などがある。

**世界精神** ヘーゲルの哲学で、世界史のうちに自己を展開し実現する絶対精神のことをいう。

**エンゲルス** (一八二〇―一八九五) ドイツの思想家、革命家。マルクスとともにマルクス主義の創始者となった。著書に、マルクスとの共著で『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』がある。単著としては『反デュリング論』などがある。

**千年王国説** キリスト教で、キリスト再来の日に死んだ義人が復活し、サタンが獄につながれて千年間キリストが平和の王国に君臨し、その後、サタンとの戦争を経て一般人の復活があり、最後に審判が降されるという信仰。

## 第6章

**ニーチェ** (一八四四―一九〇〇) ドイツの哲学者。ヨーロッパの歴史をニヒリズムの顕在化の過程としてとらえ、西欧近代文明を批判。伝統的形而上学を、幻の背後世界を語るものとして拒否し、神の死を告げた。力への意志と永遠回帰を説き、近代を乗り越えようとした。著書に『悲劇の誕生』『ツァラトゥストラはこう語った』『善悪の彼岸』『反時代的考察』などがある。

**世界内存在** ハイデッガーが『存在と時間』で提示した基礎的存在論の中心概念の一つ。主体としての人間が対象世界と向かい合いそれに迫っていくという近世哲学の構図を排し、みずから常に一定の具体的な世界の中にあることを見出す人間のあり方を特徴付ける概念。

**ヴァイトゲンシュタイン** (一八八九―一九五二) オーストリア出身の哲学者。イギリスやアイルランドで活躍。言語批判を課題とした哲学を展開。前期の『論理哲学論考』では、言語を環境と切り離して論理的に取り扱ったが、後期の『哲学探究』では、言語的発話に意味を与えるへ生の流れの重要性を強調し、言語ゲーム論を展開した。

なお、この人名・用語解説作成にあたっては、『広辞苑』『哲学・思想事典』(以上、岩波書店)、『日本史辞典』『世界史辞典』(以上、角川書店)などを参照した。

あとがき

私は、ここ二十年近く、生命論的世界観の構築とでもいうべき仕事に従事し、その観点から、今まで、自然哲学や宗教哲学、実践哲学や文明理論、存在論や認識論などを展開してきました。本書は、同じ観点から歴史について考察したものです。本書の歴史の考察の背景に進化論のモデルがあるのは、私の生命論的世界観からきています。

二十世紀の後半以来、自己組織化理論やカオス理論、さらに、それらの総合としての複雑系理論など、いわゆるシステム論的見方から、自然を履歴をもったものとして認識しようとする自然科学の新しい傾向が起きてきました。これ自身、科学における一種のポストモダンリズムなのですが、自然は自然史であり、自然界の出来事も自然の来歴を調べなければ理解できないと考えられるようになってきたのです。そして、これらシステム論的見方は、どれも、諸要素の相互作用からその総和以上の新しい形態や構造が創発してくる現象に注目し、自然の中に、非決定性と不可逆性、予測不可能性と不規則性、不安定性と不確実性を見てきました。これは、自然を生きたものとしてみ、生命論的にとらえる考えだと言えるでしょう。

しかし、これらのことは、自然はもちろん、歴史にこそよく成り立ちます。本書の中で、歴史の構造を新しく読み解くために、この二十世紀後半以来自然科学の方から起きてきた科学の新しい見方と結びつけながら歴史を考えてみたのは、そのことによります。

本文でも述べておきましたが、歴史は、無数の出来事の相互連関から常に新しいものを創造していく動的系です。そのかぎり、歴史は、出来事と出来事の偶然の出会いから形成される非決定的で予測不可能なものと考えねばなりません。それは単調に進歩していくものではなく、創造と破壊を繰り返しながら、急激に飛躍していきます。なぜ歴史は飛躍するのでしょうか。歴史の中で歴史を視測し、歴史の中で歴史を行為する者が、そこにいるからです。歴史は、解釈されることよって乗り越えられ、行為することよって切り開かれていきます。過去の歴史を取り集め新しい未来を展望する創造的個人の革命的行為や発明・発見など、自由で創造的な行為を起点にして、歴史は突如として激変し、新しい秩序をつくっていきます。

このように、歴史が突如として激変し創造的に進化していくものだとすれば、歴史理論が自然科学に引つ張られて、歴史にも決定論的な法則を見出そうとしてきた十九

世紀的な考えはもはや成り立ちません。むしろ、自然科学を歴史学の方へ近づけて、自然や科学をも歴史的なものとして理解する必要があります。

本書は、歴史哲学あるいは歴史理論の分野に属する著作です。哲学とか理論という  
と難しく聞こえますが、本書は、それでも、大学初年クラスを念頭に、できるだけ分  
かりやすく説いたつもりです。



